

# 門田貝塚

1983. 3

岡山県教育委員会  
文化課

## 序

本報告書には、宅地化が進行しつつある門田貝塚の確認調査結果を収めました。

ここに収めました門田貝塚の確認調査は、埋蔵文化財の保護・保存の資料を得ることを目的として、昭和57年度国庫補助事業として行われたものであります。

調査の結果、弥生時代前期の大規模な溝や貝塚、それらに伴う多量の石器・骨角器・土器等の出土遺物を発掘し、弥生時代前期から鎌倉時代にかけての良好な複合遺跡であることが確認できました。

これらの成果を収めた本報告書が、文化財の保護・保存のため活用され、また、地域の歴史を研究する資料として役立てば幸いと存じます。

最後に、発掘調査ならびに報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委員をはじめ、邑久町教育委員会ならびに土地所有者等関係各位から賜わりました多大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和58年3月

岡山県教育委員会

教育長 佐藤 章一

## 例　　言

1. 本書は、昭和57年度国庫補助事業にかかる邑久郡邑久町尾張所在門田（かどた）貝塚の範囲確認調査報告書である。
2. 発掘調査は、第一次調査を昭和57年5月10日から8月12日にかけて、第二次調査を同年11月24日から12月16日にかけて実施した。現地発掘調査の実施にあたっては、専門委員会ならびに埋蔵文化財係長河本清の指導のもとに、文化課職員岡田博が担当した。なお、現地では、邑久町教育委員会をはじめ地元の方々の暖かいご協力をいただいた。記して深甚の謝意を表する次第である。
3. 遺構図の作成は、岡田が行い、有森万久・赤松光晴の援助を受けた。遺構番号は、その略号を以下のように統一した。柱穴列（掘立柱建物の一部）：SB, 溝：SD, 穫穴住居址：SH, 井戸：SE, 土壙：SK, 柱穴：SP, 性格の不明な遺構：SX とし、2桁の番号を付した。
4. 現地での写真撮影は岡田があたり、遺物写真については文化課職員井上弘の撮影によるものである。
5. 報告書に掲載した実測図の作成にあたっては、遺構及び土器については岡田があたり、一部の土器について有森、赤松、小竹森直子（岡山大学学生）の援助をうけた。石器は、その大半を山田雅子（岡山大学学生）が行い、一部については平井典子・山本悦世・亀田菜穂子の援助をうけた。遺物実測図の淨写は、石器の大半を文化課職員柳瀬昭彦・平井勝、土器の一部を同岡本寛久の援助を受け、岡田が行った。第1図の周辺遺跡分布図の作成は岡本によるものである。なお、出土遺物には以下の分類番号を付した。土器・土製品：通し番号、石器・石製品：S番号、金属製品：I番号、玉類：B番号、骨角器：A番号。
6. 獣骨、歯牙、骨角器の鑑定については、早稲田大学考古学研究室金子浩昌先生の手をわざらわせ玉稿を掲載させていただいた。記して深謝の意を表する次第である。
7. 出土遺物、写真、実測図の整理、作成等は、昭和57年11月から2月にかけて、文化課分室（岡山市西古松）にて行い、それらは同所に保管している。

# 目 次

## 序

## 例 言

## 本文目次

第1章 歴史的・地理的環境 .....	1
第2章 調査の経緯 .....	4
第1節 調査に至る経過と概要 .....	4
第2節 調査の方法と調査体制・日誌抄 .....	5
第3章 発掘調査の概要 .....	13
(1) 第1地点 .....	13
(2) 第2地点 .....	33
(3) 第3地点 .....	40
(4) 第4地点 .....	51
(5) 第5地点 .....	53
(6) 第6地点 .....	55
(7) 第7地点 .....	59
(8) 第8地点 .....	61
(9) 第9地点 .....	61
第4章 考 察 .....	63
第1節 弥生時代前期の遺構と土器 .....	63
第2節 主要な遺構・遺物について .....	66
(1) 弥生時代中期～古墳時代 .....	66
(2) 奈良・平安時代 .....	67
(3) 中世 .....	67
第5章 門田貝塚確認調査時に出土した動物遺存体 .....	69

## 図 目 次

第1図 門田貝塚の位置と周辺の遺跡分布図 (1/50,000) .....	2
第2図 確認調査対象区域図 (1/3,000) .....	6
第3図 発掘調査区全体図 (1/750) .....	7～8
第4図 T 1-S K01出土土器実測図 (1/4) .....	13
第5図 T 1出土石器 (石庖丁, 石錘, 石斧) 実測図 (1/3) .....	14

第6図	T 1 出土土器実測図（1/4）	14
第7図	T 1 実測図（1/60）(折込み)	15~16
第8図	T 2 実測図（折込み）	15~16
第9図	T 2-S K02土層断面図（1/30）(折込み)	15~16
第10図	T 2-S K02断面図（1/30）(折込み)	15~16
第11図	T 2-S D02断面図（1/30）	15~16
第12図	T 2-S E01土層断面図（1/30）	17
第13図	T 2-S K02出土土器実測図（1/4）	18
第14図	T 2-S E02出土土器実測図（1/4）	18
第15図	第1地点出土遺物実測図（1/2）	19
第16図	第1地点出土土器実測図（1/4）	19
第17図	T 1・T 5出土臼玉実測図（1/1）	19
第18図	第1地点出土石器（石鎌・石錐・石庖丁）実測図（1/2）	19
第19図	T 3 実測図（1/60）	20
第20図	T 3-S B01土層断面図（1/30）	20
第21図	T 3-S K04土層断面図（1/30）	20
第22図	T 4 実測図（1/60）	21
第23図	T 4-S B02土層断面図（1/30）	21
第24図	T 5 実測図（1/60）	22
第25図	第1地点（T 3・5）・第2地点（T 14）出土縁釉陶器実測図（1/2）	23
第26図	T 5出土石錐実測図（1/3）	24
第27図	T 6 実測図（1/60）	24
第28図	T 6-S D03出土土器実測図(1)（1/4）	25
第29図	T 6-S D03出土土器実測図(2)（1/4）	26
第30図	T 6-S D03及び上面出土土器実測図（1/4）	27
第31図	T 5・T 6出土土器実測図（1/4）	27
第32図	T 7 実測図（1/60）	28
第33図	T 7-S D04実測図（1/30）	29
第34図	T 7-S D05実測図（1/30）	29
第35図	T 7-S D04出土土器実測図（1）(1/4)	29
第36図	T 7-S D04出土土器実測図(2)（1/5）	30
第37図	T 7-S D05出土砥石実測図（1/4）	30
第38図	T 7出土砥石実測図（1/3）	30

第39図	T 7—S D 05出土土器実測図（1/4）	31
第40図	T 5・T 7出土陶硯実測図（1/2）	32
第41図	T 7—S E 04土層断面図（1/30）	32
第42図	T 7—S E 04出土遺物実測図(青磁・瓦器・土師器)（1/4）	32
第43図	T 8 実測図（1/60）	33
第44図	T 8 出土土器実則図（1/4）	33
第45図	T 9 実測図（1/60）	34
第46図	T 9・T 27出土土器実測図 (ミニチュア土器・彩文土器・木葉文土器)(1/2)	34
第47図	T 9—S X 08出土有孔円板・臼玉実測図（1/1）	35
第48図	T 9—S X 08出土ミニチュア土器実測図（1/2）	35
第49図	T 18実測図（1/60）	36
第50図	T 18—S D 06・包含層出土土器実測図（1/4）	36
第51図	T 27実測図（1/60）	37
第52図	T 27—S D 06・包含層出土土器実測図（1/4）	37
第53図	T 14土層断面図（1/80）	38
第54図	T 14出土磨製石砲丁実測図（1/2）	38
第55図	T 14包含層・S E 05・S X 10出土土器実測図（1/4）	39
第56図	第2地点出土石器（石鎌・石錐・石庖丁など）実測図（1/2）	40
第57図	T 10実測図（1/60）	41
第58図	T 10—S P 04土層断面図（1/30）	41
第59図	T 10—S E 04実測図（1/30）	41
第60図	T 10出土磨製石庖丁実測図（1/2）	42
第61図	T 16実測図	42
第62図	T 16—S P 06・07土層断面図（1/30）	42
第63図	第3地点（T 10・16・32）出土土器実測図（1/4）	43
第64図	T 12実測図（1/60）	44
第65図	T 11実測図（1/60）	44
第66図	T 12出土土器実測図（S X 11・包含層・S D 03上層)(1/4)	45
第67図	T 12—S D 03出土土器実測図(1)(1/4)	46
第68図	T 12出土土製円板実測図（1/3）	46
第69図	T 12出土磨製石庖丁実測図（1/2）	46
第70図	T 12—S D 03出土土器実測図(2)(1/4)	47

第71図	T12—S D03出土骨角器実測図（1/2）	47
第72図	T12—S D03出土土器実測図（1/3）（1/4）	48
第73図	第3地点出土石鎌実測図（1/2）	48
第74図	第3地点出土遺物実測図（土器・ミニチュア土器・銅錢・鉄器）（1/2）	49
第75図	T13実測図（1/60）	49
第76図	T13—S X12出土土器実測図（1/4）	49
第77図	T32土層断面図（1/80）	50
第78図	T32出土土器実測図（1/4）	50
第79図	T33実測図（1/60）	50
第80図	T17土層断面図（1/80）	51
第81図	T17出土土器実測図（1）（包含層・S D08）（1/4）	52
第82図	T17出土打製石庖丁実測図（1/3）	53
第83図	T17出土土器実測図（2）（1/4）	53
第84図	T15出土鏡形土製品実測図（1/2）	53
第85図	T15実測図（1/60）	54
第86図	T15出土土器実測図（1/4）	54
第87図	T19実測図（1/60）	55
第88図	T19出土石鎌実測図（1/2）	55
第89図	T20実測図（1/60）	55
第90図	T21実測図（1/60）	55
第91図	T19出土土器（S D09・S K08ほか）実測図（1/4）	56
第92図	T22実測図（1/60）	56
第93図	T23実測図（1/60）	56
第94図	T19~22—S D10出土土器実測図（1/4）	57
第95図	T19~20—S D10出土石器実測図（1/3）	58
第96図	T21出土砥石実測図（1/3）	58
第97図	T24実測図（1/60）	59
第98図	T24出土ミニチュア土器実測図（1/2）	59
第99図	T25実測図（1/60）	60
第100図	T25—S K09実測図（1/30）	60
第101図	T25—S K09出土土器実測図（1/4）	60
第102図	T25—S K09出土臼玉実測図（1/1）	60
第103図	T31実測図（1/60）	60

第104図	T 31出土土器実測図（1/4）	60
第105図	T 26実測図（1/60）	61
第106図	T 26出土木葉文土器実測図（1/2）	61
第107図	T 28実測図（1/60）	62
第108図	T 29実測図（1/60）	62
第109図	T 30実測図（1/60）	62
第110図	T 30—S D 13出土土器実測図（1/4）	62
第111図	弥生式土器（前期～中期中葉）器種変遷図（1/10）	87

## 表 目 次

第 1 表	緑釉陶器一覧表	23
第 2 表	石器・金属製品・玉類一覧表	75, 76
第 3 表	土器観察表（土器・土製品）	77～86

## 図版目次

- 図版 1—1 門田貝塚航空写真（北上空から）
  - 2 門田貝塚中心部分（西から）
- 図版 2—1 T 2 遺構検出状況（東から）
  - 2 T 4 遺構検出状況（南から）
  - 3 T 2—S K 02検出状況（北から）
- 図版 3—1 T 2—S E 01土器出土状況（北から）
  - 2 T 2—S E 01全景（北から）
- 図版 4—1 T 2—S D 02（南から）
  - 2 T 2—S K 03完掘状況（北から）
- 図版 5—1 T 2—S E 02完掘状況（東から）
  - 2 T 3—S K 04検出状況（北から）
- 図版 6—1 調査区西半部の状況（南東から）
  - 2 T 3—S B 01西端柱穴（南から）
- 図版 7—1 T 3—S B 01中央柱穴（南から）
  - 2 T 4—S B 02全景（北東から）
- 図版 8—1 T 4—S B 02南端柱穴（東から）
  - 2 T 4—S B 02中央柱穴（東から）
- 図版 9—1 T 4—S B 02北端柱穴（東から）
  - 2 T 6—S D 03検出状況（西から）
- 図版10—1 T 6 北隅遺構検出状況（東から）

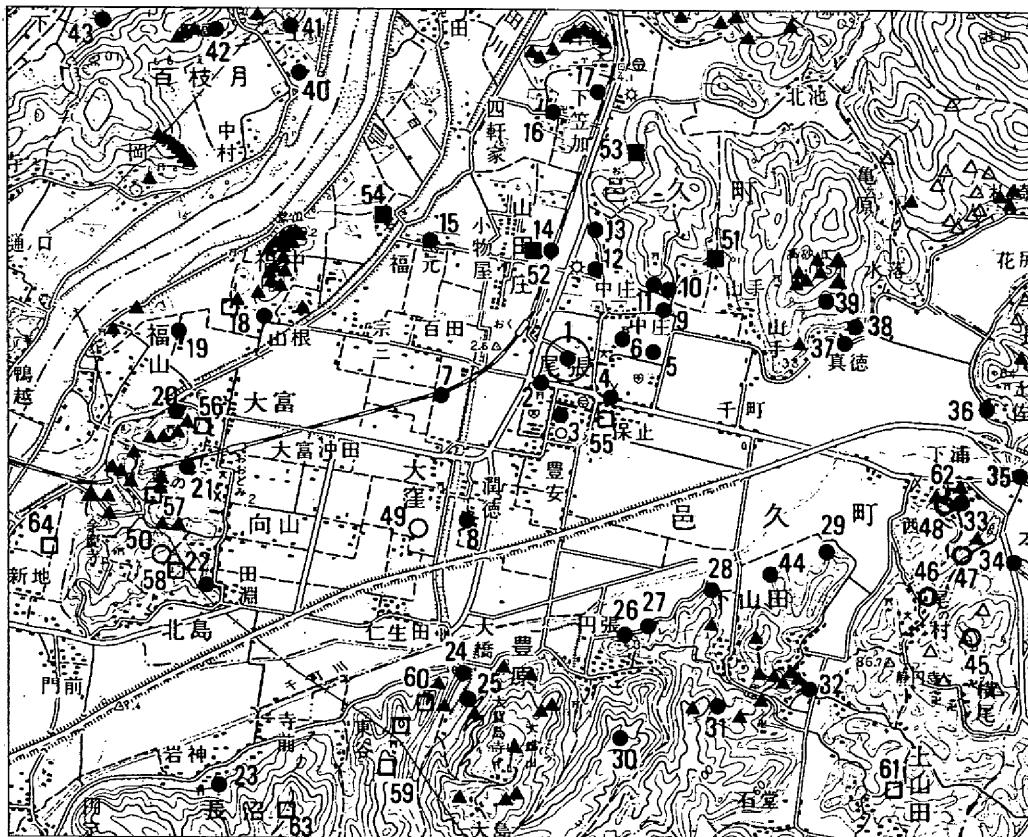
- 2 T 6—S P 03検出状況（西から）  
図版11—1 T 7—S D 04検出状況（東から）  
2 T 7—S D 05検出状況（東から）  
図版12—1 T 7—S D 05土器集中部分（東から）  
2 T 7—S X 06完掘状況（西から）  
図版13—1 T 7—S E 04完掘状況（西から）  
2 T 9—S D 06上面貝層検出状況（北から）  
図版14—1 T 9—S D 06上面貝層（南から）  
2 T 9—S D 06貝層清掃状況（北から）  
図版15—1 T 27—S D 06完掘状況（西から）  
2 T 18遺構検出状況（南西から）  
図版16—1 T 18—S D 07完掘状況（西から）  
2 T 18—S X 07検出状況（東から）  
図版17—1 T 14—S X 10検出状況（南から）  
2 T 12—S X 11完掘状況（東から）  
図版18—1 T 12—S D 03掘り下げ状態（南西から）  
2 T 12南隅S D 03土層断面（北から）  
図版19—1 T 12北隅S D 03土層断面（南から）  
2 T 12—S D 03下層獸骨出土状況（西から）  
図版20—1 T 13—S X 12検出状況（北から）  
2 T 13—S X 12土器出土状態（東から）  
図版21—1 T 10遺構検出状況（南から）  
2 T 10—S P 04検出状況（西から）  
図版22—1 T 10—S P 05検出状況（東から）  
2 T 10—S E 06検出状況（西から）  
図版23—1 T 10—S E 06完掘状況（南西から）  
2 T 15遺構検出状況（北西から）  
図版24—1 T 24遺構検出状況（西から）  
2 T 25遺構検出状況（南西から）  
図版25—1 T 25—S K 09完掘状況（北から）  
2 T 28遺構検出状況（西から）  
図版26—1 T 26遺構検出状況（南から）  
2 T 30—S D 13検出状況（西から）

- 図版27—1 T19—S D09・10完掘状況（北から）  
2 T23遺構検出状況（南から）  
3 T19北隅S D10土層断面（南から）
- 図版28—1 T21—S D10完掘状況（北から）  
2 T21—S D10南壁土層断面（北から）
- 図版29—1 T22—S D10土器埋積状況（東から）  
2 T19—S K08検出状況（東から）
- 図版30 出土遺物（弥生式土器・土師器・須恵器・縄釉陶器）
- 図版31 出土遺物（弥生式土器・土師器）
- 図版32 出土遺物（弥生式土器）
- 図版33 出土遺物（弥生式土器・瓦器・製塙土器・木葉文土器・彩文土器）
- 図版34 出土遺物（臼玉・弥生式土器・須恵器）
- 図版35 出土遺物（弥生式土器）
- 図版36 出土遺物（弥生式土器・重弧文土器・木葉文土器）
- 図版37 出土遺物（ミニチュア土器・須恵器・弥生式土器・鏡形土製品）
- 図版38 出土遺物（弥生式土器・土師器・ミニチュア土器・木葉文土器・骨角器）
- 図版39 出土遺物（サヌカイト製石鎌・石錐）
- 図版40 出土遺物（石鎌・石錐・砥石・石庖丁・石斧）
- 図版41 出土遺物（石庖丁・石斧・砥石）
- 図版42—1 貝  
2 魚骨・獸骨
- 図版43—1 獣骨（イノシシ）  
2 獣骨（ニホンジカ・イノシシ）
- 図版44—1 ニホンジカ（角）  
2 ウマ

# 第1章 歴史的・地理的環境

岡山県をほぼ南北に流れる三大河川のひとつ、吉井川はその中流域・下流域で肥沃な沖積平野を形成し、とりわけ、この長船町・邑久町に至ると、その川幅もひときわ広くなり瀬戸内海へ注ぐ。この平野部には、この吉井川の沖積作用によって低冲積地が形成され、自然堤防上には数多くの遺跡が点在する。瀬戸内海は古くは、現在の千町平野と呼ばれるこの沖積平野の中ほどまで入りこんでいたが、活発化した沖積作用によって急速に陸化されていった。この時期には、平野部縁辺の丘陵裾部には数多くの貝塚が形成され、いわゆる干潟の貝を伴う主かん貝塚が確認されている。中でも縄文時代前期に比定される大橋貝塚では人骨が出土したり、貝層とそれに伴って縄文式土器が多数確認されている。(註1)一方、陸化によって生じた沖積地の微高地には弥生時代前期から人々の居住が開始され、稻作に適したこの沖積平野の人口の増大を推定できる。この段階では幾筋もの河道が吉井川本流から派生していたものと考えられ、その河道は古代人の稻作に欠くべからざる存在として、彼らの生活を根底から支えたことが想像される。この平野部を中心とした地域では第1図に掲げるよう弥生時代から古墳時代にかけての集落が連綿として営まれ、部分的には奈良・平安、中世に至って存続したことが、近年明らかにされつつある。1982年調査が実施された尾張助三畠遺跡(註2)では、弥生時代中期から近世にかけての遺構が検出され、これらに伴って多量の出土遺物が得られた。ことに、弥生時代中期の灌漑用水路と思われる溝は規模も大きく、その数も4条に及ぶ。門田貝塚は、このように弥生時代に入って飛躍的に増大した沖積地の集落遺跡のひとつとして、古くより知られ、ことに「弥生時代前期の貝塚」として著名である。近年の調査では、門田貝塚の立地する海拔約2mほどの微高地上に数多くの集落が存在することが明らかにされた。先述の助三畠遺跡をはじめ、畠中遺跡(註3)・月の木遺跡(註4)がその一部が調査対象となって、各々成果を収めている。これらの遺跡はほぼ南北に弧状に連なり、一連の自然堤防上の遺跡群のまとまりを示している。これらの遺跡と門田貝塚の相違する点は無論、貝塚を伴うことにより、更に弥生時代後期から古墳時代にかけての製塩土器が多く出土していることである。前者・後者ともに当時の海岸線との遠からぬ距離をある程度示しているといえる。

弥生時代中期になると、平野部だけでなく、周辺の丘陵部にも集落が形成され始める。また、古墳時代になると古墳の造営も始まり、平野部の集落もまた発展し後期に至って寒風窯址群などでは須恵器生産が開始され、恵まれた陶土と薪材を背景に、奈良時代に至るまで発展的に存続する。門田貝塚所在地は、奈良時代の邑久郡の中心地である尾張郷で、交通に至便かつ、安定した集落形成地として連綿と続いたことが推察される。ことに、中世に至ると、この傾向は



- 弥生時代以前に出現  
した集落址・散布地
- 古墳時代以後に出現  
した集落址・散布地
- ▲ 古墳・古墳群
- 寺院跡
- △ 窯跡
- 城跡
- |                  |                  |                                |                 |
|------------------|------------------|--------------------------------|-----------------|
| 1. 門田貝塚 (弥生~)    | 19. 福山東畑散布地 (弥生) | 36. 土佐貝塚 (弥生~)                 | 52. サアナ寺跡 (室町)  |
| 2. 堂免貝塚 (弥生~)    | 20. 大富貝塚 (弥生)    | 37. 真徳B貝塚 (弥生)                 | 53. 南寺跡         |
| 3. 尾張助三畝遺跡 (弥生~) | 21. 奥の谷貝塚 (弥生)   | 38. 真徳A貝塚 (弥生)                 | 54. 大山寺跡 (奈良?)  |
| 4. 水南遺跡 (弥生~)    | 22. 田渕A貝塚 (弥生)   | 39. 敷地 (弥生)                    | 55. 尾張城跡 (室町)   |
| 5. 拝登遺跡 (弥生~)    | 23. 岩神貝塚 (縄文・弥生) | 40. 百枝月西橋遺跡 (弥生)               | 56. 大富城跡        |
| 6. 品治遺跡 (弥生)     | 24. 大橋貝塚 (縄文)    | 41. 北ノ房遺跡 (弥生)                 | (光明寺城) (室町)     |
| 7. 百田遺跡 (弥生)     | 25. 大橋谷貝塚 (弥生)   | 42. 百枝月遺跡 (先土器・<br>弥生) (銅鏹出土地) | 57. 今木城跡 (室町)   |
| 8. 蘭徳遺跡 (弥生)     | 26. 蔽が端貝塚 (弥生)   | 43. 敷地 (弥生)                    | 58. 向山城跡 (室町)   |
| 9. 半田前遺跡 (弥生~)   | 27. 円張東貝塚 (弥生)   | 44. 烏博遺跡 (弥生)                  | 59. 鷹取城跡 (室町)   |
| 10. 半田貝塚 (弥生)    | 28. 船原棍ヶ端貝塚 (弥生) | 45. 本庄A遺跡 (古墳~)                | 60. 砥石城跡 (室町)   |
| 11. 宮下貝塚 (縄文)    | 29. 扇ヶ端貝塚 (弥生)   | 46. 本庄B遺跡 (奈良?)                | 61. 上山田城跡 (室町?) |
| 12. 當中遺跡 (弥生~)   | 30. 円張南山頂上       | 47. 本庄C遺跡                      | 62. 殿山城跡 (室町?)  |
| 13. 月の木遺跡 (弥生~)  | 散布地 (弥生)         | 48. 国司散布地 (古墳~)                | 63. 長沼城跡 (室町)   |
| 14. サアナ貝塚 (弥生)   | 31. 井戸元遺跡 (弥生)   | 49. 仁生田遺跡                      | 64. 射越城跡 (室町)   |
| 15. 福元遺跡 (弥生~)   | 32. 幸田木散布地 (弥生)  | 50. 東谷散布地 (古墳)                 |                 |
| 16. 下笠加遺跡 (弥生~)  | 33. 向山散布地 (弥生~)  | 51. 尾張廃寺                       |                 |
| 17. 国城遺跡 (弥生)    | 34. 長谷口貝塚 (弥生)   |                                |                 |
| 18. 山根散布地 (弥生)   | 35. 石仏貝塚 (弥生)    | (半田寺址) (奈良~)                   |                 |

第1図 門田貝塚の位置と周辺の遺跡分布図 (1/50,000)

一層強まり、集落の規模・性格を変質させつつも、前述の助三畠遺跡でも明らかにされた中世集落の一端にみられる、畿内からの瓦器の移入、青・白磁等の中国からの交易による輸入など出土遺物の豊富さと多様さがみられるようになる。現在に至ってもこの地では、交通網の中心地でもあり、邑久町の中心地をなしているのは、その地勢の優位性によるところが大であるといえるかもしれない。

(註)

- (註1) 岡本寛久「大橋貝塚発掘調査報告」(岡山県埋蔵文化財報告9所収) 1979年 岡山県教育委員会刊。
- (註2) 1982年1月から9月にかけて岡山県教育委員会、邑久町教育委員会が発掘調査を実施した。邑久町の社会福祉施設（老人憩の家、保健衛生センター）や公民館の建設に伴う事前調査。
- (註3) 平井泰男・光永真一「畠中遺跡確認調査報告」(岡山県埋蔵文化財報告12所収) 1982年 岡益県教育委員会刊。邑久町山田庄所在遺跡で、個人の宅地造成に伴って一部確認調査が行われ、前期弥生式土器を伴う土壙が確認されている。遺構検出面は海拔約1.6mで、門田貝塚の北方約500mに位置する。
- (註3) 用水路建設に伴う緊急発掘調査が1983年1月実施され、海拔1.4mの微高地上で、幅3.4～3.5m、深さ約90cmの断面形ゆるやかな弧を描くU字溝が検出され、弥生時代前期から中期にかけての土器が出土している。邑久町教育委員会 馬場昌一氏および平井典子女史のご教示による。



邑久町の位置 (斜線部分)

## 第2章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経過と概要

門田貝塚は、邑久郡邑久町尾張に所在する集落遺跡で、吉井川が形成した肥沃な沖積地の微高地に立地する。昭和25年の地元研究者、長瀬薰・川崎務両氏による発掘（註1）や、鎌木義昌氏・ミシガン大学日本研究所による発掘（註2）に続いて、昭和37年及び41年には岡山大学文学部考古学研究室（近藤義郎氏）による発掘調査が行われた。これらの発掘調査（註3）によって、大規模な溝（幅4～5m、深さ約1m）の存在や、これに埋められ堆積した貝層の存在が明らかとなった。この貝層は主にハイガイ・カキ・シジミなどによって形成され、猪・鹿などの獣骨や骨角器も共伴出土している。更に、多量の前期弥生式土器の出土は、瀬戸内沿岸地方における指標とされ、「門田下層式」・「門田上層式」あるいは単に「門田式」と命名・呼称され、学史的に重要な遺跡として知られている。（註4）

近年、門田貝塚周辺には宅地造成や交通網の整備に伴う開発が迫り（註5）、遺跡範囲の確認調査を行い、将来の当遺跡の保護・保存を図るために、今回国庫補助事業として確認調査を実施することとなった。発掘調査は遺跡の中心を占めるとみられる畠地部分と、その周辺の水田部約12,000m<sup>2</sup>の範囲をその対象として実施した。前者については、5月10日から8月12日にかけて、後者については湯水期である冬場、すなわち11月24日から12月16日にかけて実施し、約450m<sup>2</sup>のトレンチ調査を行った。その結果、当遺跡は弥生時代から鎌倉時代にかけての保存が極めて良好な複合遺跡であることが確認された。弥生時代前期では、すでにその存在が指摘されている大溝のほかに同様の溝が更に数条存在すること、弥生時代中期から後期にかけても依然として生活の場であったことが検出遺構や出土遺物から明らかとなった。また、弥生時代後期から古墳時代にかけては、井戸・土壙・柱穴などが検出され、製塙土器の出土が注目される。更に、奈良～平安時代には大規模な掘立柱建物群が存在し、しかもそれらは規則正しく企画されて造営された可能性も十分考えられる。出土遺物では、小形円面硯片・蓋転用硯片・縁釉陶器などが注目される。中世では、主に鎌倉時代の遺構群が多く検出され、井戸・柱穴群などが集中する。これらの遺構からは、須恵器・土師器・備前焼などと共に、畿内から移入された瓦器や中国製陶磁器が出土しており、当時の日常生活用具の実態を示している。近世以降は、主に居住区あるいは畠地として利用されたものと考えられ、井戸状の土壙や隅丸方形を呈する「野つぼ」状の土壙などが検出された。今回の調査では、それらの遺構はごく一部の調査区で集中的に確認され、古代～中世の遺構の一部に及んでいるが、全体的に確認調査を妨げるもの

ではなく、また地下遺構を大きく破壊するものではない。

以上、今回実施した確認調査の概要について述べた。次章でその内容について、地点及びトレンチごとに説明を加えることとする。

## 第2節 調査の方法と調査体制・日誌抄

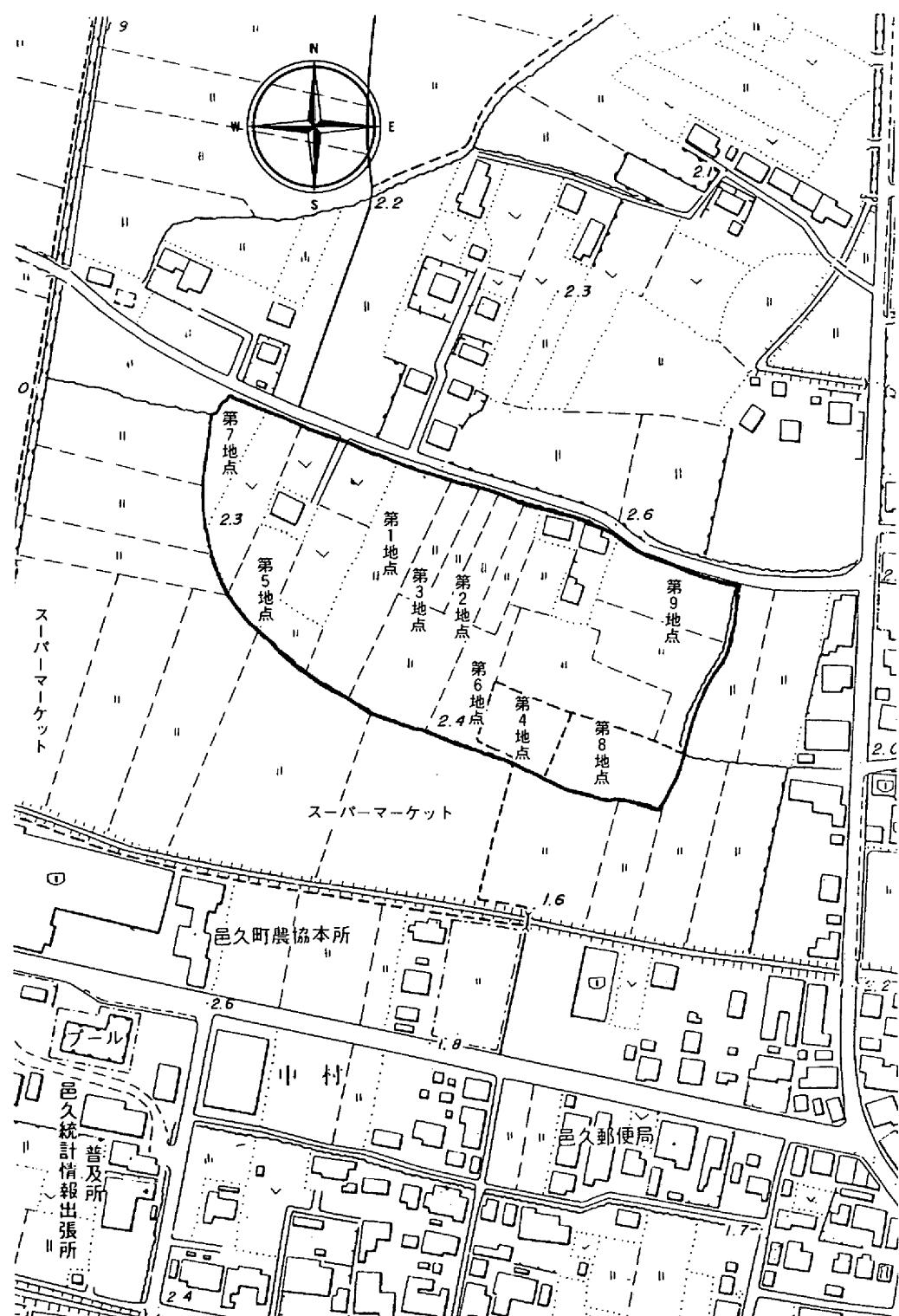
### (1) 調査の方法

今回の確認調査の対象範囲は約12,000m<sup>2</sup>にのぼる広大な面積であるが、畠一帯はほとんど通年的に自家野菜を中心とする野菜が栽培されており、発掘地の選定や掘り下げ時に伴う攪乱土と耕作土あるいは包含層形成土との混濁に留意せざるを得ず、慎重な配慮が必要となった。調査の主眼は、すでにその存在が知られている貝塚及びそれに伴う溝の性格や範囲であり、更にこれらをとりまき形成されている、集落のひろがりである。前者については、その検出確認場所が地表面の観察からもほぼ限定でき、既掘部分の南北地点に、新たなトレンチを設定することによって、その性格・形狀等についても明らかにすることとなった。後者については、地下水位の高い春から夏期にかけては畠部分の調査、秋から冬期にかけては、畠の周縁部の一段下がった水田にトレンチを設定することとした。畠地および、水田の地割線は磁北より約20度東へ振っており、ほぼそれを基準としたトレンチを設定することにした。発掘作業はすべて人力で行ない、耕土を除去した後の包含層土は、シートを敷いた上に置き、攪乱を防ぐこととし、地力の衰退等に対処した。各トレンチにおいては、海拔約1.2mの深部に及ぶと、渴水期にもかかわらず湧水が発生し、ことに弥生時代の溝や、古墳、奈良時代の井戸を発掘したT2・T12・T6などでは排水作業と掘り下げ作業を並行して行かねば、土層断面壁の観察は不可能であった。また、当遺跡の検出遺構は、重層的で幅広い時代のものが集中して検出され、しかもそれぞれ残存度が極めて高い。それらに伴う出土遺物は多岐にわたり、広汎な地域との交流や継続的な人間生活の場であったことをよく示している。これら出土遺物の総量はコンテナ箱(54cm×34cm×15cm)に約90箱にのぼっている。

遺構の掘り下げは、極力その破壊を避けることとしたが、弥生時代前期・中期の遺構面の検出に際しては上記の遺構について、やむをえず記録を残したのち掘り下げを行ったものもある。たとえば鎌倉時代の井戸などでは、掘り下げた結果観察できる周壁の土層観察によって下部遺構の存在の有無などの手がかりとした。また、土壙・柱穴の一部は全掘ないしは半截し時期推定の手がかりとした。

発掘区の埋め戻しは、掘りあげた土をほぼ元どおりに埋め戻すこととし、作業にあたってはランマーを用い、埋土には生石灰を混ぜ、不同沈下が生じないよう注意を払った。

以上、調査の方法について概略を述べたが今回の確認調査の実施にあたっては、地元邑久町



第2図 確認調査対象区域図 (1/3,000)



第3図 発掘調査区全体図 (1/750)

教育委員会をはじめ、邑久町土木委員の立岡泉氏や土地所有者の方々、ならびに地元の現地作業員の方々には並み並みならぬご協力をたまわった。録して深甚の謝意を表する次第である。

〈発掘作業協力者〉

朝倉三郎・有森万久・梶原泰男・立岡享・堀友二・大森小鶴・立岡恵美子・中村マツ子・三宅孝子・森岡桂子

〈実測協力者〉

赤松光晴・平井典子

(2) 調査体制

発掘調査は昭和57年度国庫補助事業として、岡山県教育委員会が専門委員会の指導・助言の元に実施することとなった。

調査組織

専門委員

鎌木義昌（岡山理科大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）

近藤義郎（岡山大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）

水内昌康（岡山女子高等看護専門学校教頭、岡山県文化財保護審議会委員）

教育庁文化課

課長 早田憲治

課長代理 橋本泰夫

埋蔵文化財係長 河本 清

主任 田中建治

〃 遠藤勇次

文化財保護主査 松本和男

〃 岡田 博

文化財保護主事 江見正己

〃 中野雅美

調査担当 岡田 博

（註）

（註1）出土品の大半は邑久考古館に収められている。邑久考古館は、1935年、両氏が邑久郡一帯で出土した遺物（縄文～奈良・平安時代）を収集展示したことによる起源をもつ町立の展示施設で、約100

m<sup>2</sup>の展示室には常時多数の出土遺物が展示され、門田貝塚出土遺物はその中心をなしている。収納されている前期弥生式土器には、34のようにヘラ描き沈線間に刺突文様を施すものが目立つ。長瀬薰氏は考古学論叢4に「門田貝塚の出土物」を発表し、出土遺物について紹介されている。(1937年)  
(註2) 鎌木義昌氏による発掘調査地点は、第2地点の北半部の西側の畠地である。成果については「門田貝塚の文化遺物について」(「吉備考古」第84号所収、1952年吉備考古学会刊)に紹介される。  
(註3) 近藤義郎「門田貝塚の発掘調査」(「日本考古学年報(20)」所収 1972年 日本考古学協会刊)  
(註4) 「弥生式土器集成本編」 鎌木義昌「弥生式土器集成(本編:山陽地方Ⅱ)」や高橋謙「弥生土器—山陽1(入門講座)」(考古学ジャーナル173号、1980年 ニューサイエンス社発行)にも、門田上層式・下層式の特徴について述べ、それぞれⅡ-a, Ⅱ-c期に比定されている。  
(註5) 近辺では、スーパー・マーケット・郵便局などの新築工事の際、文化課では立会いあるいは確認調査を実施している。

岡本寛久「邑久町門田貝塚周辺の立会調査」(岡山県埋蔵文化財報告10所収)、岡山県教育委員会 1980年刊。

### <日誌抄>

#### 第一次調査

4月27日(火)

午後7時半から「門田貝塚」発掘調査打合せ会ならびに説明会を地元公民館にて開催する。  
土地所有者の方々と町長・助役・教育長ならびに県文化課河本埋蔵文化財係長・岡田が出席。

5月6日(土)

発掘区の設定作業。河本・岡田。

5月10日(月)～15日(土)

器材搬入、第一次調査開始。T1～T3設定発掘調査を開始する。レベル移動及び基準杭  
設定作業を行なう。

5月17日(月)～21日(金)

T4～T6設定、表土除去後遺構検出作業。比較的大きな掘方をもつ柱穴群を検出。

5月24日(月)～28日(金)

T5・6遺構検出作業及びT2で検出されたSE01の精査及び実測・写真撮影。T4遺構  
面写真撮影・実測。T6～8設定掘り下げ作業、T8では馬骨出土。

5月31日(月)～6月5日(土)

T2写真撮影、実測、T4検出柱穴列を半截断面で掘り下げ実測、写真撮影。T7新設掘  
り下げ、遺構検出作業。6月2日(水)には現地で専門委員会開催。今後の調査方針等につ  
いて助言を得る。

6月7日(月)～11日(金)

T2下層遺構面検出、SD01・SK02、柱穴群SB04など検出。T7SE04検出、T8製塩

土器細片集中部検出。T 10～12設定掘り下げ開始、T 10では掘方の大きい柱穴検出。

6月14日（月）～18日（金）

T 2 土壌など。精査。T 7 SD 04・SD 05検出、実測・写真撮影。T 11・12掘り下げ続行。T 14新設、岡山大学が学術発掘を行った地点の北側。T 16設定、T 10に関連して柱穴列の追及と、すでに岡山大学の調査によってその存在が確認されている貝層を伴う溝を検出するため、T 15設定掘り下げ。

6月22日（火）～25日（金）

T 2 西隅で古墳時代の井戸検出（SE 01）精査。T 10では鎌倉時代の井戸検出掘り下げ（SE 06）。T 9 設定掘り下げ、耕土を除去するとすぐに貝層が現われ、先に検出された溝の南延長部と考えられる。T 14掘り下げ、サスカイトチップ・サスカイト製石鎌の出土が目立つ。

6月28日（月）～7月2日（金）

T 7 溝状遺構精査終了、T 9 貝層検出面精査・写真撮影、T 12再掘を始め、後の大溝（SD 03）上面を確認する。T 14南側土器溜り清掃。T 16で検出した柱穴の精査。後半は、個別の遺構等について実測に集中する。

7月5日（月）～10日（土）

T 2・3、井戸・柱穴列など精査。T 5 遺構面清掃、南端濠状遺構内で検出した井戸検出。T 9 サブトレーナー設定、全景写真撮影。T 12・17、包含層掘り下げ。7月9日、文化庁技官岡本東三氏来跡、現地指導をうける。

7月12日（月）～17日（土）

T 9 見層面精査及び隣接してT 18設定、前期に比定される溝及び貝を伴う土壌検出。土層断面観察に重点を置き精査。T 17引き続き、T 14遺構検出作業。

7月20日（火）～23日（金）

降雨のため排水作業に手間どる。一方ではトレーナー掘り下げ下端部では湧水が目立ち、遺構検出・確認に難渋する。既掘部分で、図面・写真など完備したものについて埋め戻しを開始する。T 14・17実測、写真撮影。T 13包含層下層掘り下げ、製塙炉状の遺構（SX 12）を検出する。T 3・4など土層断面図を作成する。

7月26日（月）～30日（金）

T 9 南隅部分では臼玉が多量に出土し、深掘りせず現状で置く。T 10・16遺構図作成。T 12中世土壌（SX 11）掘り上げ終了。T 13炉状遺構精査。T 8・T 14・土層断面図作成。

8月2日（月）～12日（木）

T 12で検出した大溝を底まで検出し、ほぼ北西方から南東方に流路を向ける溝と考えられ

る。多量の骨・弥生式土器（前期）出土、溝底から湧水が始まり、調査は難渋した。T 5 南隅でこの溝の延長部と思われる、やはり前期に比定される溝状のおちこみを検出、掘り抜く。各既掘トレンチ埋め戻し終了。8月12日器材撤収。調査対象地区を清掃して第一次調査を終了する。

## 第二次調査

11月24日（水）～26日（金）

器材搬入、二次調査は周辺水田部分に重点をおき、第6地点にT 19からT 24を設定、掘り下げを開始する。南北に蛇行しつつ流れる弥生時代中期の溝を検出、部分的に掘り下げる。また、前期土壌（SK 08）など検出。T 24・25設定発掘開始。

11月30日（月）～12月3日（木）

T 19北壁土層断面図作成。T 24・25耕土除去後すぐに遺構面検出、T 26・27設定、T 24～26、土層断面図・平面図作成。

12月6日（月）～11日（土）

12月6日、文化庁技官浪貝氏来跡、ご指導をうける。12月7日、専門委員会開催、調査方法・対象地区についてご助言をうける。12月9日、岡山大学宇垣・秋山両氏来跡。T 27ではT 9につづく貝層を伴う溝がのび、良好な直行土層断面が観察される。T 28・29・30・31をあいついで設定、溝（SD 10～12）や住居址（SH 02）柱穴群などを検出。微高地部分（畠部分）で念のためT 32・33を設定、いくつかの溝がかかっている模様であるが、貝層を伴う大溝は検出できなかった。調査終了、トレンチの埋め戻しを開始する。

12月13日（月）～16日（木）

T 32ひき続き精査・土器溜りなど確認。T 33設定、T 14に似る層序を確認。16日午前中に器材撤収、邑久町教育委員会等あいさつに出向き、確認調査の全工程を終了する。

## 第3章 発掘調査の概要

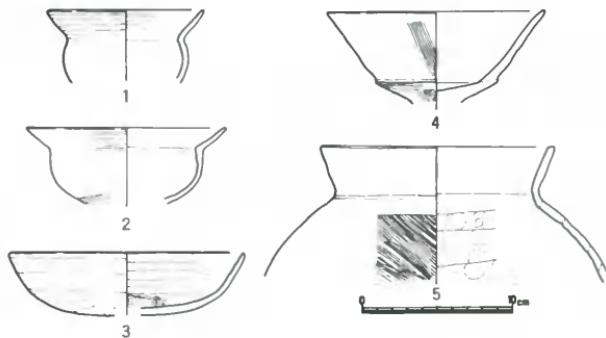
### 各調査区の概要（第1～7地点）

#### （1） 第1地点（T 1～7）（第5～42図、図版2～13）

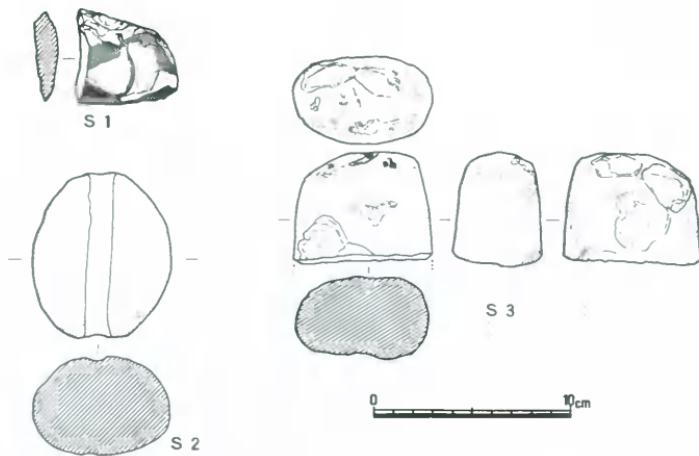
この調査区は、今回の調査でもっとも広く、トレンチ設定を最初に行うことができた調査区で、弥生時代前期から中世及び近世に至るまでの幅広い時期を示す遺構と遺物が認められた。各トレンチごとに以下、概略を示し、検出遺構および出土遺物について説明を加えておく。

T 1では、T 6南隅にかけて、復元推定幅約5m、深さ40cmを測り、検出長は東西13mを測る濠状を呈する掘削部 SX 01があり、この部分は包含層部分が大幅に失われている。この掘り込みは、埋積している攪乱土中に瓦器・須恵器・土師質土器片などを含むことから、鎌倉時代の遺構と考えられる。しかし、この濠状遺構に埋積する攪乱土は黄褐色・淡灰褐色微砂・暗灰褐色土から成り、本来は弥生～古墳・奈良・平安時代の包含層で、出土遺物も第5図、第10・11図に掲げるように豊富で、古式須恵器片12・13や臼玉B 1が出土している。主な遺構としては、SP 01・02のようなやや大き目の柱穴や、古墳時代に比定されるSK 01や弥生時代後期に比定されるSD 01などが確認された。

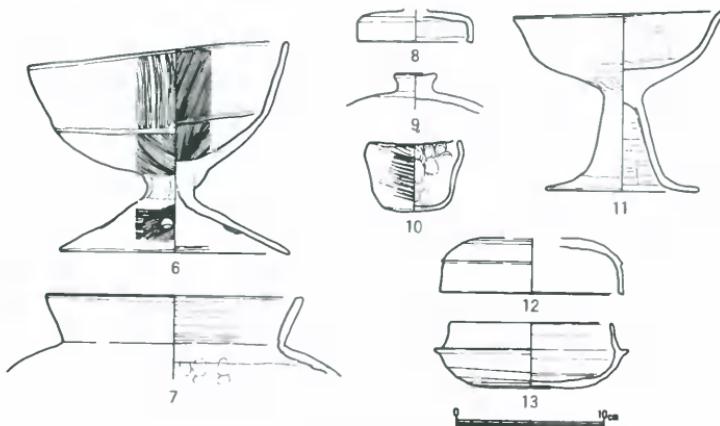
T 2は、ほぼ全面、近世における削平をうけ、SK 02を検出した部分のみ、包含層と共に極部的に残存していた。しかし、検出遺構は弥生時代前期から中世にかけて部分的に遺存している。SK 02は弥生時代前期の浅い土壤で、近世の「野つば」状土壤によって一部破壊を受けている。出土遺物には、14～18の土器やサヌカイト剝片・焼土・炭片などがある。SK 03は時期



第4図 T 1—SK 01出土土器実測図（1/4）

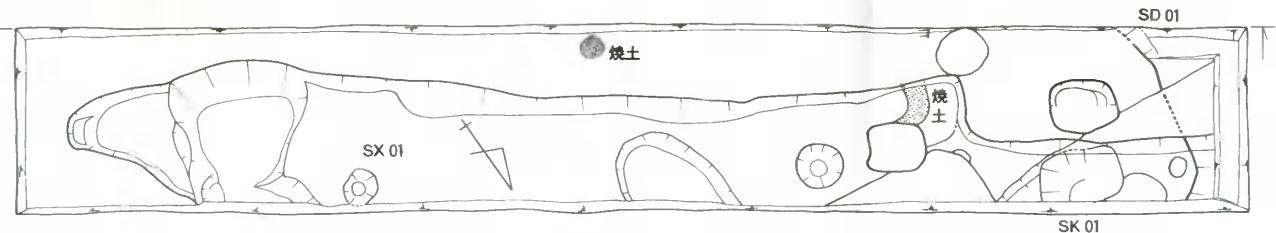


第5図 T 1出土石器（石庖丁・石錘・石斧）実測図（1/3）



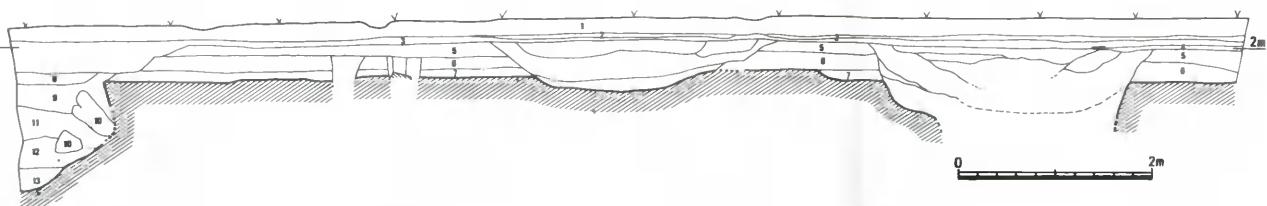
第6図 T 1出土土器実測図（1/4）

不明の浅い土壤であるが、後述のT 3で検出したSK 04と規模・形状の似るもので、同様に時期は不明であるが、鎌倉時代に比定される柱穴に切られており弥生～古墳時代の可能性が強い。SE 01は西隅で検出した井戸と考えられる遺構で、復元推定径約2mを測る円形プランをもつ。深さは、激しい湧水によって確認することができなかったが、第14図19～29などの土器群が出土した。SD 02は、断面逆台形を示す溝で、検出長は1mであり、深さ約20cm、幅70cmを測

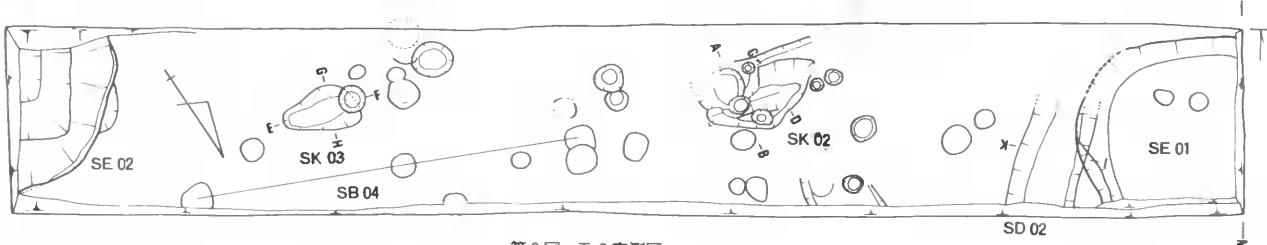


1. 暗灰色土層（耕土）
2. 淡褐色土層
3. 灰黃褐色土層
4. 暗灰褐色土層
5. 灰黑褐色土層
6. 暗褐褐色土層
7. 灰褐色混じり黄色土層
8. 暗黄褐色砂質土層  
(焼土含む)
9. 暗褐色砂質土層
10. 灰黄色砂質土層 (焼土含む)

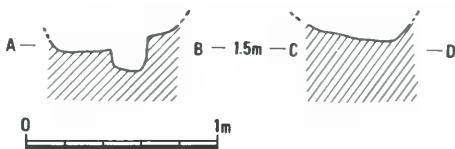
第7図 T-1 実測図 (1/60)



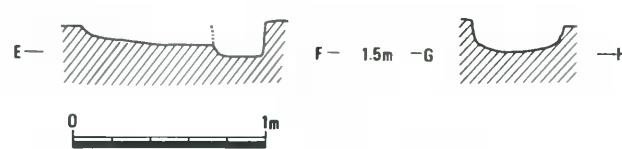
1. 暗灰色土層（耕土）
2. 淡黄褐色砂質土層
3. 淡黃褐色土層
4. 淡褐黃褐色砂質土層
5. 淡灰褐色土層
6. 淡灰褐色～黃褐色土層
7. 暗灰褐色土  
(黄色土ブロックを含む)
8. 淡褐色砂質土層
9. 褐灰粘質土層  
(砂、黄色土ブロックを含む)
10. 黄色土層 (基盤層とブロック土)
11. 暗灰褐色土層 (粘質)
12. 暗灰褐色～青灰褐色土層 (粘質)
13. 地山土ブロック土



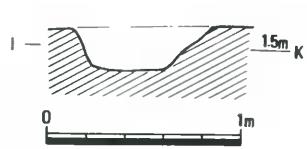
第8図 T-2 実測図



第9図 T-2-SK 02土層断面図 (1/30)



第10図 T-2 SK 03断面図 (1/30)



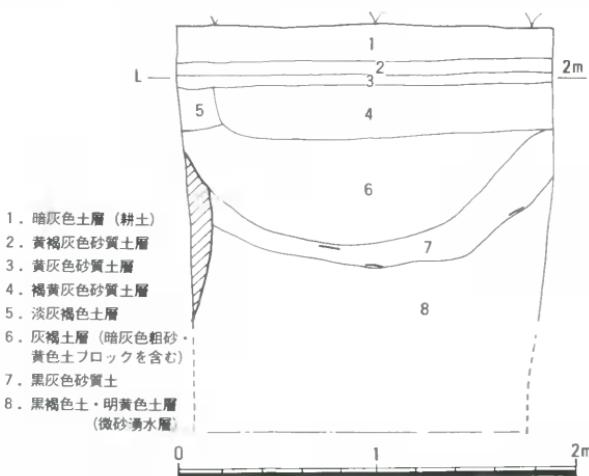
第11図 T-2-SD 02断面図 (1/30)

る。出土遺物は少量かつ細片で時期は不明であるが SE 02よりは新しく中世まで下らない。SE 02は東隅で検出した井戸と考えられる遺構で、復元径約 2m、深さ 1.3m を測る。38などの瓦器や土師器の出土から、中世それも鎌倉時代に比定されるものである。柱穴群は、小規模な柱穴がおもに東西に柱どおりが認められるもので、出土遺物から推定すると中世、T 7 の SE 04と同様である。SB 04は中世の柱穴列であるが、他の柱穴群も柱どおりが揃っている小規模な掘立柱建物の一部であることが推定される。

T 3・4 では耕土を除去すると、わずか 10~20cm の包含層が若干認められ、それを除去すると淡灰黄色を呈し、堅硬な基盤層が見出され、ただちにその面が遺構検出面となる。検出遺構には、竪穴住居址と考えられる SH 01・SK 04などの弥生時代に比定される遺構や柱穴があるが、柱穴列 SB 01が特筆される。掘方は隅丸方形に近く、柱どおりは東西で、柱間心心距離は 2m を測る。また T 4 の SB 03は柱どおりは南北を示し、柱間心心距離は 2m を測る。いずれも奈良~平安時代の掘立柱建物の一部とみられ、周辺に点在する柱穴群の大半は弥生や古墳時代のものである。中には奈良・平安時代の柱穴も含まれているようであるが、埋積土の明瞭な差はない。SB 04はやや小規模な柱穴列であるが、時期的には中世まで下らない。

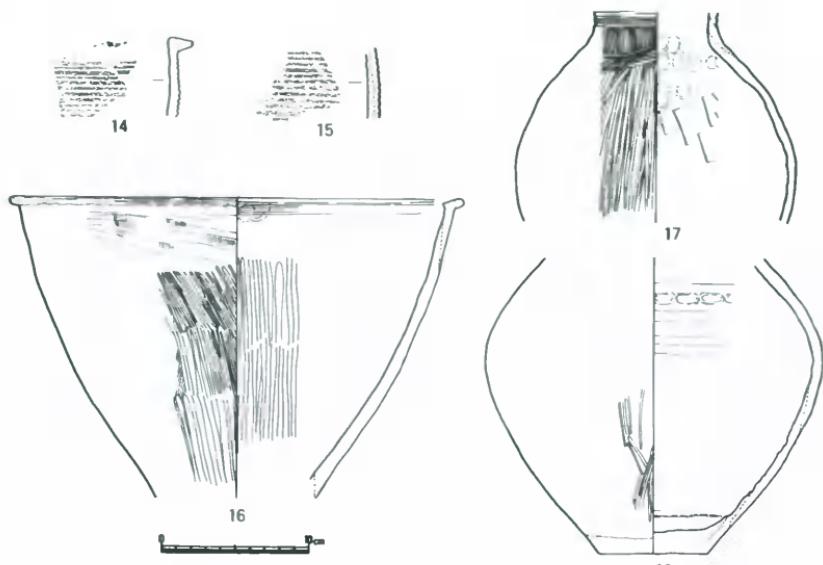
T 5・6 は本調査区をほぼ南北に切る方向を設定した長大なトレンチで、平面調査よりむしろ断面調査に重点を置いた。初期に設定した調査区であったが、降雨あるいはそれによる冠水のため第一次調査の後半に記録保存作業を行い、主に東辺の土層観察に重点を置いた。

T 5 の南隅では、前述の T 1 で検出した中世に比定される濠状の SX 01 の北側肩口が残存

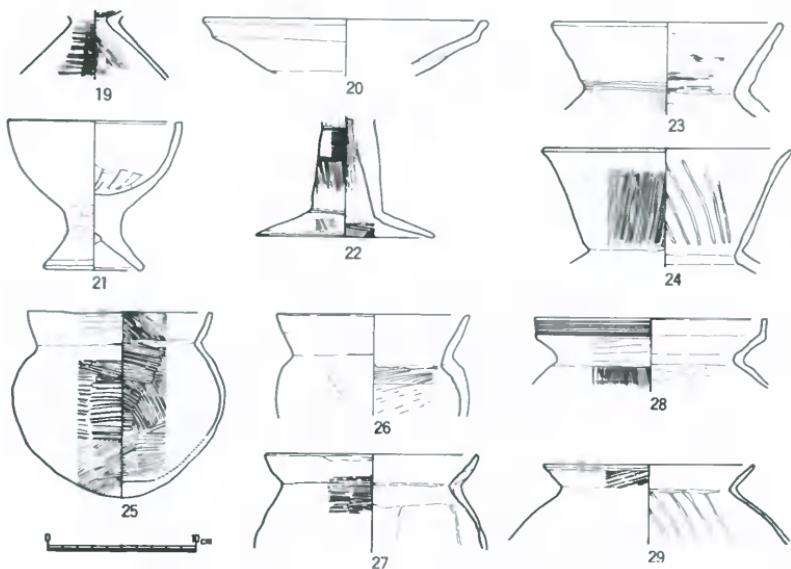


し、そのすぐ南側に鎌倉時代の井戸 SE 03が存在している。土層断面の観察によると、同時代の井戸廃絶後濠が掘削されたことを示している。この SE 03に隣接して、弥生前期に比定され、黒褐色砂質土が埋積する SK 05があるが、未掘である。また奈良時代に比定される土壤 (SX 02) や大きな掘方を示す柱穴

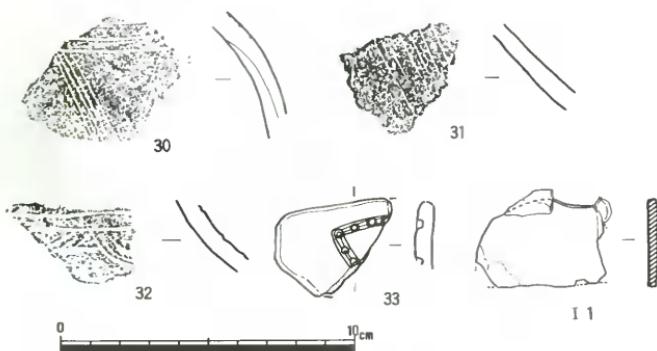
第12図 T 2 - SE 01 土層断面図 (1/30)



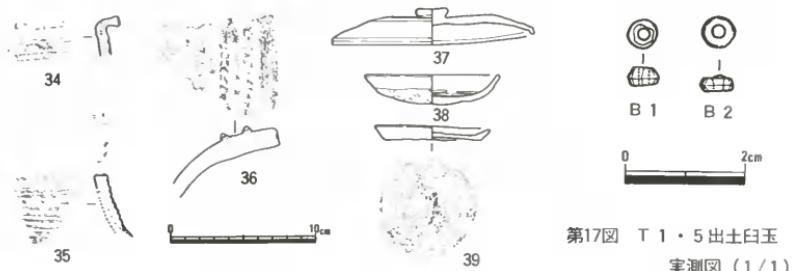
第13図 T 2—SK 02出土土器実測図 (1/4)



第14図 T 2—SE 02出土土器実測図 (1/4)

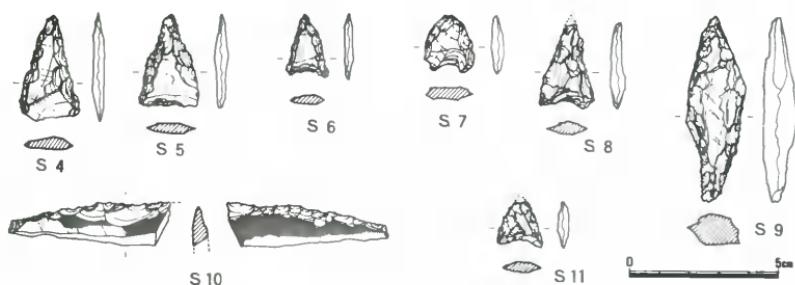


第15図 第1地点出土遺物実測図（1/2）

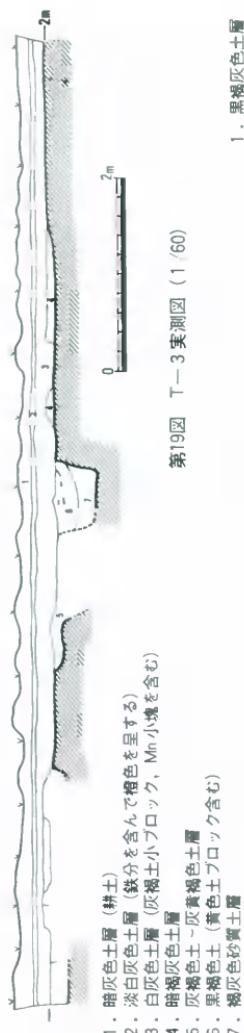
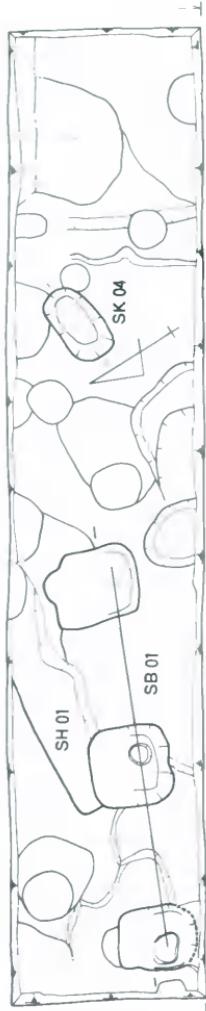


第17図 T1・5出土玉  
実測図（1/1）

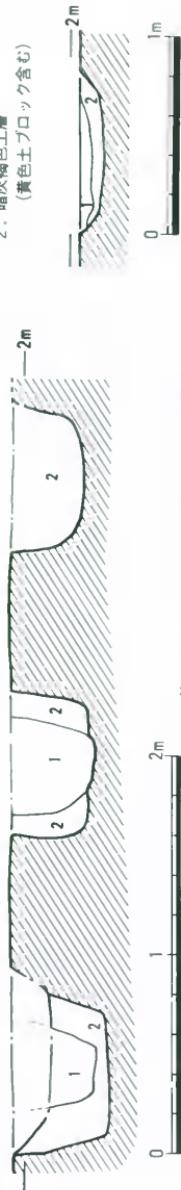
第16図 第1地点出土土器実測図（1/4）



第18図 第1地点出土石器（石鎌・石錐・石庖丁）実測図（1/2）



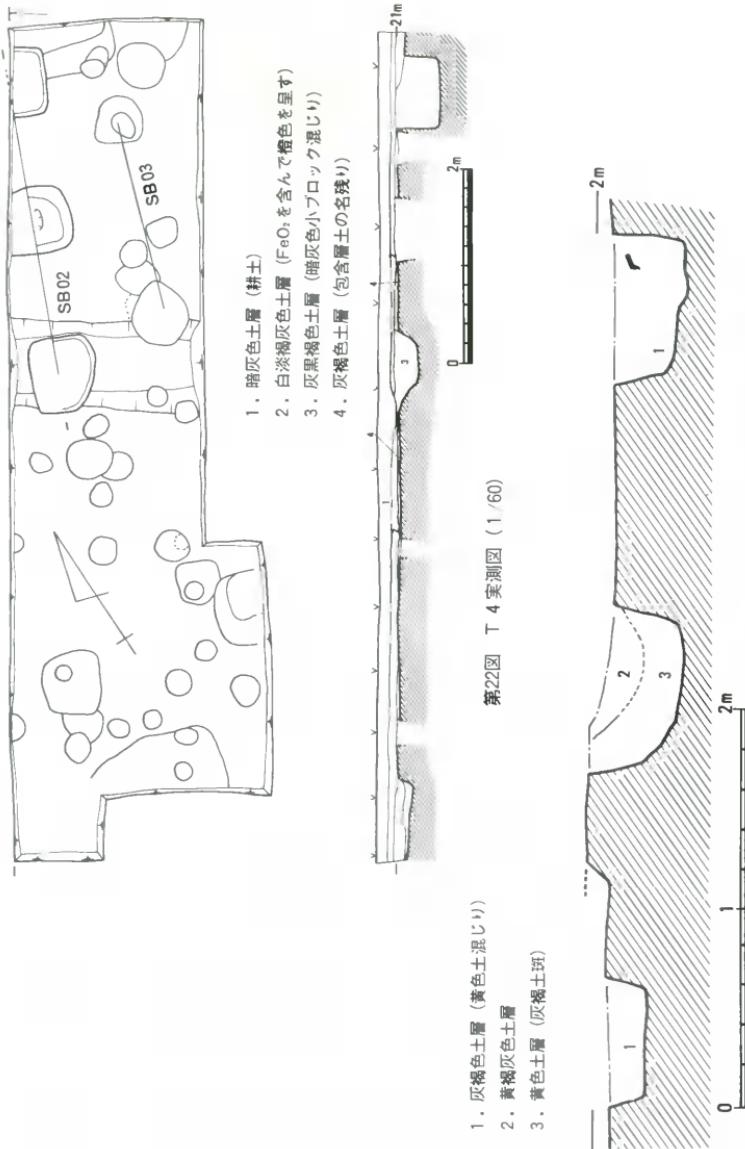
第19図 T-3 実測図 (1/60)

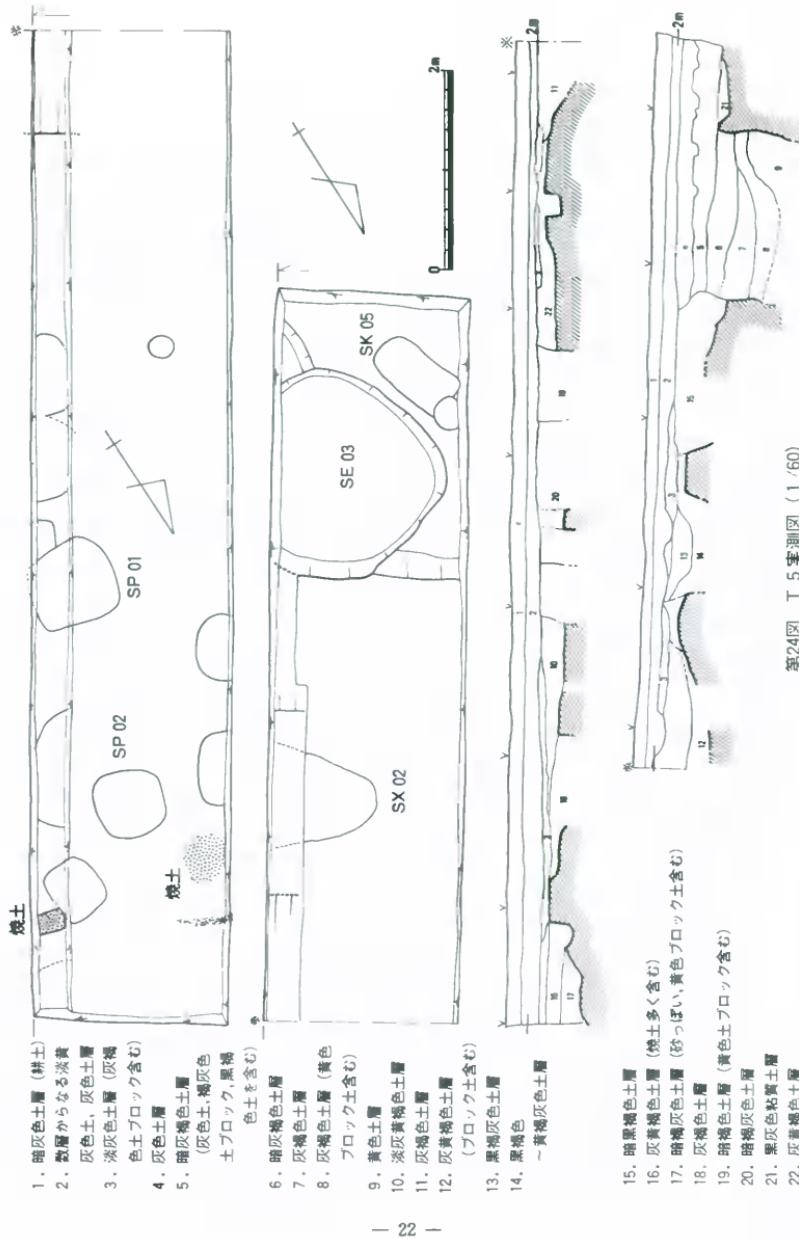


第20図 T-3-SB 01土層断面図 (1/30)

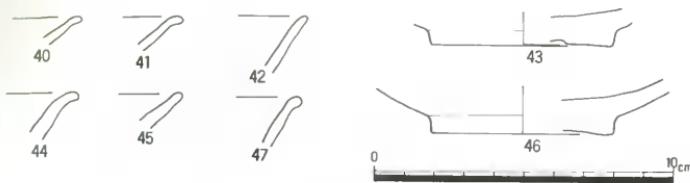
1. 暗褐色土層 (黃色土小斑紋あり)  
2. 黄色土を主体とした暗灰色土層

第21図 T-3-SK 04土層断面図 (1/30)





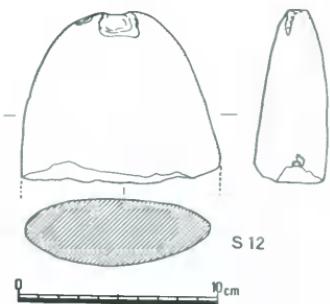
第24図 T 5 実測図 (1/50)



第25図 第1地点(T3・5)・第2地点(T14)出土綠釉陶器実測図(1/2)

第1表 緑釉陶器一覧表

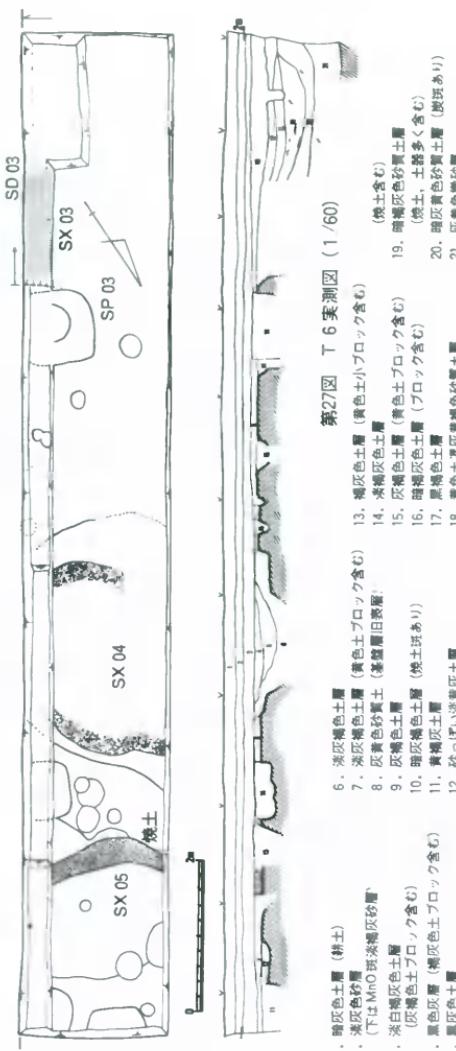
図番号	器種(部位)	特徴	出土地点・層位
第25図-40	皿(口縁部)	土師質で、胎土は精良、釉は淡緑色を呈する。	T3 淡褐色砂質土
41	皿(口縁部)	須恵質で、胎土は精良、釉は暗緑色を呈する。	T3 *
43	椀?(底部)	土師質で、蛇の目高台部分を残す。胎土は精良、釉は淡緑色を呈する。	T3 *
42	椀?(口縁部)	須恵質で、胎土は精良、釉は暗灰緑色を呈する。	T5 灰黒色土(SE04)
44	椀?(口縁部)	土師質で、胎土は精良、釉は明緑色を呈する。	T5 *
45	椀?(口縁部)	土師質で、胎土は精良、釉は淡黄緑色を呈する。	T5 *
	耳环?(口縁部)	須恵質で、胎土は精良、釉は暗緑色を呈する。	T5 *
	椀(体部)	須恵質で、胎土は精良、釉は暗灰緑色を呈する。	T5 *
	皿?(体部)	須恵質で、胎土は精良、体部はうす手につくられ、釉は暗緑色を呈する。	T5 南端部表採
	椀(体部)	須恵質で、胎土は精良、釉は灰緑色を呈する。	T5 灰褐色土
	皿?(体部)	須恵質。釉は暗緑色を呈する。	T5 SE04 上面、黒褐色土
	椀(体部)	須恵質で、胎土は精良、釉は黄緑色を呈する。	T7 褐灰色土
	皿?(体部)	土師質で、胎土は精良、釉は明緑色を呈する。	T8 淡灰黃褐色土～ 淡灰色土
第25図-46	椀?(底部)	土師質で、蛇の目高台部分を残す。釉は淡緑色を呈する。	T8 淡灰黃褐色土
	皿?(体部)	土師質で、器壁はうすい。釉は淡黄緑色を呈する。	T10 表採
第25図-47	皿?(口縁部)	須恵質で、胎土は精良、釉は暗緑色を呈する。	T14 表土～包含層上層



第26図 T 5 出土石錘実測図 (1/3)

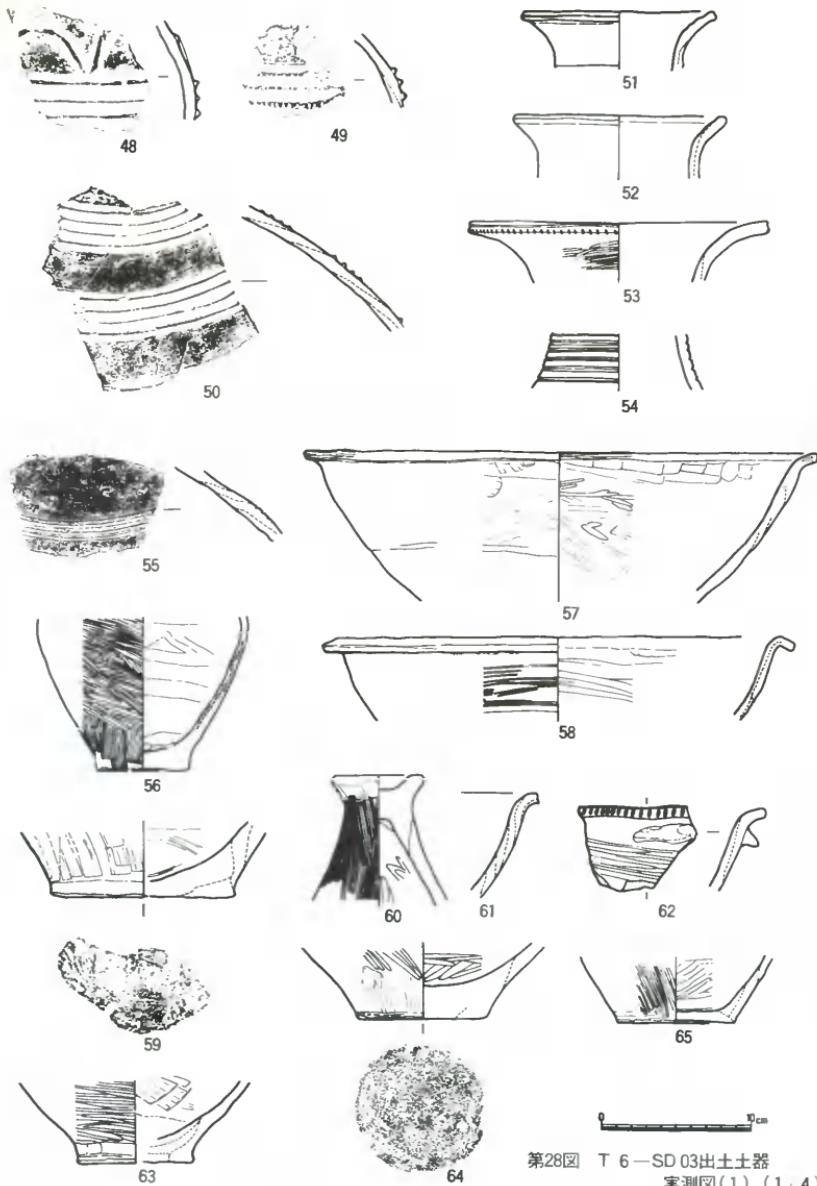
(SP 01~03) が点在している。

T 6 では、南隅で弥生時代前期の溝 (SD 03) が検出され、第28~30図に掲げる多量の弥生式土器が出土している。おそらく後述の T 12で検出される溝の延長部分と考えられ、更に T 16南隅をかすめて T 12にのびることが推定される。湧水等のため全容を完掘することは避けた。この溝の上面には古墳時代に比定される土器溜り状の遺構 (SX 03) があり、第31図に掲げる一群の土師器 (83~85) が出土している。これも T 16で確認された出土遺物と同時期のもので、古墳時代前期の生活遺構の存在を示している。SX 04は奈良時代に比定される土壤で、灰層プランが検出された。SX 05は焼土片が多く埋積する細溝で、やはり古墳時代に比定される。また SX 05に切られる

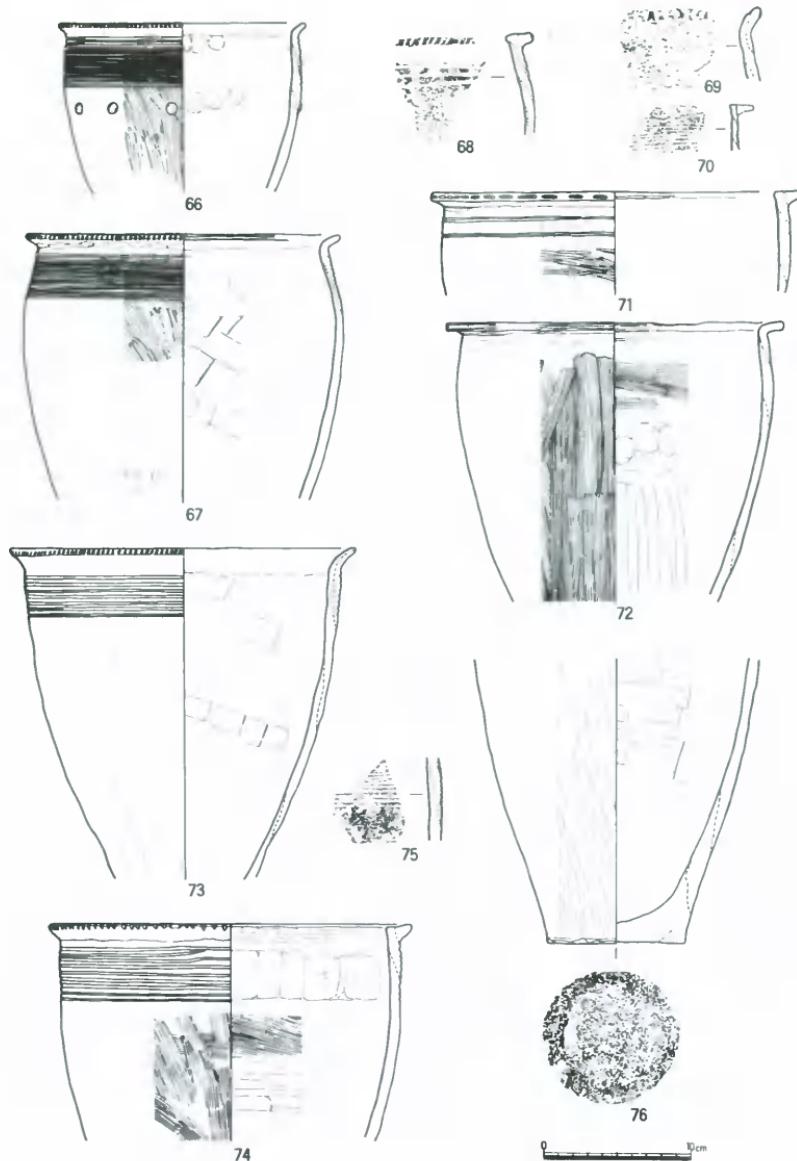


第27図 T 6 実測図 (1/60)

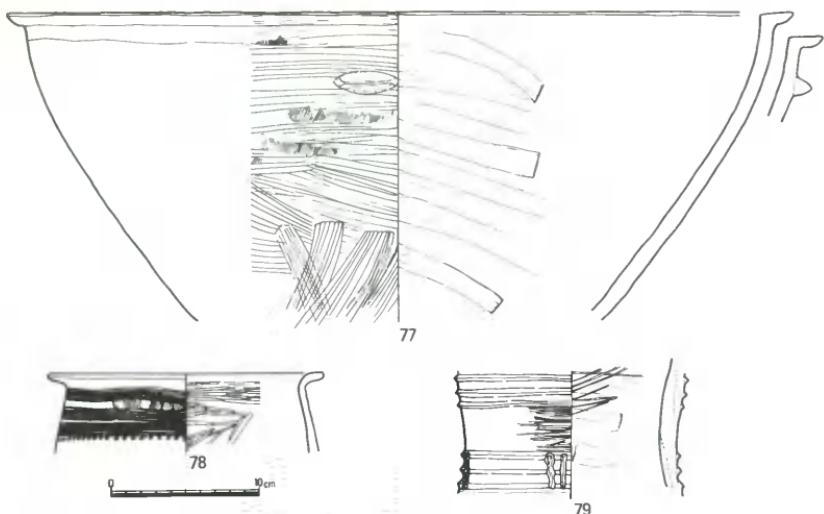
1. 淡灰褐色土層 (耕土)
2. 淡灰褐色砂層
3. 淡白褐灰色土層 (下は MnO 背淡灰砂層)
4. 黒褐色灰土層
5. 黑褐色土層
6. 淡灰褐色土層
7. 淡灰褐色土層 (淡色土ブロック含む)
8. 淡青色砂質土 (基盤層日影層)
9. 淡褐色土層
10. 淡褐色土層 (焼土斑あり)
11. 黄褐色土層
12. 紗っぽい淡青灰土層
13. 淡灰褐色土層 (黄色土小ブロック含む)
14. 淡灰褐色土層
15. 淡褐色土層 (黄色土ブロック含む)
16. 淡褐色土層 (ブロック含む)
17. 黑褐色土層
18. 淡青色土層
19. 淡青色沙質土層 (燒土含む)
20. 淡青色沙質土層 (焼土あり)
21. 淡青色微砂質土層



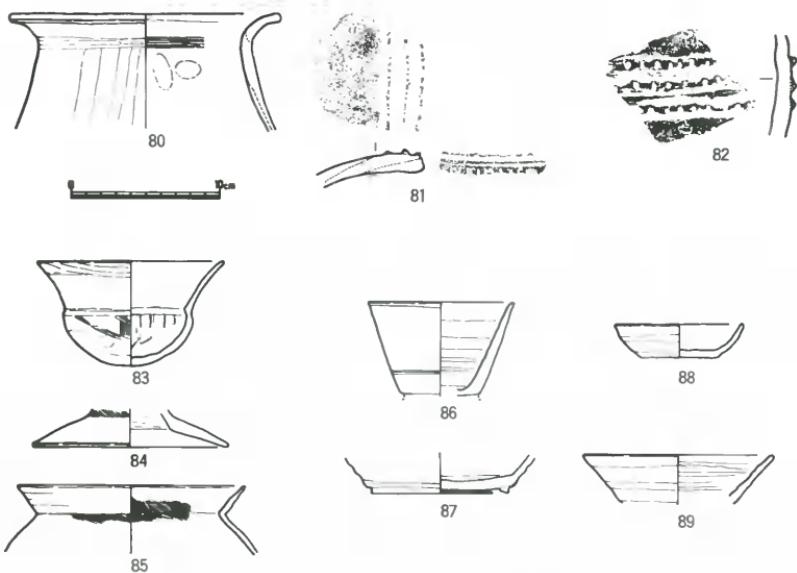
第28図 T 6 - SD 03出土土器  
実測図(1) (1 / 4)



第29図 T 6—SD 03出土土器実測図(2) (1/4)



第30図 T6-SD03及び上面出土土器実測図 (1/4)

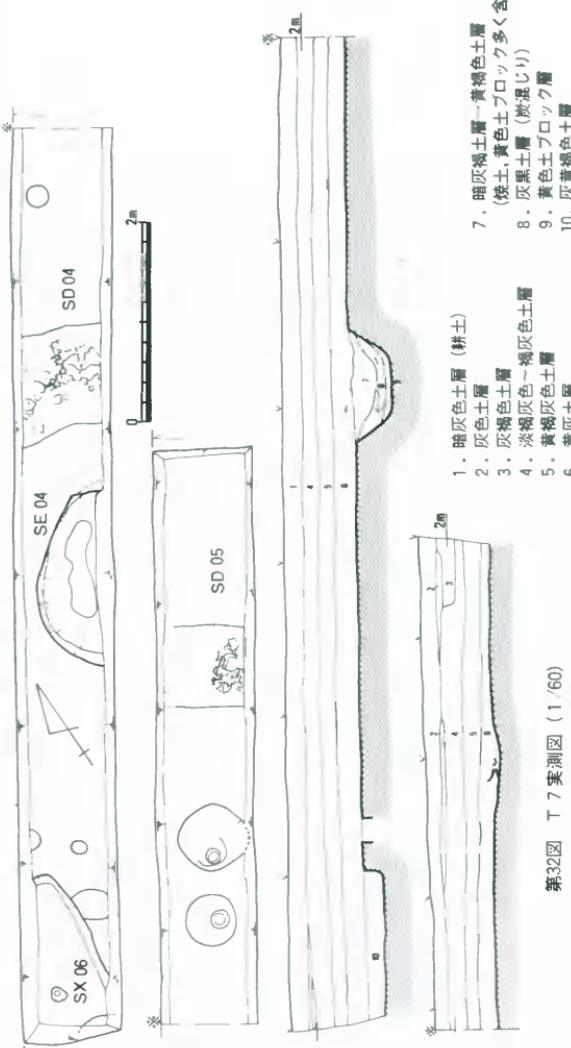


第31図 T5・T6出土土器実測図 (1/4)

柱穴もある。

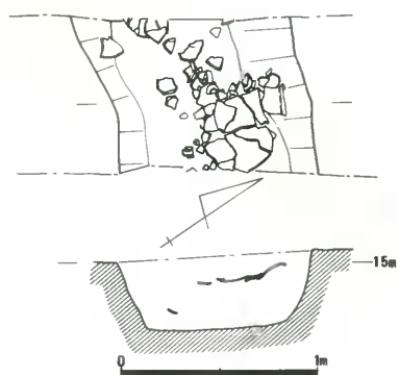
T 7は、本調査区の北端部に設定したほぼ南北方向を示すトレンチで厚さ約55cmの淡褐灰色～灰褐色包含層を除去し、遺構検出面である基盤層面を検出した。SD 04は弥生時代のU字溝で、幅1m、深さ40cmを測り、第35・36図に掲げる一括土器が出土した。いずれも弥生時代後期中葉に比定される形態をもつ。SD 05は東部分が土壤状を呈するが、土層断面の状況から本稿では溝として扱っておく。プランはほぼ東西方向を示し、東側がやや深い。出土遺物は第37・39図の土器や砥石が出土地している。いずれも弥生時代後期中葉に比定される。

SX 06は竪穴住居址状を示す掘り方をもち、検出位置は隅丸方形ブ

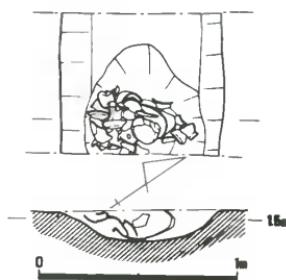


第32図 T7実測図 (1-60)

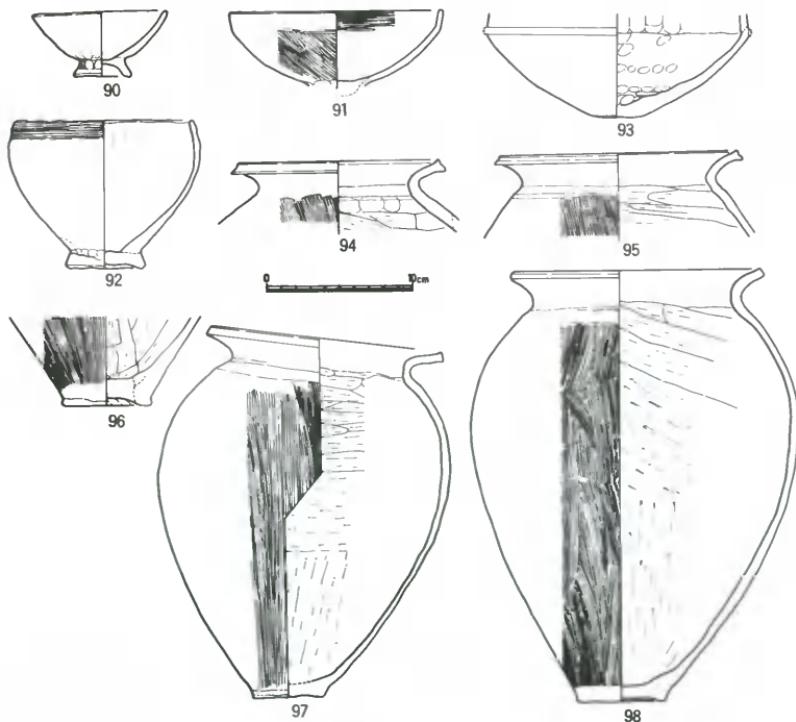
ランのコーナーのような印象を受ける。壁溝はなく、床面に径15cm、深さ20cmの小柱穴が存在する。SE 04はトレンチの中央部で検出された中世の井戸と考えられる遺構で、残存部径2m、深さ1mを測る。出土遺物には115～119の瓦器や土師質鍋120、甕・土師質土器・須恵



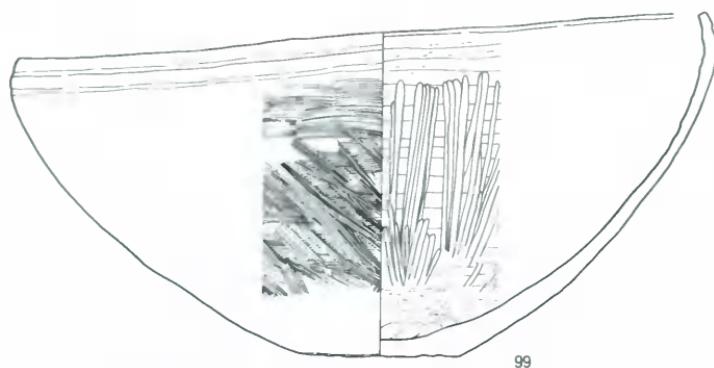
第33図 T 7 - SD 04実測図 (1 / 30)



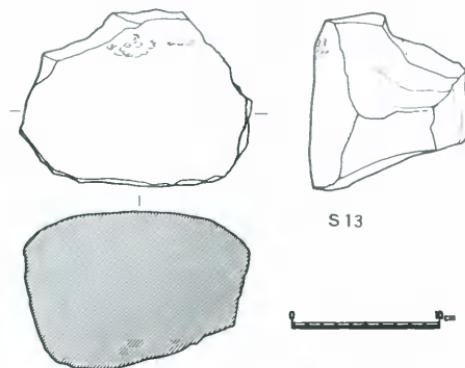
第34図 T 7 - SD 05実測図 (1 / 30)



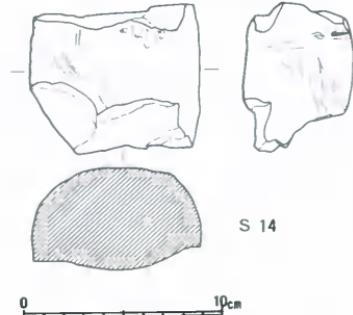
第35図 T 7 - SD 04出土土器実測図(1) (1 / 4)



第36図 T 7-SD04出土遺物  
実測図(2) (1/5)

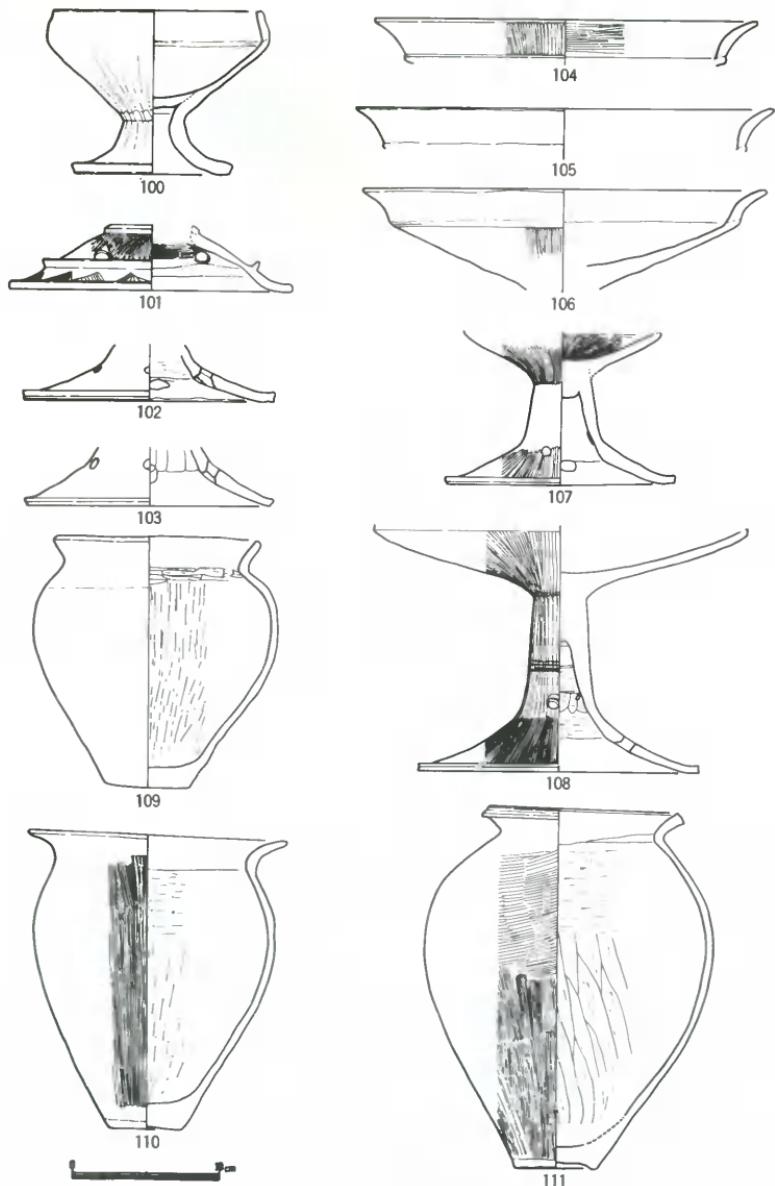


第37図 T 7-SD05出土砥石実測図 (1/4)

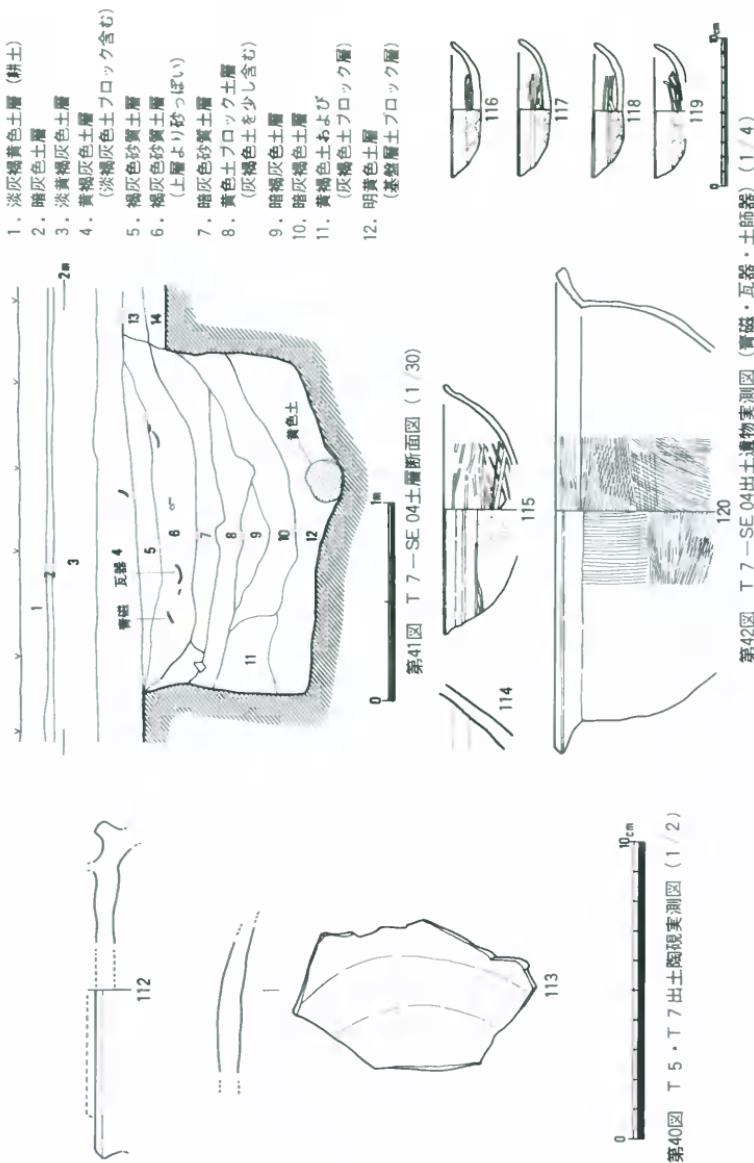


第38図 T 7出土砥石実測図 (1/3)

器片などがあり、114の青磁碗片もみられる。このSE 05の直上層包含層には奈良時代に比定される37の須恵器蓋などが出土しており、奈良時代遺構群のひろがりを示している。



第39図 T 7—SD 05出土土器実測図(1) (1 / 4)

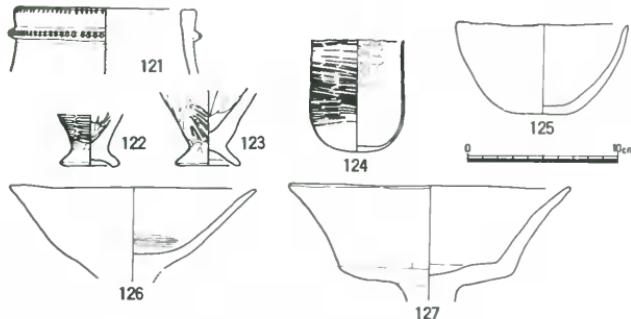
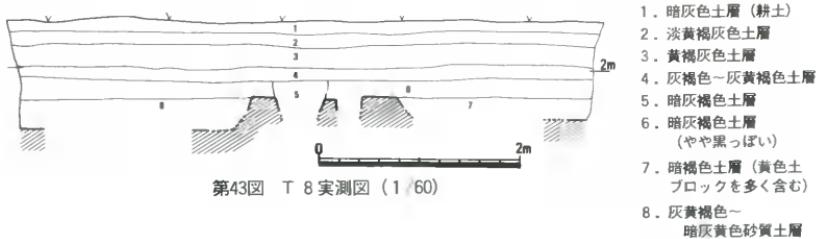


(2) 第2地点 (T 8・9・14・18・27) (第43図~56図、図版13~17)

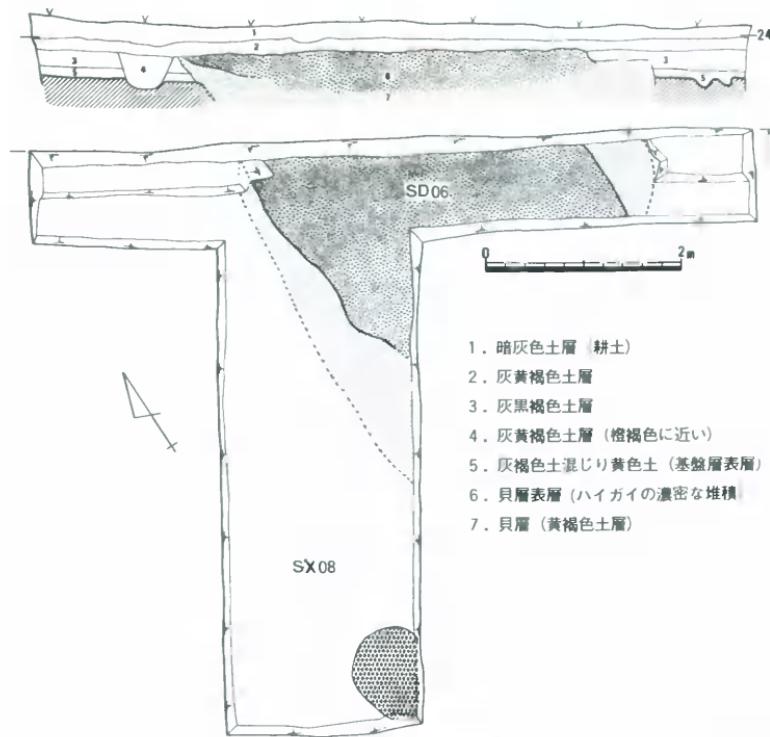
この地点は、前章で述べた岡山大学考古学研究室による発掘調査の対象となった地点で、T 14の南、T 9の北に接して約200m<sup>2</sup>の発掘区が設定され、学術的発掘調査が実施された。

また、地元の長瀬薰、川崎務両氏による発掘も、主にこの地点を中心に行われたようで今なおハイガイの多量の散布をみる。したがって、今回の調査では、T 14とT 9の間ですでに確認されている大溝（今回の遺構名ではSD 06）の行方を追及するためT 9を設定し、貝のひろがりを確認するためT 14を設定した。第1次調査ではT 9のサブトレーンチとして、T 18を設定し、第2次調査で更にT 27を設定した。ここでは一括して関連づけて説明することとする。

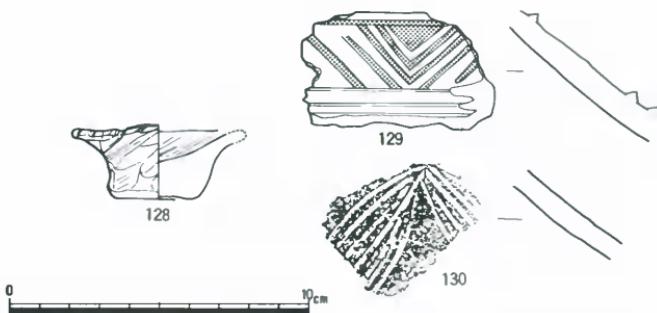
T 9では、畑の耕土を約15m~20m除去すると、すぐに固くしまったハイガイを中心とする貝層が現われ、第45図のとおり、中央部がやや高まり、その密度も極めて高い。この貝層面は、先の調査における検出レベルとほぼ一致し、その所見も同様である。これが、SD 06上面に堆積する貝塚で上面では土器片・サヌカイト片もみられる。すなわち、この溝の東方への行方を探るためにT 18を設定したところ、掘方および貝層面は存在せず、SD 07・SX 07が検出された。SD 07は、溝底が西から東へ大きく下降する溝状遺構で、断面形は逆台形を示し、第50図



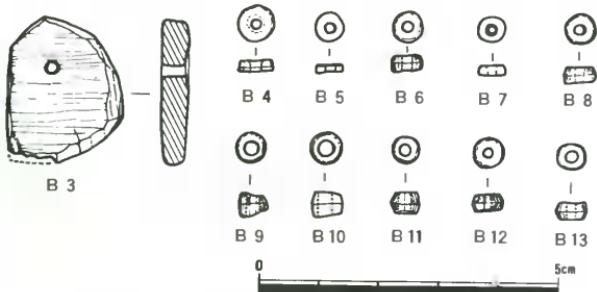
第44図 T 8 出土土器実測図 (1/4)



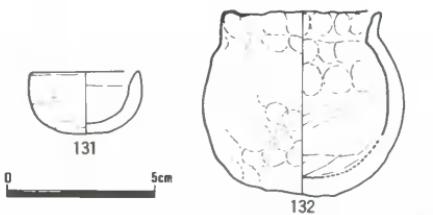
第45図 T 9 実測図 (1/60)



第46図 T 9・T 27出土土器実測図（ミニチュア土器・彩文土器・木葉文土器）(1/2)



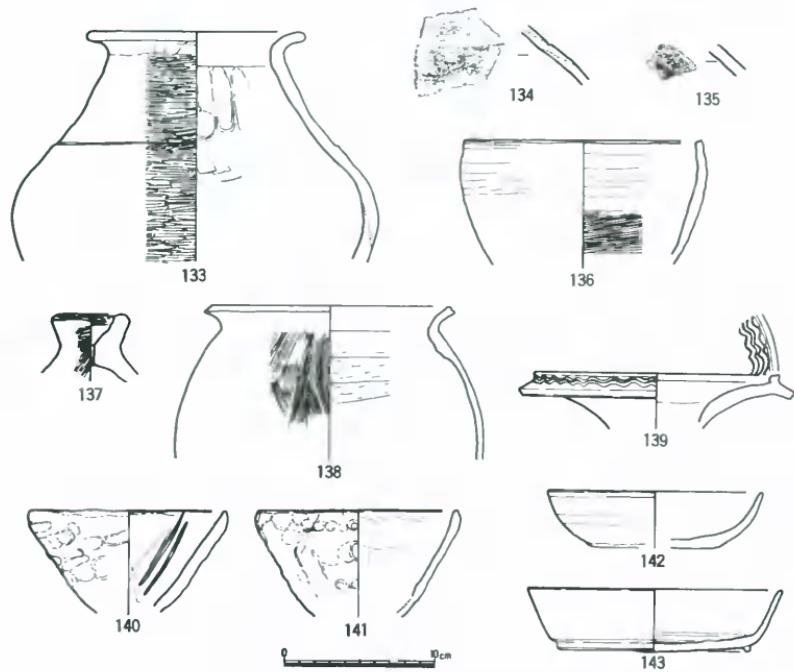
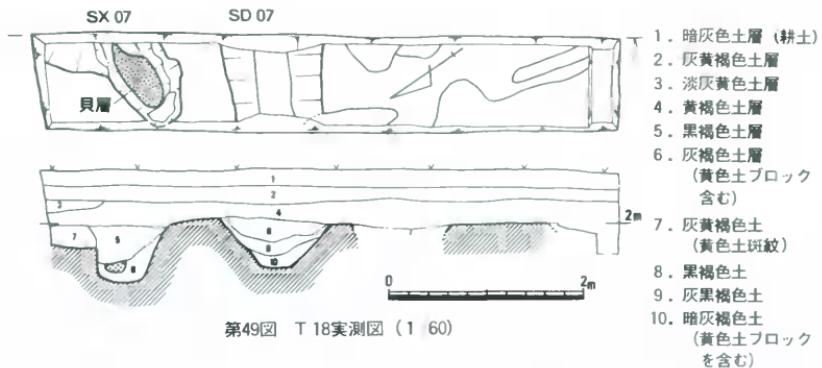
第47図 T 9—SX 08出土有孔円板・臼玉実測図（1/1）



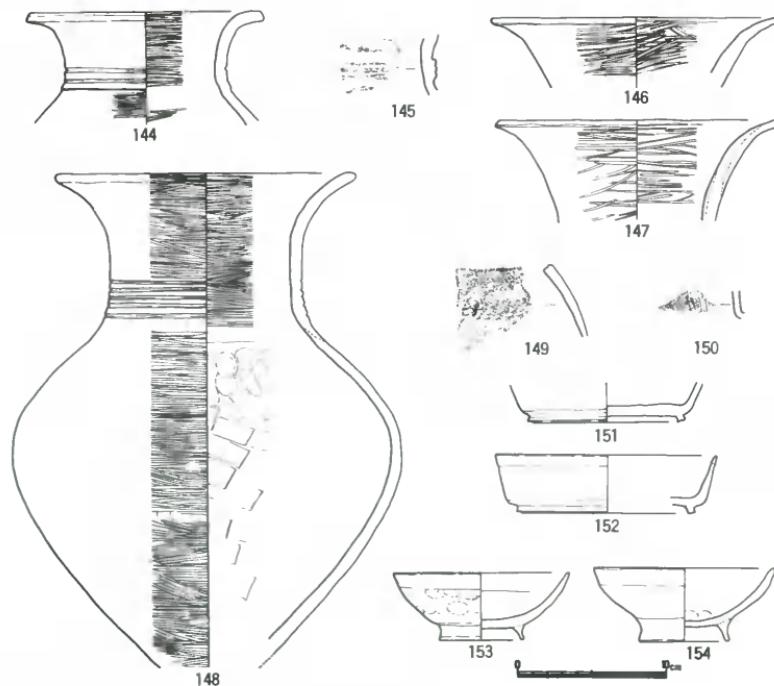
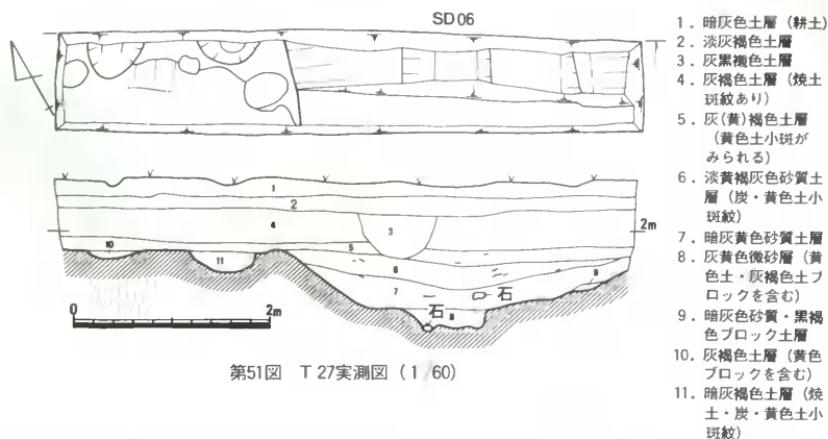
第48図 T 9—SX 08出土ミニチュア土器実測図（1/2）

133～136など、前期弥生式土器が出土しており、SD 06の出土遺物を基準とされる「門田下層」式あるいは「門田上層」式のいずれよりも古い様相を呈している。SX 07は、やや不整形な掘方をもち、やはり西から東へ傾斜する。この中には、約30×80cmにわたってやや小さなハイガイがまとまって出土しているが、SD 06との時期差は明らかではない。

T 27は、T 18の調査結果によってSD 05がほぼ南へ向けて、流れる溝であることがほぼ確定的となつたため、第2次調査で設定したトレンチで、SD 06のはば平面形に直行する土層断面を観察することができた。弥生～中世にかけての包含層すなわち灰褐色～黄褐色土層を除去すると、SD 06のプランが現われ、西掘方が検出された。東肩は、トレンチ内にはおさまらなかつたが、断面形の形状では遠からぬ距離にあることが推定される。これによって、幅約4m、深さ0.8mを測る断面形はゆるやかな弧を描くU字溝であることが確認された。溝底中央部はやや深くなつており、基盤層土の灰黄色褐色土が堆積している。この部分では、T 9で検出された堅硬な貝層面は存在せず、溝の上層から下層上位にかけて、ややもろくなつたハイガイの貝殻が若干出土している。この調査部分では、前期弥生式土器の出土が多くみられた。144は、最下層、146・147・148などは中層から出土した前期弥生式土器の壺形土器である。サヌカイト片も若干出土している。このSD 06の西方にはやはり弥生時代前期に比定される土壤状の遺構



第50図 T 18—SD 06・包含層出土土器実測図 (1/4)



第52図 T 27—SD 06・包含層出土遺物 (1 / 4)



第54図 T 14出土磨製石庖丁実測図 (1/2)

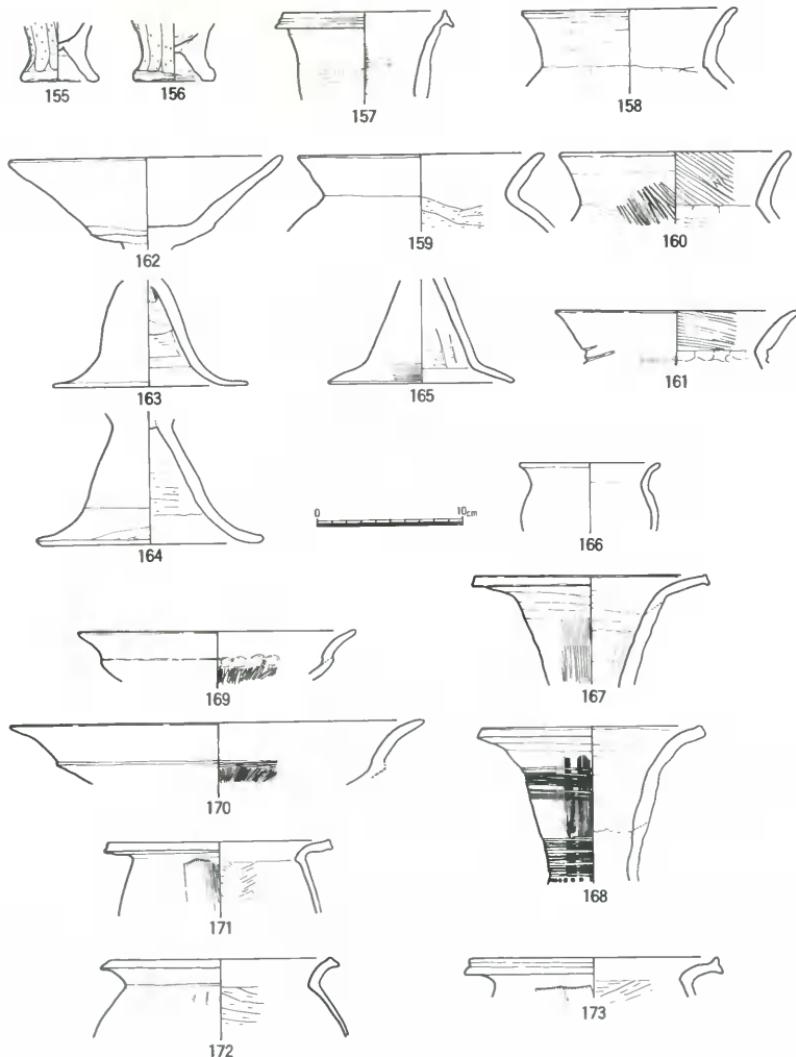
などが存在する。

T 8は、T 9の南約30mに設定した小トレンチで、基本的な土層を確認するため、南辺を掘り抜いた。第3・4層で、弥生時代から古墳時代にかけての製塩土器が集中的に出土し、前者が122・123、後者は126・127の高杯を伴って出土した124である。また、この層から、後章で述べる馬のあご骨が出土している。このトレンチではSD 06の延長部は検出されず、東水田部のT 31でも検出されず、T 11とT 8の間にその行方が推定される。(第3図)

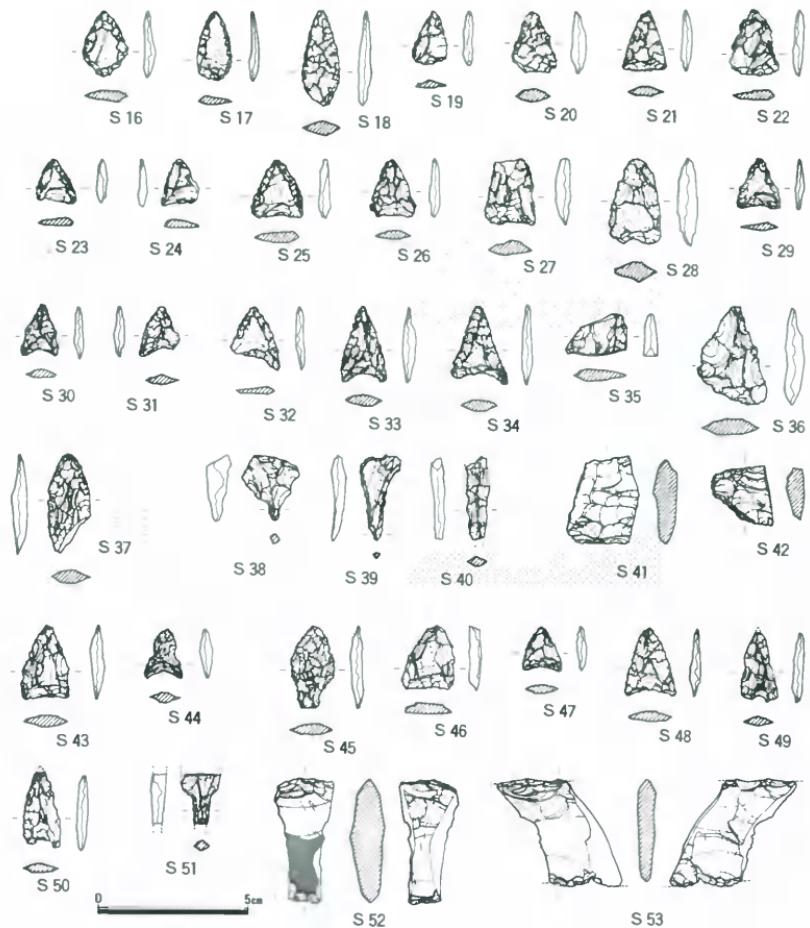
T 14は、前述の岡山大学考古学研究室による既掘部の北辺に接して設定したトレンチで、ここでも平面的調査よりもしろ、上層断面観察を重視した。ここでは一転して、貝層は全く認められず、表層部でも貝の散在は認められない。確認された遺構としてはSE 05の井戸状遺構や、南側で検出された土器溜り状の遺構SX 10がある。前者は古墳時代、後者は弥生時代後期に比定される。

第53図 T 14土層断面図 (1/80)





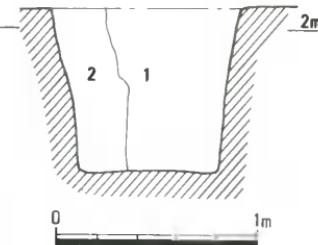
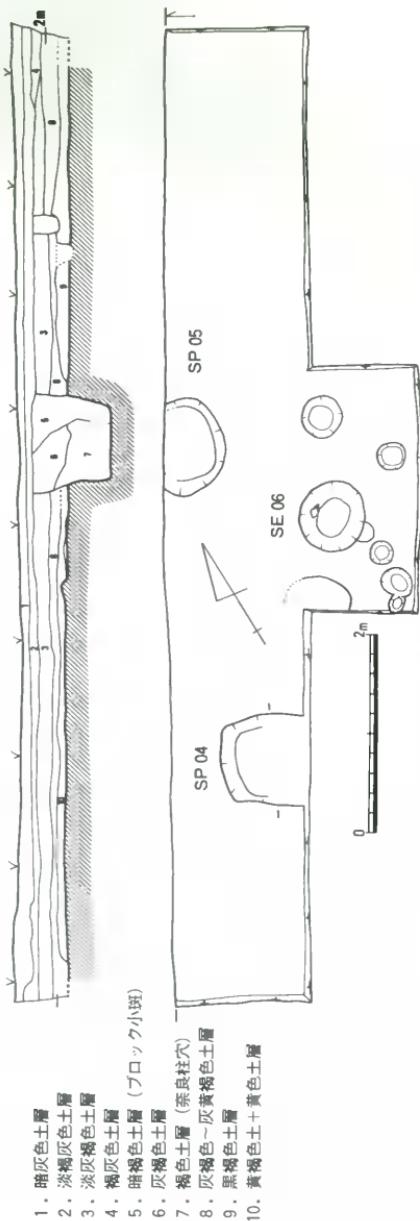
第55図 T 14包含層・SE 05・SX 10出土土器実測図 (1/4)



第56図 第2地点出土石器（石鎌・石錐・石庖丁など）実測図（1/2）

(3) 第3地点 (T 10~13・16・32・33) (第57図~79図, 図版17~23)

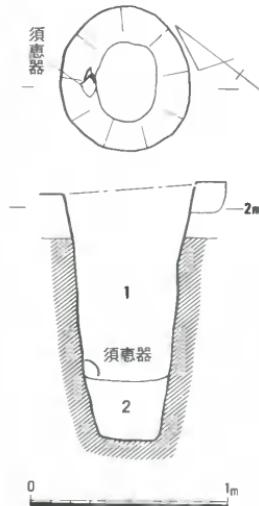
T 10~13・16は第1次調査, T 32・33は第2次調査において発掘を実施した。T 10・16では、第1地点と同様に大規模な掘立柱建物の存在を予想させる、掘方の大きい柱穴 (SP 04~07) が点在し、その掘方は1辺約0.9~1mの丸味をもった方形を示すもので、掘方付近からは奈良時代の須恵器片が出土している。T 10では、鎌倉時代に比定される小さな柱穴群が存在する。



第58図 T 10-SP 04土層断面図 (1 / 30)

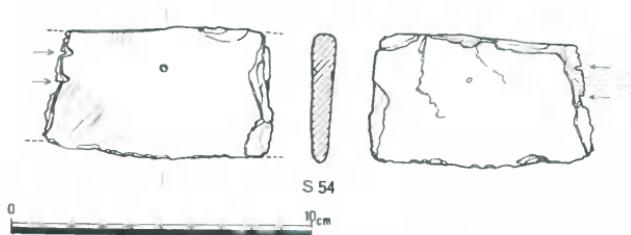
1. 黒褐色土が大半で黄色土ブロックが含まれる。  
(抜取痕跡か)
2. 黑褐色土・黄色土の瓦層

第57図 T 10実測図 (1 / 60)



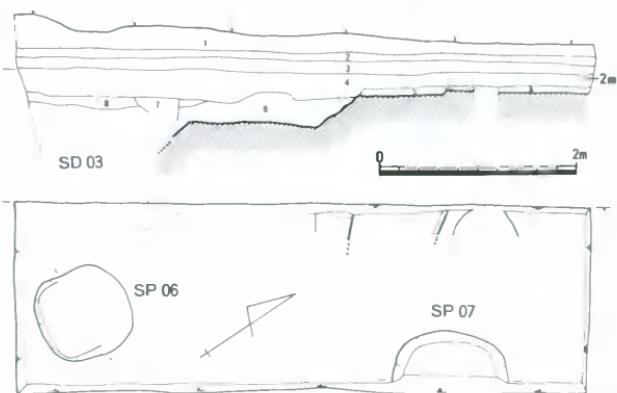
第59図 T 10-SE 06実測図 (1 / 30)

1. 暗褐色土層  
(黄褐色土)
2. 黄色ブロック土層

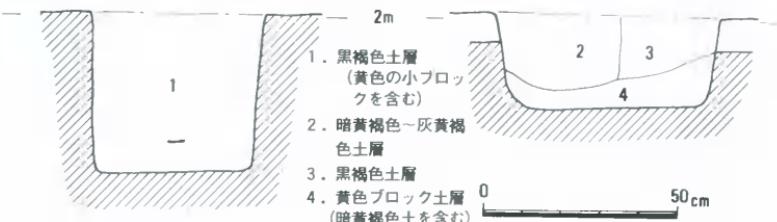


第60図 T 10出土磨製石庖丁実測図（矢印：穿孔痕跡）（1/2）

1. 暗灰色土層（耕土）
2. 淡褐灰色土層
3. 褐灰色土層
4. 暗褐灰色土層（炭  
・焼土斑紋あり）
5. 褐灰色粘土層（黃  
色土ブロックを含  
む）
6. 褐灰色粘土層（黃  
色土ブロック多く  
含む）
7. 灰褐色土層
8. 暗灰褐色土層
9. 淡褐灰色土層

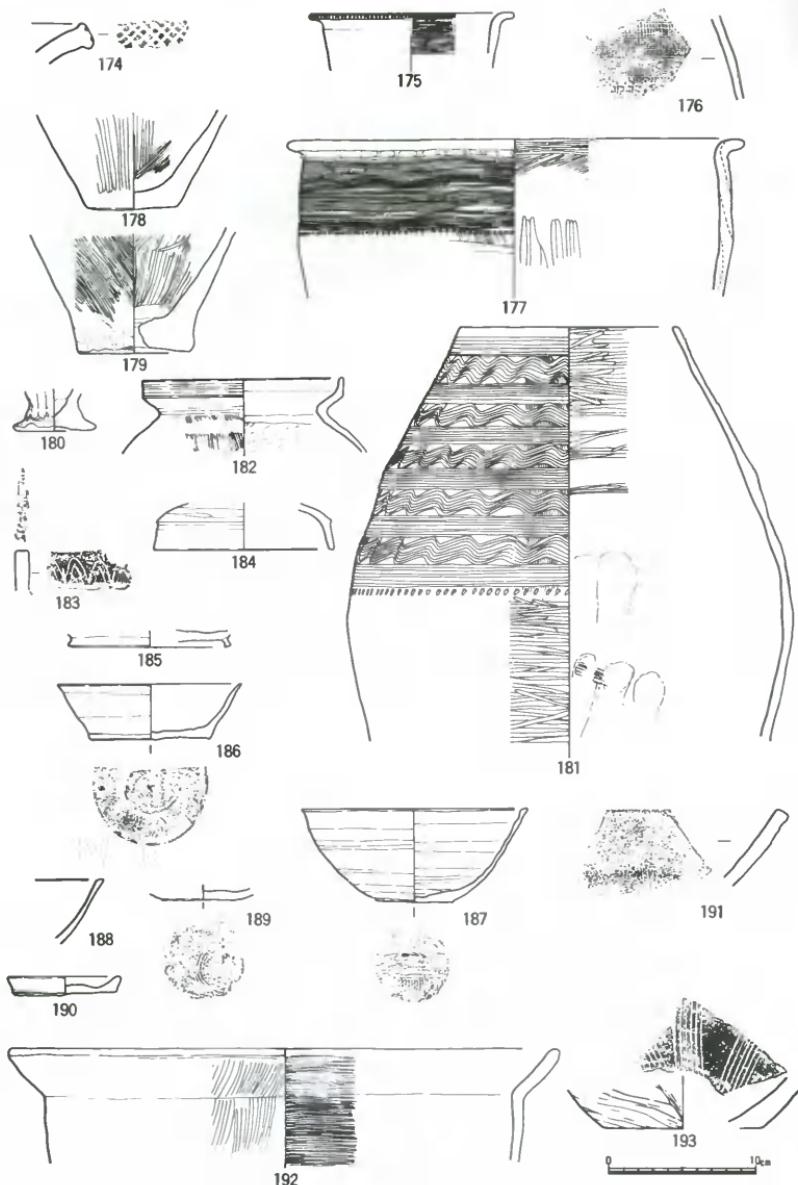


第61図 T 16実測図（1/60）

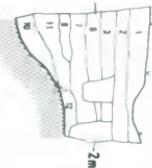
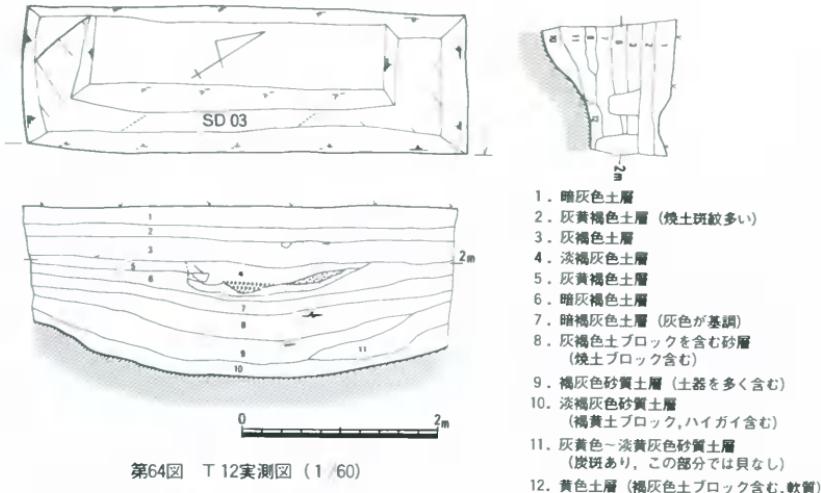


第62図 T 16-SP 06・07土層断面図（1/30）

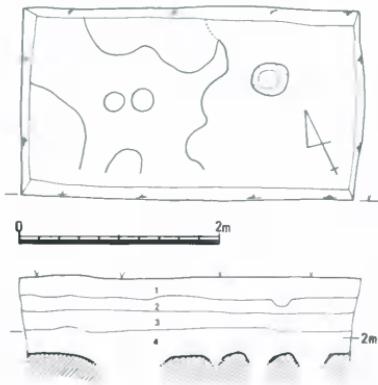
また SE 06は同時期の井戸で、187の須恵器椀が出土している。T 16の南隅の抜掘り部分では、SD 03の北肩が検出され、前期弥生式土器片が出土している。T 32は、T 10・16で検出できなかった、SD 06の延長部を確認するために設定したトレンチで、土層断面を重視した調査を行った。南隅では、弥生時代中期前半の壺形土器181が出土したり、北部分でも174・175などの前期弥生式土器が出土している。しかし、貝層は全く観察できず、やや異なった形状をもつ溝が存在する可能性がある。T 10・16でもやはり貝層は全く見当らず、SD 06はT 10の東側を北



第63図 第3地点 (T 10・16・32) 出土土器実測図 (1/4)



1. 暗灰色土層
2. 灰黄褐色土層 (焼土斑紋多い)
3. 灰褐色土層
4. 淡褐灰色土層
5. 灰黄褐色土層
6. 暗灰褐色土層
7. 暗褐灰色土層 (灰色が基調)
8. 灰褐色土ブロックを含む砂層 (焼土ブロック含む)
9. 褐灰色砂質土層 (土器を多く含む)
10. 淡褐灰色砂質土層 (褐黄土ブロック, ハイガイ含む)
11. 灰黄色~淡黄色砂質土層 (貝斑あり, この部分では貝なし)
12. 黄色土層 (褐灰色土ブロック含む, 軟質)



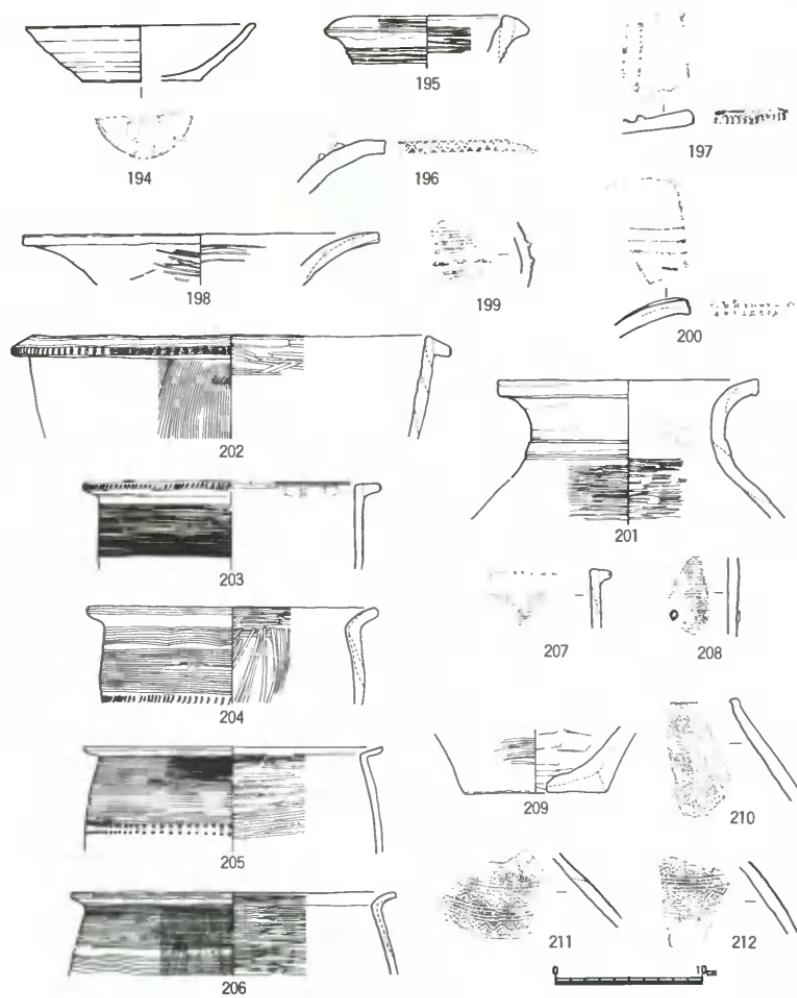
1. 淡褐灰色土層 (耕土)
2. 淡灰褐色土層
3. 灰褐色土層
4. 灰黄褐色土層 (焼土斑紋)

T 12では第64図に示す土層断面図のとおり、灰橙褐色を呈す中世から弥生時代前期にかけての厚い包含層（攪乱層）が堆積し、ほぼ第3層で鎌倉時代に比定される不整形な平面形を示す土壤が検出された。深さは約30cmを測り、南側法面ではシジミがかたまって出土している。その下部には、弥生時代前期のSD 03が存在する。この溝の上層に堆積した灰褐色土上層では、中期前半に比定される土器が出土しており、その埋没（廃絶）時期を示している。中層では、

上する可能性が強い。これは、ボーリング棒による探査でも、岡山大学発掘区からほぼ北方向に貝層が延びて終り、貝層のひろがりと方向が推定されたことによっても裏付けられよう。

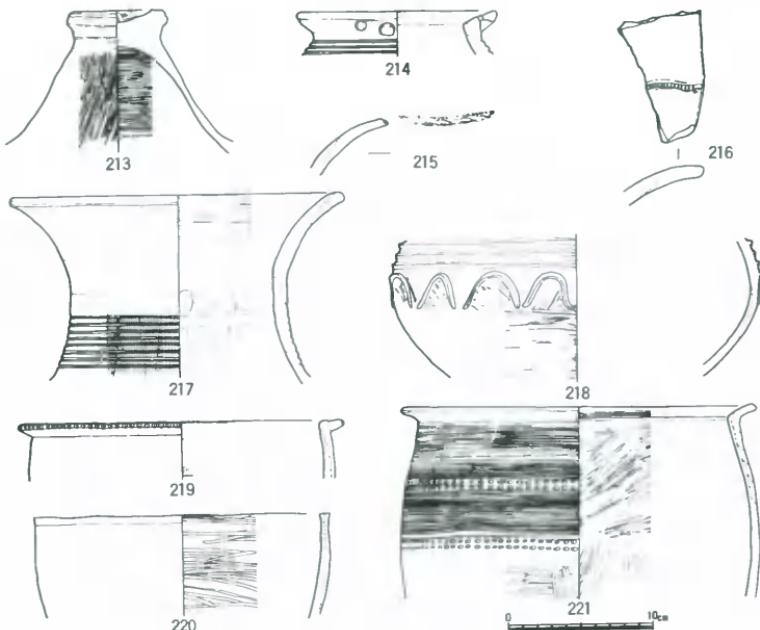
T 33は、比較的単純な層位を示し、T 14に近い淡灰褐色土層、灰褐色土層が堆積している。出土遺物の中には、I 2のような鉄器がみられる。

T 11～13は、第2地点のSD 06が曲折して環濠をなす可能性も考慮して設定したトレンチである。T 11では、第65図のように土壤状あるいは住居址状を示す淡灰褐色土のプランが検出され、更に数本の柱穴が検出された。遺構検出面は海拔約1.8mである。

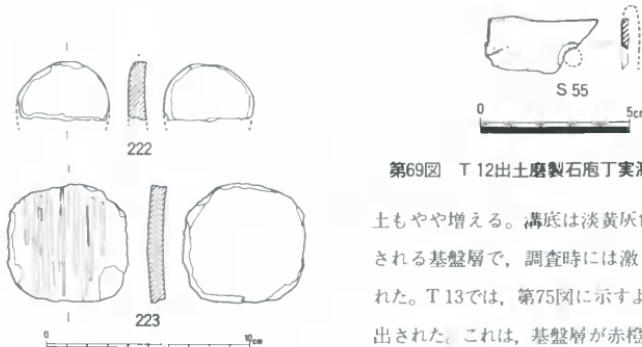


第66図 T 12出土土器実測図 (SX 11・包含層・SD 03上層) (1/4)

暗橙褐色砂質土層から成り、獸骨・ハイガイを多く含み。ことに後者は極めて広い範囲で出土し、カキ・ハマグリ・アカニシなどもみられる。これらに伴って213~243のように多量の弥生式土器も出土し、器種構成の一端を示している。また、スサ状纖維を含んだ焼土塊（径5~7cm位）も多く出土している。下層は淡黄灰色微砂質土層で、中層に比べると貝・土器・獸骨の出



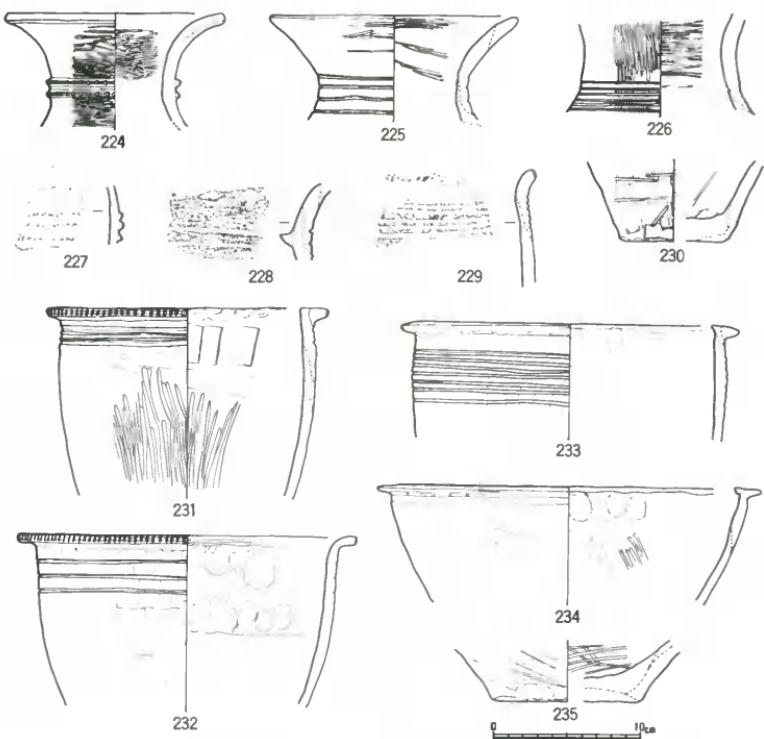
第67図 T 12-SD 03出土土器実測図(1) (1/4)



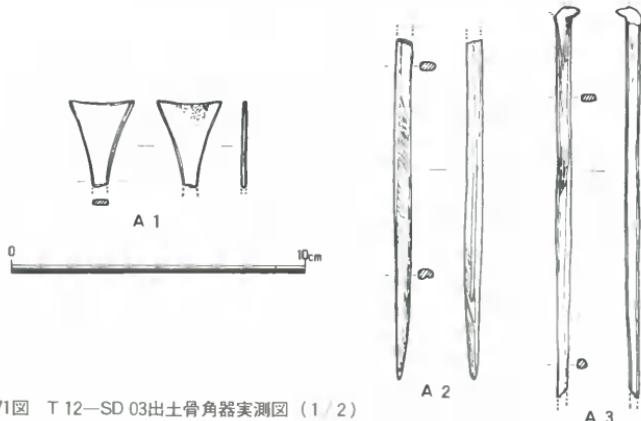
第68図 T 12出土土製円板実測図 (1/3)

第69図 T 12出土磨製石庖丁実測図 (1/2)

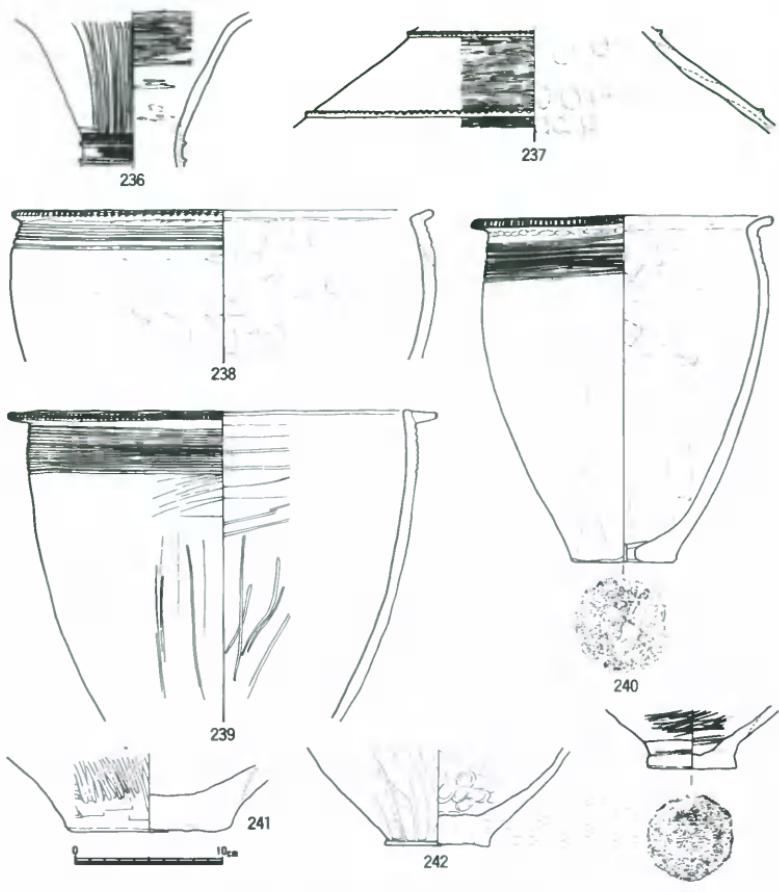
土もやや増える。溝底は淡黄灰色砂質土で形成される基盤層で、調査時には激しい湧水がみられた。T 13では、第75図に示すようにSX 12が検出された。これは、基盤層が赤橙色を呈するほど焼けて固くしまった炉壁が示すプランで、その厚さは約5cmを測る。深さは約30cmを測り、多



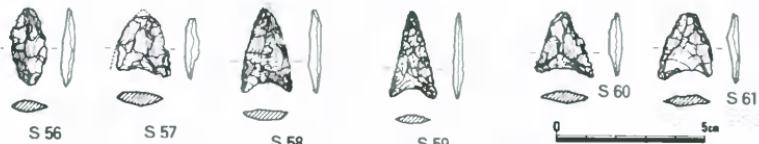
第70図 T 12-SD 03出土土器実測図(2) (1/4)



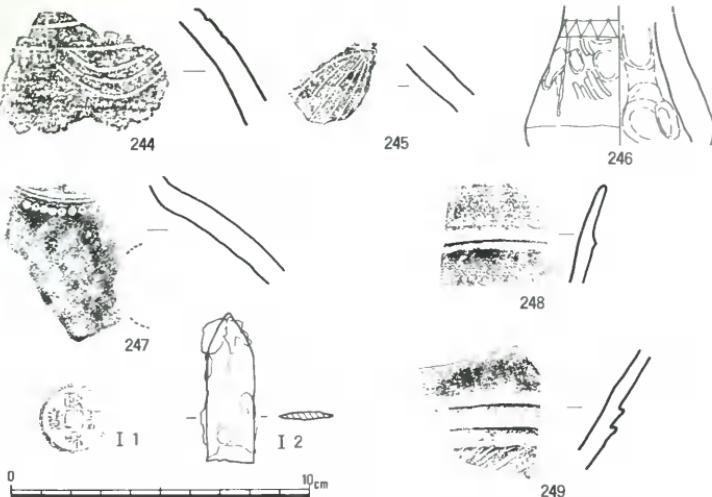
第71図 T 12-SD 03出土骨角器実測図 (1/2)



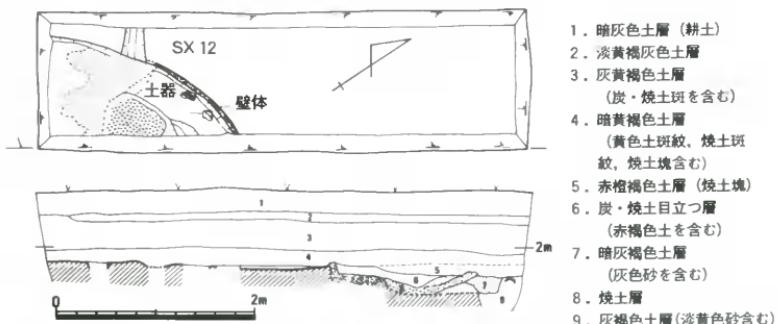
第72図 T 12—SD 03出土土器実測図 (1 / 4)



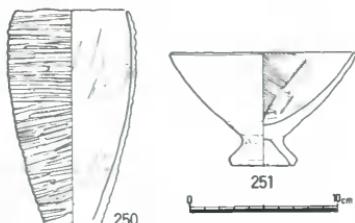
第73図 第3地点出土石鏃実測図 (1 / 2)



第74図 第3地点出土遺物実測図（土器・ミニチュア土器・銅錢・鉄器）（1/2）



第75図 T 13実測図（1/60）



第76図 T 13—SX 12出土土器実測図（1/4）

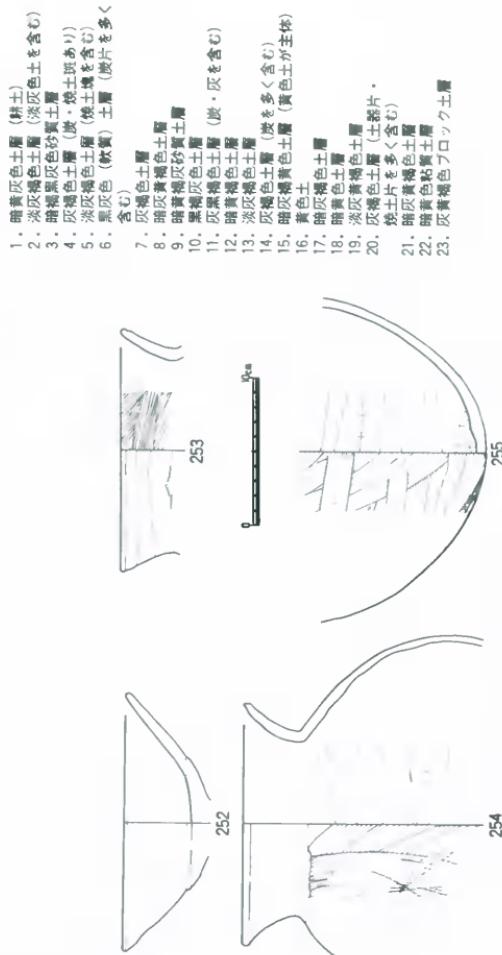
量の焼土や焼土塊がやや南に寄った部分に集中している。250・251は壁体に近い位置の床面で出土した製塩土器と台付鉢形土器である。以上のことからこの遺構の性格が製塩に関する施設である可能性も考えられる。（註1）時期的には、弥生時代後期後半と考えられる。



第79図 T 33実測図 (1-60)

1. 暗灰色土層 (耕土)
2. 淡褐色土層
3. 嫁褐色土層
4. 暗褐色土層  
(焼土斑)

第77図 T 32土層断面図 (1-80)



第78図 T 32出土土器実測図 (1-4)



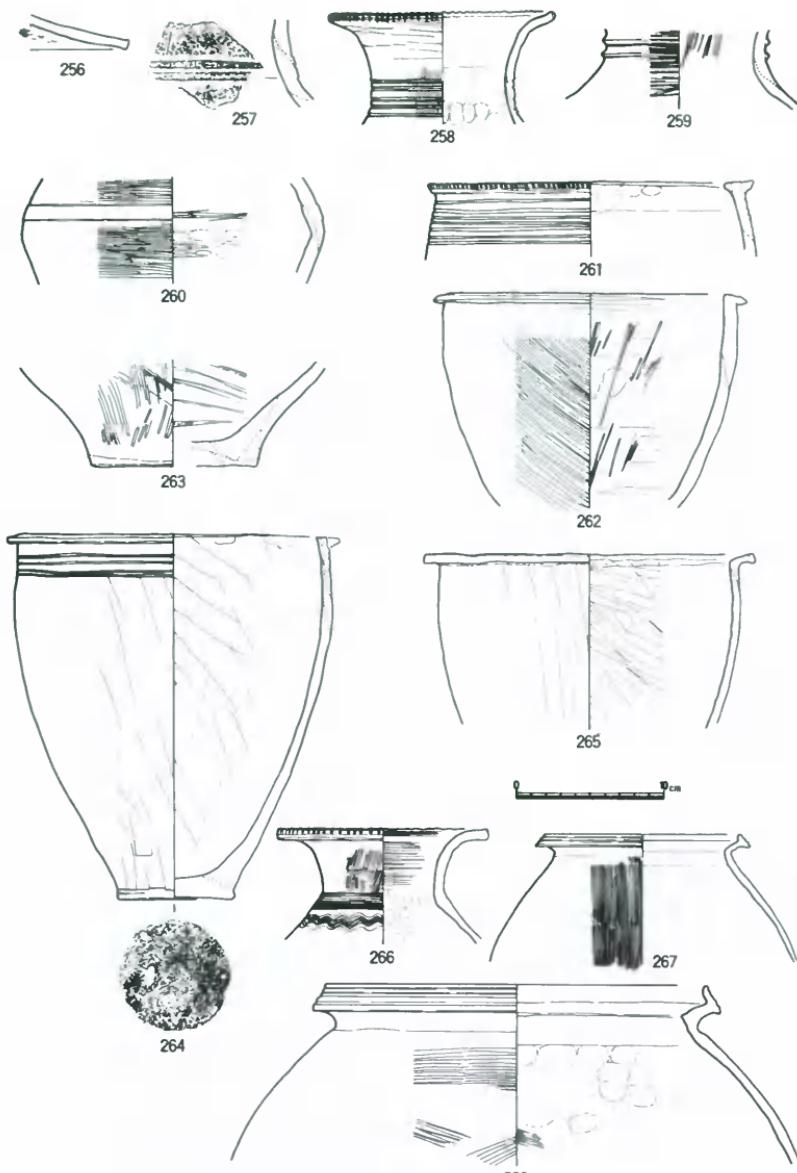
第80図 T-17土層断面図 (1-80)

1. 暗灰色土層(耕土)
2. 淡灰褐色土層
3. 灰褐色土層
4. 暗灰褐色土層(炭片を含む)
5. 炭を多く含む灰褐色土層
6. 烧土層
7. 暗灰褐色土層・暗灰色土層
8. 暗灰褐色土層  
一条褐色に近いブロックを含む)
9. 暗灰褐色土層
10. 淡灰褐色砂質土層
11. 基盤層
12. 灰褐色土層(ブロックを多く含む)

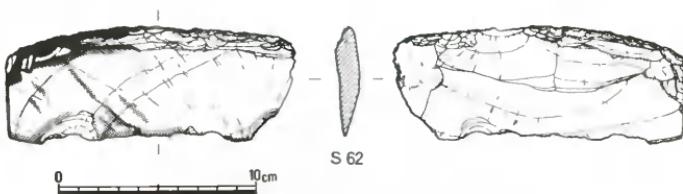
#### (4) 第4地点 (T-17) (第80~83図)

貝塚を検出した第2地点の南東方約25m位置する約750m<sup>2</sup>ほどの畠地で、周囲の水田より70cm高く残っている微高地残存部である。しかし、旧地形を残しているのではなく、小学校建設の際のグランド造成に伴って第2地点との間を土をトロッコで運搬されたといわれ、その際に多量の土器が出土して、むしろ、掘削に難済したと伝えられている。この時、破壊の及ばなかった第8地点では、なお遺構群の一部が残存しているのは予想外の事実であった。

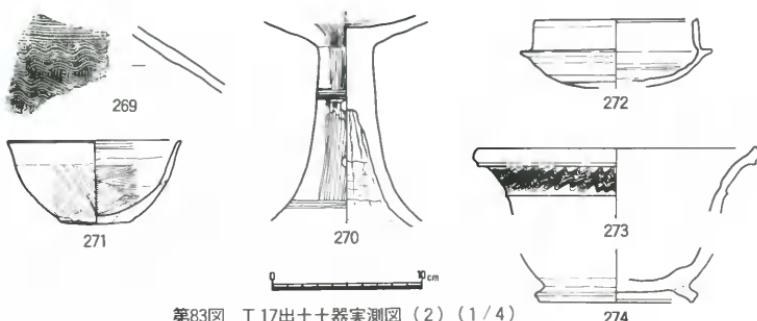
設定したトレンチはT-17のみで、平面的調査よりむしろ土層断面に重点を置いた。SD-08は中央部よりやや北側に位置する幅広いU字溝で、第81図に掲げる弥生時代前期の土器が多量に出土しており、後述のとおり鹿のあご骨も出土している。部分的な掘り抜き調査で方向等は正確には不明であるが、その形状は第2地点のSD-03に極めて似ており、幅約5m、深さ約80cm以上の規模が観察され、ほぼ北西から南東に流れる溝ではないかと推定される。このトレンチの北隅では、第82図に掲げる打製石庖丁が壺形土器266に伴って出土しており、この部分に中期前半の遺構の存在が推定される。土層断面の観察では土壙あるいは住居址の可能性がある。また、南半では、267・268のように弥生時代中期後半の土器も出土し、更に後期にかけても数多くの土器片、あるいはサヌカイト片の出土がみられる。そのほか、古墳時代、奈良・平安時代～中世にかけての土器（須恵器・土師器片など）もみられ、残存する遺構やそれらに伴って形成された包含層の時代的幅の広さを示している。



第81図 T 17出土土器実測図（1）（包含層・SD 08）（1/4）



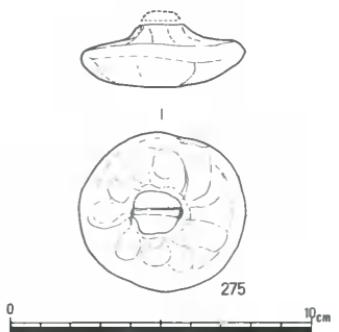
第82図 T 17出土打製石庖丁実測図 (1 / 3)



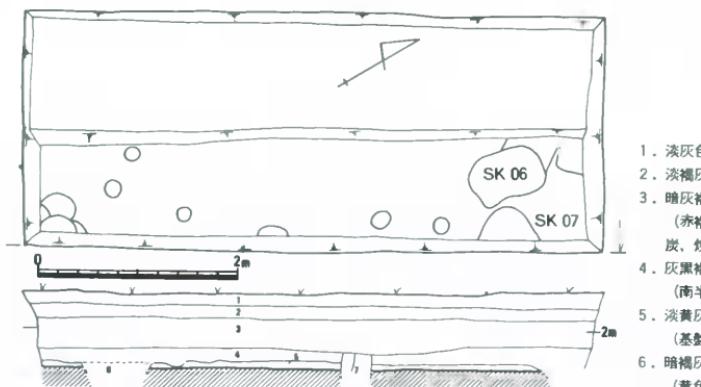
第83図 T 17出土土器実測図 (2) (1 / 4)

(5) 第5地点 (T15) (第84~86図、図版23)

この地点には宅地・畑・果樹園などがあるが、宅地の北側は南北方向の細長い畑が並び、所有者もそれぞれ異なる事情が重なって、トレンチ設定も最小限にとどめた。基本的な層序は5層からなり、第1地点の南部部分、T 3・4などとは異なり、しっかりとした包含層が観察される。プランのみ検出したSK 06・07はいずれも中期に比定される土壤で、小木炭片を含む暗灰褐色土が埋積する。また小さい柱穴が点在する。出土遺物の中には275のような手づくねでつくられた鏡形土製品が出土している。(註2)

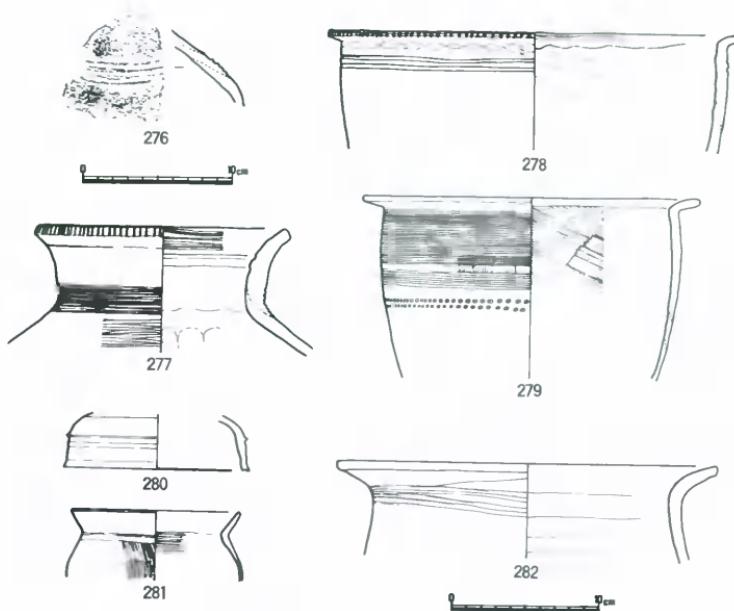


第84図 T 15出土鏡形土製品実測図 (1 / 2)

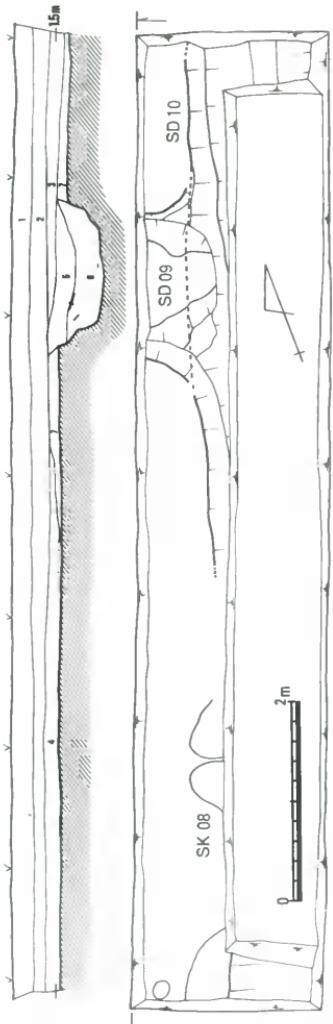


第85図 T 15実測図 (1 / 60)

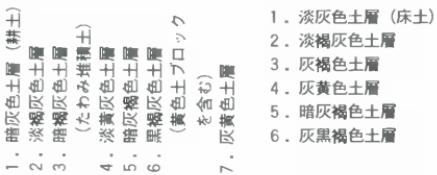
1. 淡灰色土層 (耕土)
2. 淡褐灰色土層
3. 暗灰褐色土層  
(赤褐色、土器多く含む、炭、焼土含む、砂含む)
4. 灰黒褐色土層  
(南半では焼土斑目立つ)
5. 淡黄灰色土～灰黄色土層  
(基盤層表層)
6. 暗褐灰色土層  
(黄色土小斑含む)
7. 淡褐灰色砂質土層  
(砂っぽい)



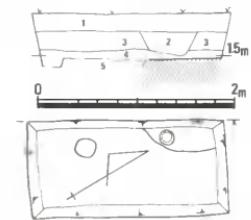
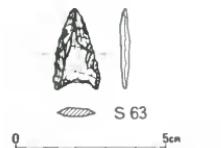
第86図 T 15出土土器実測図 (1 / 4)



第87図 T 19実測図 (1/60)



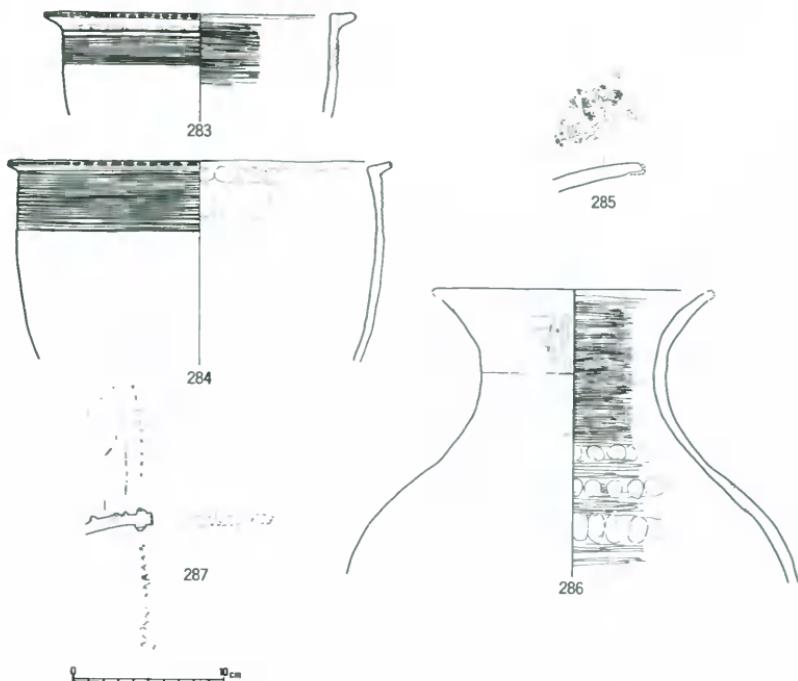
第88図 T 19出土石鎧実測図 (1/2)



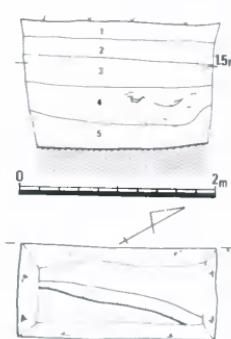
第90図 T 21実測図 (1/60)

(6) 第6地点 (T 19~23) (第87~96図、図版29~31)

調査区の西端部の水田に設定した調査区で、5本のトレンチを連続して設定した。主たる目的は、第1・2地点で検出したSD 03に関連する溝の行方であったが、予想に反して、時期・規模の異なる、トレンチに平行する溝を新たに検出した。これがSD 10である。この溝の北端

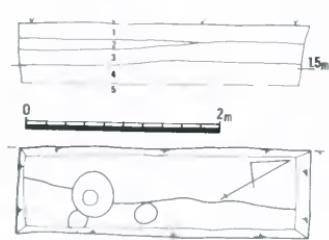


第91図 T 19出土土器 (SD 09・SK 08ほか) 実測図 (1~4)



第92図 T 22実測図 (1/60)

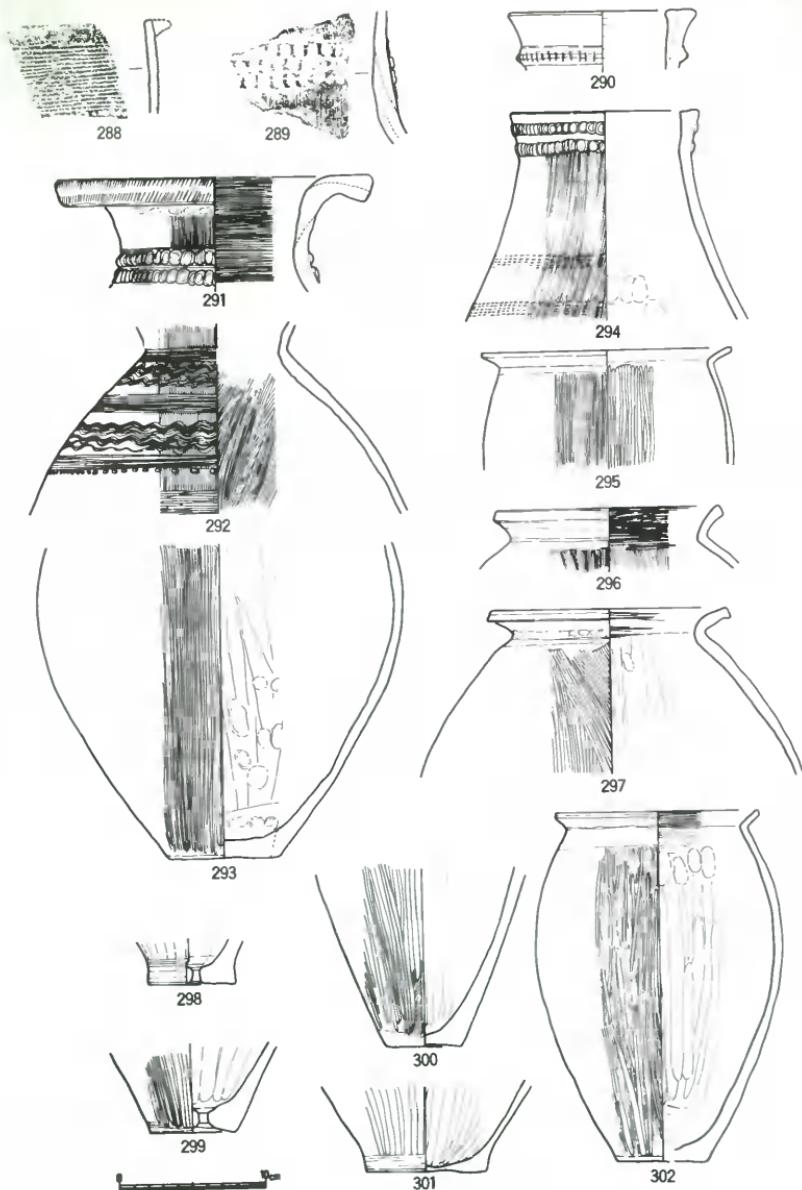
1. 暗灰色土層 (耕土)
2. 淡褐色土層
3. 灰褐色土層
4. 暗灰褐色土層
5. 暗褐色砂質土層  
(粘土ブロックを含む)



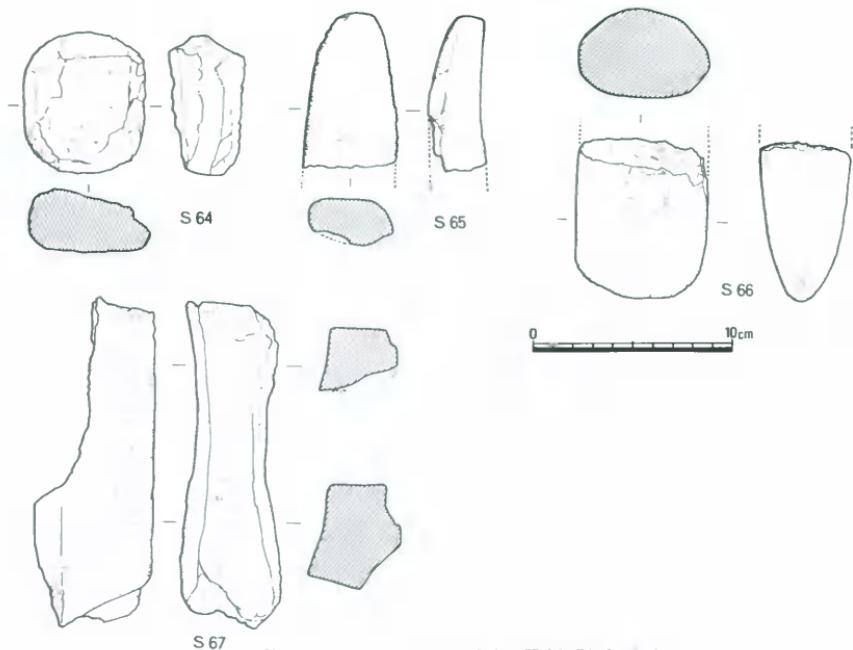
第93図 T 23実測図 (1/60)

1. 暗灰色土層 (耕土)
2. やや黒っぽい暗褐色  
色土層
3. 褐灰色土層
4. 暗灰褐色土層
5. 暗褐色土層  
(黄色土ブロック  
を含む)

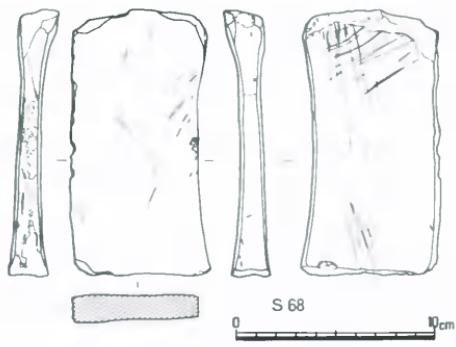
部拡張部分では、断面形がU字形を示すことが確認されており、291・293などの弥生式土器の大きな破片が出土している。S 66 太形蛤刃石斧もこの地点で出土したものである。T 19では、



第94図 T 19~22-SD 10出土土器実測図 (1 / 4)



第95図 T 19~20—SD 10出土石器実測図 (1/3)

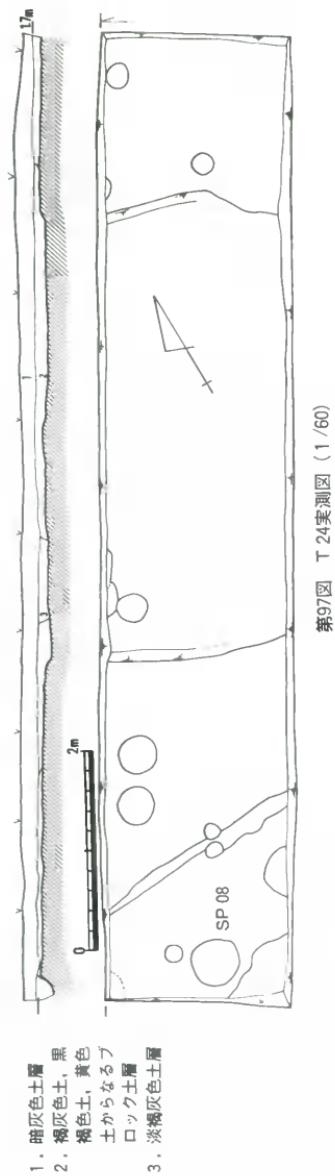


第96図 T 21出土石器実測図 (1/3)

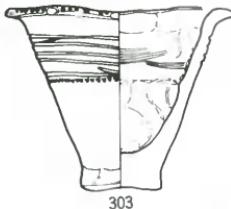
排土量が多量になるため、半掘にとどめたが、北方に近い部分で、SD 10に直行する前期の断面形台形を示す溝状遺構 SD 09を検出し、第2地点などとは異なった小規模な溝であることが注目され、前期の遺構のひろがりを示し、さらに西方に伸び続ける可能性が推考される。

前期に比定されるその他遺構としては、SK 08があり、286などの土器が上面で出土した。

T 20・21・22ではいずれも、SD 10の続きが検出されT 22では溝底まで検出した。下層埋積土は青灰色砂層で、流水によるものと考えられる。また中層・上層には多量の弥生式土器片(第94図)が出土しており、サスカイト製石鎌やチノブも認められる。



第97図  
T 24実測図 (1 / 60)

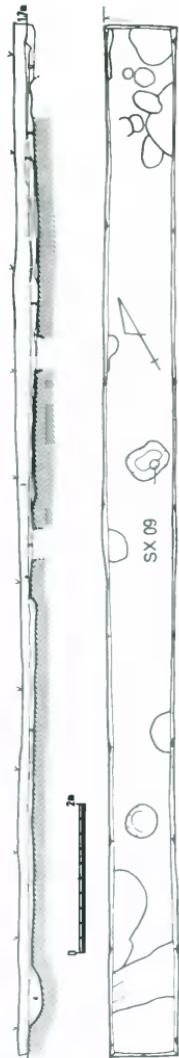


第98図 T 24出土ミニチュア土器実測図 (1 / 2)

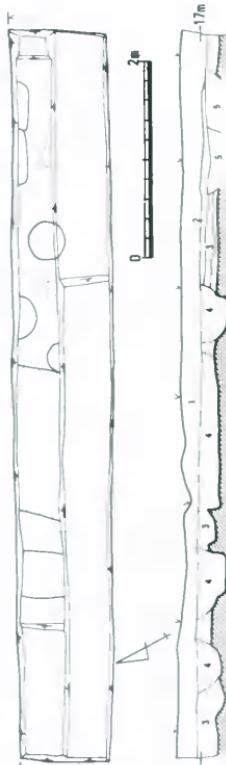
(7) 第7地点 (T 24・25・31) (第97~104図, 図版24, 24)

第2地点のすぐ東方に位置する水田部の調査区である。T 27設定前に、SD 06が東方へ流路を指し、第1次調査ですでに検出されていたT 17のSD 08につながるのではないかと推定していた。よって、T 24・25の設定でこの推定を裏付けられることとした。T 24・25両トレンチで検出される主な遺構は柱穴で、SP 08などは径約30~40cmを測り、古墳時代に推定される柱穴である。T 24で検出されたSK 09は、古墳時代に比定される長円形を呈する土壙で、完形品である椀305と製塩土器304、臼玉B 14が出土している。また、T 31ではやはり耕土を除去するとほぼ遺構検出面である基盤層が検出され、浅い溝ややや大き目の柱穴が存在する。出土遺物には、306・307があり、それぞれ前期から中期にかけての時期を示している。この地点は本来、第2地点と第4地点と同じ高さにあつたといわれ、包含層の土をほとんど失っているが、遺構の残存度は極めて高い。

1. 暗灰色土層  
(耕作土)
2. 灰色土層
3. 黄色土・灰色  
土・黒褐色土  
塊乱層
4. 暗褐灰色土層  
(ブロック土  
を含む)

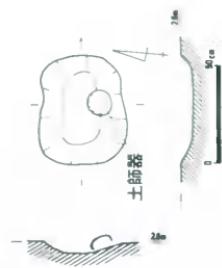


第99図 T 25実測図 (1 / 60)

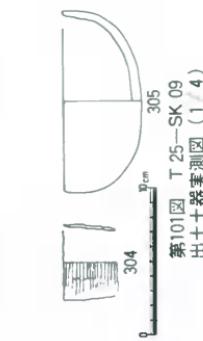


第103図 T 31実測図 (1 / 60)

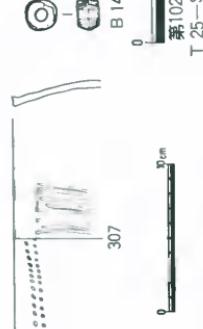
1. 暗灰色土層 (耕土)
2. 灰色土層
3. 变褐色土層  
(黄色土ブロック層)
4. 暗灰褐色土層  
(黄色土ブロック・  
マンガン含む)
5. 变褐色土層  
(黄色土ブロック・  
マンガン含む)



第100図 T 25-SK 09実測図 (1 / 30)



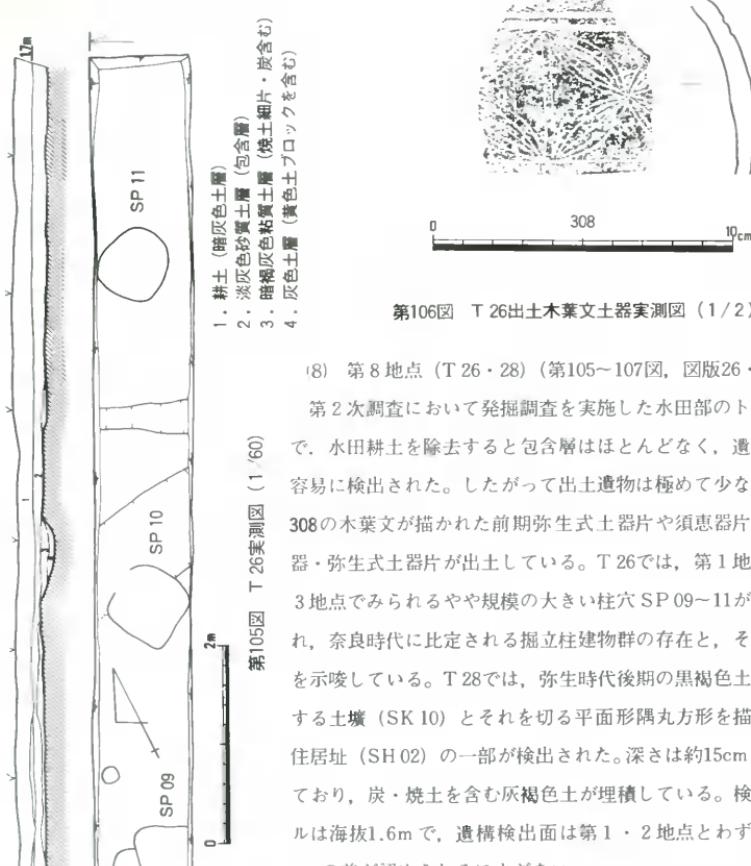
第101図 T 25-SK 09  
出土土器実測図 (1 / 4)



第102図 T 25-SK 09  
出土土器実測図 (1 / 4)



第104図 T 31出土土器実測図 (1 / 4)



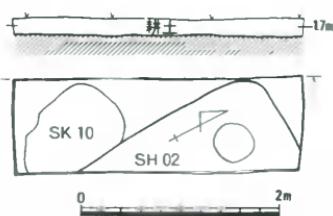
第106図 T 26出土木葉文土器実測図 (1/2)

(8) 第8地点 (T 26・28) (第105~107図, 図版26・27)

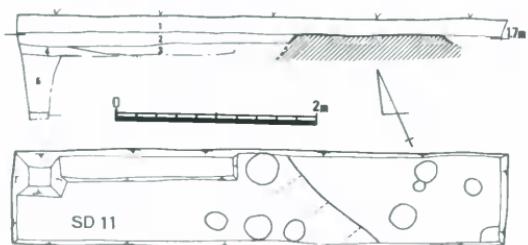
第2次調査において発掘調査を実施した水田部のトレンチで、水田耕土を除去すると包含層はほとんどなく、遺構面は容易に検出された。したがって出土遺物は極めて少ないが、308の木葉文が描かれた前期弥生式土器片や須恵器片・土師器・弥生式土器片が出土している。T 26では、第1地点や第3地点でみられるやや規模の大きい柱穴 SP 09~11が検出され、奈良時代に比定される掘立柱建物群の存在と、その広さを示唆している。T 28では、弥生時代後期の黒褐色土が堆積する土壤 (SK 10) とそれを切る平面形隅丸方形を描く竪穴住居址 (SH 02) の一部が検出された。深さは約15cm 残存しており、炭・焼土を含む灰褐色土が埋積している。検出レベルは海拔1.6m で、遺構検出面は第1・2地点とわずか約20cm の差が認められるにすぎない。

(9) 第9地点 (T 29・30) (第108~110図, 図版26)

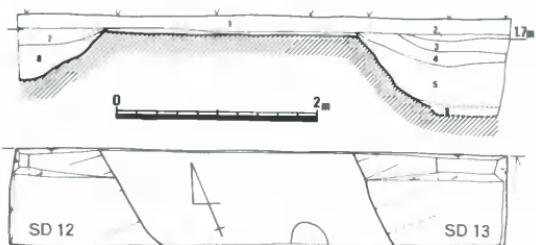
いずれも第2次調査で、発掘を実施したトレンチで、第8地点と同様、水田耕土を除去するとやはり基盤層面近くで遺構面が検出された。T 29では、径約15~30cm 前後を測る柱穴が点々とみられ古墳時代に比定される。ほぼ南北に流れる溝 SD 11よりも新しい時期を示している。出土遺物から鎌倉時代に比定される柱穴群である。T 30では、2条の南北方向の溝が検出され、東側の SD 13は鎌倉時代に比定されるが、



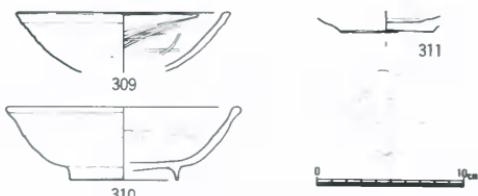
第107図 T 28実測図 (1/60)



第108図 T 29実測図 (1/60)



第109図 T 30実測図 (1/60)



第110図 T 30・SD 13出土土器実測図 (1/4)

西側の SD 12は弥生時代前期の可能性もある。これら両トレンチでも遺構検出面のレベルは海拔1.7mを示している。

#### (註)

(註1) 近藤義郎「上器製塩の話4」(考古学研究106(第27巻第2号)所収、1980年考古学研究会刊)笠岡市高島遺跡検出例などから土堤炉と分類されたものに形状が似る。

(註2) 間壁忠彦・藪子「辻山田遺跡」(倉敷考古館研究集報第10号所収、1974年11月倉敷考古館刊)弥生時代後期末葉に比定される溝Iから3点出土しており、土壤甕群との関わりから墓前供物か葬礼儀式に伴う遺物と推定されている。

#### T-29

1. 暗灰色土層(耕土)
2. 淡灰褐色土層  
(黄色土ブロックをわずかに含む)
3. 暗灰褐色土層
4. 灰黒褐色土層  
(粘質で固くしまっている)
5. 淡灰褐色土層  
(粘土・砂を含む、慶理あり)

#### T-30

1. 暗灰色土層(耕土)
2. 淡灰色砂質土・  
灰褐色ブロック土層(擾乱土)
3. 暗灰褐色土層
4. 黄灰色土層(黄色土斑紋)
5. 暗褐色土層  
(黄色土ブロック・焼土を含む)
6. 黑灰色砂質土層(粗砂)
7. 暗灰褐色土層  
(砂を含む、焼土斑紋あり)
8. 暗褐色砂質土層  
(黄色土ブロックを含む)

## 第4章 考察

### 第1節 弥生時代前期の遺構と土器

前期弥生式土器の研究は、奈良県唐古遺跡の発掘とその出土土器の分類によって大きく進展し、確立したといつても過言ではない。(註1)その後、佐原真氏による第1様式土器の細分化によってほぼ現在に至るまで、その基本的な考え方は継承されている。(註2)それらによると門田貝塚出土の前期弥生式土器は、概ね第1様式の新段階に比定される土器群が主体をなすが、その一方第2様式へかかる過渡的な様相を示す土器群の存在も指摘されており、(註3)いわゆる「門田下層」式はほぼ前者、「門田上層」式が後者に相当すると考えられ、最近の編年研究では、前期の最終末段階に対応しほぼ時期的に連続すると理解されている。(註4)しかし、今回の確認調査の実施に伴う、新たな大溝(SD 03・SD 06)や包含層や土壙(SK 02)などからの出土土器によると、これらの時期の範疇にとどまらず、「門田下層」式といわれる一群の土器よりも更に古い様相がうかがえるもの、あるいは「門田上層」式よりも更に連続して中期中葉・中期後半から後期にかけての各時期土器群の存在が明らかとなった。これらの土器についての細部に及ぶ観察については巻末の観察表に付すとおりであるが、古相を示す一群の土器及び遺構およびそれらに続く土器についても以下略述を加えることとする。

今回の確認調査で出土した前期弥生式土器でもっとも古い様相を示すものとして、T 18—SD 07出土の土器がある。133は壺形土器で、体部上位に段をかたちづくる特徴が看取され、134も破片であるがやはり同様である。この土器と共に出土した小形鉢形土器として136のようなやや趣の異なる器種が見うけられ、津島南遺跡出土例にも類品が存在するものである。(註5)検出遺構は、溝状遺構であるが、西から東に向けて約20cmの落差があり、舟形土壙状をなす可能性も残している。近接して、SD 06が存在するが、これから派生する溝状遺構ではなく、時期的には先行する遺構といえる。この133と相前後する時期を示すものに、80があり、前期の古い段階に比定される遺構群の存在が推定され、集落形成の上限を示しているといえよう。このSD 07のすぐ北にやや不整形な土壙状の凹み(SX 07)があり、中には貝層のかたまりが検出されている。時期的には、SD 07と共にSD 06に先行する時期に比定される。

本貝塚の中心をなすSD 06は、下層・中層から上層にかけては貝層が含まれ上層には、局部的にマウンド状をなすほど多くのハイガイを中心とする貝殻が堆積している。この前者にあたる層からの出土土器が「門田下層」式、後者が「門田上層」式とされ、時期的基準とされた遺構である。このSD 06の北部分はすでに岡山大学考古学研究室による調査が実施された部分で、

今回の調査ではその南に接する部分 T 9 でその延長部分を検出し、現状で保存し、その南へ設定した T 27 で、この SD 06 の横断面を検出し、溝底をも確認した。この地点では貝層の密度は著しく減じ、埋積土層中（中層～下層上位）に若干のもろく風化したハイガイが認められるにすぎず、T 9 のように最上層に、あたかも最終埋積を示すような密集した貝層は認められない。144 は溝の最下層で出土した壺形土器で頸部にヘラ描き沈線 3 条が施されるが口縁部の開きはあまり発達していない。146・147・148 はいずれも壺形土器で 148 を除いては、口縁部の一部で復元実測図であるがいずれも 144 に比べるとやや外方に発達する口縁部形を示す。148 は底部をのぞく概形がほぼうかがえる完形片の復元実測図であるが中層（第 6 層）で細片となって集中出土したものである。ヘラ描き沈線は頸部下半に 5 条ほど施され口縁部は 146・147 と同様朝顔形に開く。これらに共伴する木葉文の描かれた土器片が 130 である。

144 と 146・147・148 の差異ははっきりとした型式差とはみなせないが、一つの傾向として指摘できるのではないかと考えられる。

一方、第 3 地点で新たに検出した SD 03 は、その遺物の大半を T 6, T 12, T 16 の一部で出土しており、多量かつ中期にかかる土器群が確認されている。T 12 では T 6 でみられなかった溝廃絶（埋積）後に形成された包含層が確認され、前期から中期前半にかけての土器が混濁して存在するが、204・205 などのように夔形土器に櫛描き沈線の施文が始まる時期にはこの溝は使用されなくなったことを示している。これらの櫛描き沈線が施される夔形土器の一群は従来「高田」式とも呼ばれ（註 6）中期初頭の標式的な型式と考えられているが、共伴する壺形土器については特定することができない。SD 03 上層出土遺物は第 67 図に掲げるとおり、一部に 221 のような明らかに中期に比定されるものも含まれており、廃絶時期を示す。上層から中層、下層にかけてハイガイを中心とする貝類が多量に埋積しており、ハマグリ、カキ、ウミニナなどの主に干潟の貝が確認されている。これらに伴って、食料残滓としての骨角器・獸骨・鹿角なども出土している。土器の出土も極めて多量で、第 67・70・72 図に掲げる土器群が器種構成をほぼ示しているといえる。先述の上層をのぞき、中・下層ではこれらの土器の極端な形式的差異はなく、壺形土器では 224・227 のように貼り付け突帯による文様構成を示すものが含まれ、特に 218 は 48 と同様、播磨地方の特色を如実に示している。（註 7）一方、夔形土器では貼り付けの L 字口縁が主流を占めているようになる。また 214・216 はいずれも口縁部内外面に丹塗りを施す彩文土器であるが、赤色塗彩による文様は明瞭ではなく彩色土器というべきかもしれない。なお 214 には蓋をとりつけるための孔が穿たれている。これらの遺物と共に出土した骨角器はいずれも全形をうかがえないが、簪と考えられるものである。いずれも鹿角製と推定され、A 1・A 3 は上部装飾とみられるバチ形部分や突起をつくりだしている。（第 5 章参照）

T 17 では、SD 08 を検出した。平面的にどういう方向を示すのか判然としないが、ほぼ北西

方から南東方に流れる溝ではないかと考えられる。出土遺物には、第81図に掲げる258～265のほかに鹿のあご骨など獸骨片が出土しているが、ハイガイ等の貝類は全く出土していない。256は蓋で内外面共にていねいなヘラミガキ調整が施されやや薄手である。なお今回の確認調査では蓋の出土は極めて少ない。一方、このトレンチではSD 06に先行する時期の土器たとえば、257などが出土しており、ケズリダシ突帯の手法が認められる。一方、中期前葉に比定される266の壺形土器は、S 62の打製石庖丁と共に、T 7北隅の基盤直上層から出土したものである。T 12のSD 03上面の包含層出土遺物たとえば、205・206などの甕形土器にはほぼ対応する近い時期を示し、櫛描き文様が盛行する時期を示している。一方、267・268などの中期後葉に比定される甕形土器も出土している。一方、T 19ではほぼ東西方向を示すSD 09の一部が検出された。検出部分はごくわずかではあるが幅1.5m、深さ50cmを測り、SD 03・06などと異なり断面形が逆台形に近い。出土遺物には第91図の283・284などが掲げられるが、いずれも施文・成形手法・器形が酷似し、ヘラ描き沈線の多条化の傾向と、貼り付け逆L字形口縁部が認められる。SD 03出土の66・67と同様大小の相似形を示す基本的なセット関係をなすのではないかと推定される。全形は不明であるが、各々甕・甌の関係となる可能性もある。

溝以外の遺構としては、第1地点T 2で検出されたSK 02は今回検出した溝以外では数少ない弥生時代前期の土壙である。(註8) 上部及び約半分を近世の野ツボ状土壙によって切られていたが、第13図14～18の土器が出土している。甕14・15、鉢16、壺形土器17・18が出土しているが、甕形土器では貼り付けのL字口縁を示し、ヘラ描き沈線は多条で10数条にのぼる。また、T 19で検出したSK 08では原形がうかがえる286の壺形土器が出土しており浅く粗雑なヘラ描き沈線が頸部下間にわずかに観察される。

以上、弥生時代前期の検出遺構と出土土器について概述したが、SD 03・06・08の大溝の性格は本文で述べたように、用水路としての可能性を指摘した。SD 03検出時には、SD 06と対になって、環濠を形成するのではないかと思われたがそれらの東方、西方でも前期弥生式土器片の出土量は変らず、T 26における木葉文土器の出土、SD 08の検出、西方T 19におけるSD 09の発見によって前期の遺構群、すなわち居住区はほぼ全面にわたることが確認された。環濠集落の可能性が強い広島県大宮遺跡では2条の溝が集落をめぐり、埋積状況から土壙の存在を推定し内側から埋没したことが推定されている。(註9) また、東奈良遺跡では幅約10m、深さ約3mの二段掘りされた大溝が検出されており、この溝の内側、外側とでは遺構の検出度に明瞭な差が現れるとされ、遺跡の所在地が低地であることによる水捌けの必要性から掘開された溝ではないかと考察しているが、環濠集落の可能性も示唆している。(註10) これらのような状況は当遺跡では発掘面積の狭さもあって確認できなかつたが一つの手がかりとして看過できない事実であろう。前章で紹介した月の木遺跡の溝との形状の類似もまた重要な事実で、近い

将来の事実報告が期待される。しかし、これらのことによって環濠の可能性は全く否定された訳ではなく、より広い確認調査の実施によって慎重に解明しなければならない問題であろう。

一方、多くの出土土器については、断片的な所見について、第3章および本章で若干触れるにとどまったが特に、中期初頭から中葉にかけての連続的な型式・器種の存在は特筆されよう。個々の土器の形状等については観察表を付し、前期から中期にかけての出土土器について更に第111図を掲げ、およその相対的な位置を掲げたので参考されたい。

## 第2節 主要な遺構・遺物について

### (1) 弥生時代中期～古墳時代

弥生時代前期における遺構・遺物についてはその概略を述べたが、中期以後の主要なそれらについての若干の説明と考察を記しておく。

まず、前期に続く時期の遺構としてT19で検出されたSD10がある。幅約1.5m、深さ70cmを測るU字溝で、ゆるやかに曲折しながら南北方向に流れる。時期的には中期中葉を示し、他の地点と比べ、この時期の土器の大半がこの地点から出土している。規模はやや小さいが、土器の出土量は極めて多くS64～S67などの石器も共伴しており、当時の居住区との近さを物語っている。この時期の遺構は、南方約350mに位置する助三畠遺跡で、大規模な溝が検出されており、集落の連続性を示唆している。(註11) この時期の遺構としてはT15のSK06・SK07があげられる。中期後半に比定される遺構は特定できなかったが、T17で267・268の鏡形土器が出土しており、連続的な集落の在り方を考えさせる。後期に至ると、各調査区でいっそう土器の出土が増え、特に製塩土器がT14・T8などで出土しており、後期中葉の製塩土器の存在は早くから知られている。(註12) T8では土器溜り状をなしたSX09からまとまった出土をみ、付近からは、古墳時代の製塩土器124も126・127と共に出土しており、T13では竪穴状の遺構が検出され、古墳時代にかけての連続的な製塩作業が行われたことがわかる。T13で検出されたSX12は竪穴状の遺構であるが、前章で述べたように製塩炉の可能性も推定される。出土遺物の製塩土器250はやや口径も小さく、スマートな形態を示し、和歌山県古目良遺跡出土品との関わりも推定される。(註13) 弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構は、他にSX03・SX10などの土器溜りや、SE01・SE05・SD10などが広く散在する。5世紀末葉前後に比定される古式須恵器片はT17やT1で出土しているが、これらとほぼ時期を同じくする遺構にSX08やSK09があり、いずれも滑石製の臼玉が出土していることが注目される。殊にSX08では、滑石製有孔円板と共に臼玉が10個出土しており、祭祀遺構の可能性を考えさせる。T15出土の鏡形土製品との関連も軽視できないであろう。一方SK09は小規模な土壙であるが、完形の土師器盤305と製塩土器片304とやはり臼玉が出土している。この時期の

他の遺構としては T 24—SP 08などがあり、径約30cm 前後の中規模の柱穴が掘立柱建物や堅穴式住居址の痕跡の一部を残している可能性がある。

一方、堅穴住居址としては T 3—SH 01, T 28—SH 02があるが、これらはいずれも隅丸方形を示し、弥生時代終末期から古墳時代初頭に比定できよう。

### (2) 奈良・平安時代

5世紀末葉から6世紀初頭にかけての出土遺物を最後に、7世紀後半までの時期を示す出土遺物が途絶える。この時期に洪水等の自然災害で集落が潰滅的な打撃を受け消滅した痕跡は見あたらず、その理由は不明である。しかし、奈良時代になると、SB 01・SB 02やSP 01～03及びT 26のSP 09～11などのように大規模な掘立柱建物の一部を構成するとみられる遺構が忽然と出現する。T 7・T 5においては、第40図112・113のような小形硯片や杯蓋転用硯片が出土しており、官衙的施設の性格の一端を示しているかもしれない。SB 01・02の柱間からすると倉庫的な建物が想定される。出土遺物で注目されるものに先述の陶硯片のほかに140・141の製塩土器風の鉢形土器の出土があげられる。142・143などの須恵器と共に伴出土しており混入の可能性もわずかにあるが、7世紀後半～8世紀初頭にかけての製塩土器の可能性が推定される。赤橙色を呈し、二次的な焼成痕跡があることから製塩土器の可能性は極めて高いと考えられる。

その他緑釉陶器は第1・2地点を中心に第25図のように破片16点が出土している。量的にも質的にも優れており、その示す時期に存在した遺構群の性格に興味がもたれる。ひとつには、邑久郡を構成する10郷の中心的な地勢を占める尾張郷の核に近い位置であることを示しているといえる。郡衙・正倉との関連と至近性が考えられる。

### (3) 中世

鎌倉時代を中心とする遺構や遺物が主に第1地点・第2地点に存在する。SE 02～04・SE 06・07やSB 04などがこの時期に比定される主要遺構で、SX 01のように掘状の掘りこみもある。これらの遺構は、ただ集落の一部というだけではなく、中世に成立した「尾張保」や、中世武士団の成長や動向と密接な関わりがあったことも推定される。出土遺物では、今回詳しく紹介することができなかつたが中国製の青磁144・白磁188や第63図の銅錢などがあり、更に畿内から移入された瓦器の出土は当時の貿易や物質交流のあとを示している。一方、備前焼や須恵器などはこの第一地点を中心に散見し、土師質の竈・鍋・甕などの出土が目立つ。これらは概ね12～14世紀にかけての集落の存続と日常生活用具の一端を示しているといえる。

以上、本節では弥生時代中期以降の遺構・遺物について略述したが、他に石器の出土が顕著で、主にサヌカイト製の石鎌や石錐・打製石庖丁など多く出土がみられ、その所見については

第2表に掲げるとおりである。これらは、主として前期から中期にかけての時期を示し、型式的には縄文時代に遡りうるものはみられない。磨製石器としては石庖丁、太形貯刃石斧、砥石など（第60図、第95図など）があり、別項を設けて詳細を報告すべきであるが、限られた報文紙数の中で網羅、詳述はできなかった。他日の報告機会を待ちたいと考えている。

本稿の執筆にあたっては、文化課同学諸兄はもとより岡山大学考古学研究室の資料閲覧を快諾して下さった近藤義郎教授、秋山浩三氏らに有益かつ多大なご教示を得た。深謝の意を表すると共に、それらを十分に生かすことができなかつた点は、ひとえに筆者の非力に帰することを明記しておく。

(註)

- (註1) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎「大和唐古遺跡の研究」京都帝国大学文学部考古学研究室報告第16冊 1943年刊。杉原莊介・小林行雄編「弥生式土器集成・本編」1964年、東京堂出版刊。
- (註2) 佐原真「山城における弥生文化の成立」『史林』50巻5号所収 1967年刊。田辺昭三・佐原真「日本の考古学—弥生時代」『近畿』河出書房 1965年刊。畿内第一様式土器は古・中・新の各段階に三分され、その基本的な考え方を定着させている。近年、畿内に古段階の土器は存在しないとする見解もあったが、最近では兵庫県吉田遺跡や大阪府鬼塚遺跡出土の再検討によって否定されている。(井藤暁子「入門講座弥生土器(近畿)」考古学ジャーナル 195、1981)
- (註3) 鎌木義昌「門田貝塚の文化遺物について」吉備考古第84号所収、1952年吉備考古学会刊。1950年に氏が調査され、得られた成果について報告されている。これ以前に長瀬薰氏は「考古学論叢4」に「岡山県邑久郡邑久村門田貝塚」を発表している。1937年刊。
- (註4) 高橋謙「弥生土器—山陽1—(入門講座)」(考古学ジャーナル173~181号 1980年、ニューサイエンス社刊)。
- (註5) 藤田憲司「中部瀬戸内の前期弥生式土器の様相」(倉敷考古館研究集報第17号所収、1982年、倉敷考古館刊)。
- (註6) 鎌木義昌・近藤義郎「岡山県高田遺跡」「日本農耕文化の生成」所収、1961年東京堂出版刊。
- (註7) 今里幾次「播磨の弥生式文化」(「播磨考古学研究」所収) 1980年、今里幾次論文集刊行会刊。杉原莊介・小林三郎「千代田遺跡」(「日本農耕文化の生成」所収) 1972年、東京堂出版刊。
- (註8) 他にも遺構名を付さない土壤状の遺構がT11・T27などで検出されているが、完掘には至らなかつた。
- (註9) 中田昭・桑田俊明「大宮遺跡第三次発掘調査概報」 1980年、広島県教育委員会刊。
- (註10) 奥井哲秀・井上直樹ほか「東奈良一発掘調査概報Ⅱ」 1981年、東奈良遺跡調査会刊。
- (註11) 4条の溝が検出されいずれも中期中葉に比定されるU字溝で幅2~3m、深さ約60~90cmを測り検出全長約58mを確認している。馬場昌一氏・平井典子女史の御教示による。
- (註12) 岩本正二「弥生時代の土器製塩—備讃瀬戸の場合—」(考古学研究 第23巻1号(通巻89号)) 所収。門田貝塚出土の製塩土器をB類に比定され、児島の対岸である岡山南部の平野部に製塩がひろがる時期にあるとされている。また古墳時代に比定されるD類の存在も、すでに指摘されている。
- (註13) 近藤義郎「日本塩業大系史料編—考古—」所収。1978年、日本塩業研究会刊。

## 第5章 門田貝塚確認調査時に出土した動物遺存体

早稲田大学考古学研究室 金子 浩昌

検出された動物遺存体は次のような種類のものである。

### I 軟体動物 Mollusca

#### a. 腹足綱 Gastropoda

##### 前鰓亜綱 Prosobranchia

##### 中腹足目 Mesogastropoda

##### タニシ科 Vivipariidae

1. オオタニシ *Cipangopaludina japonica japonica*

##### ウミニナ科 Potamididae

2. ウミニナ *Batillaria multiformis*

##### 新腹足目 Neogastropoda

##### アクキガイ科 Muricidae

3. アカニシ *Rapana venosa*

#### b. 二枚貝綱 Pelecypoda

##### 翼形目 Pteriomorphia

##### フネガイ科 Arcidae

1. ハイガイ *Tegillarca granosa*

貝類は採集されたもののうちの一部をみるだけであったので詳細は不明であるが、ハイガイの大型のものがあり興味を引いた。

### II 脊椎動物 Vertebrata

#### a. 硬骨魚綱 Osteichthyes

##### スズキ目 Perciformes

##### スズキ目 Serranidae

1. スズキ *Lateolabrax japonicus*

##### タイ科 Sparidae

2. クロダイ *Acanthopagrus schlegeli*

b. 哺乳綱 Mammalia

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae

1. タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

奇蹄目 Perissodactyla

ウマ科 Equidae

2. ウマ *Equus caballus*

偶蹄目 Artiodactyla

イノシシ科 Suidae

3. イノシシ *Sus scrofa*

シカ科 Cervidae

4. ニホンジカ *Cervus nippon*

門田貝塚の確認調査で検出された動物特に脊椎動物の遺存体は別表に記したのがそのすべてであって、これのみを以てしては、この貝塚の動物相からみた特色ともいるべきものを理解することはできないであろう。特に本貝塚が弥生時代に属するもので、種々の面から縄文時代のそれと比較しながらのべねばならない問題を有しているからである。また門田貝塚については既に組織的な発掘もあり、発掘された動物骨も多いと聞いている。また、そうしたもの的一部は、地元の邑久考古館に展示されてもいた。筆者は、それらについて調査したことがあるが、筆者らの見たのも発掘品の一部であるらしい。とすると、門田貝塚動物については今後の調査の結果をまたねばならないので、ここでは資料の呈示に止めておきたい。

しかし、今回的小部分の発掘にもかかわらず、種々な種類のものが発掘されていることは、極めて興味深いことといわねばなるまい。

例えば、魚骨については、ボラ、スズキ、クロダイ、が出土しており、内湾的な性格の強い魚種によって占められていた。これらの魚に対しては今回は出土していないが、骨角製漁具などもつくられていたことであろう。

獣類には、イノシシ、シカが主として出土していた。捕獲の個体には幼成獣が含まれ、それぞれ別々の条件、技術によって捕獲されていたことが推測される。特にシカでは、稀にしかみることのできない幼獣のあったことが注目される。下類骨標本はおそらく新生児、胫骨は数ヵ月位のものであった。こうした幼体は普通の貝塚では極めて稀であるが、長野県須坂町湯倉洞穴の弥生文化期層からはこうした幼獣骨が幾つも出土している。毛皮の柔かいことから、新生児や幼獣を専門に狙う猟師も最近までいた位である。それらが特別な品物として取扱われたこ

とも考えられる。弥生文化期の狩猟活動を単なる縄文文化期の残存物とする見方には問題があることを筆者は別のところでのべたことがある。門田貝塚のシカの幼若獣骨は、私たちにいろいろなことを考えさせるものである。（金子浩昌；三世紀の動物、「三世紀の考古学」所収、学生社1981年刊）

弥生期以降に属する動物にウマがある。下類骨のほぼ半分 ( $P_4$ ,  $M_1$ ~ $M_3$ ) をのこすのみであるので元の大きさなどを知ることができないが、歯牙などよりみる限りかなり小型の馬であったと思われる。

#### ウマの歯の計測値

	$P_4$	$M_1$	$M_2$	$M_3$
門田貝塚	長 幅	24.0 14.8	22.0 (14.5)	21.2 —
	エナメル幅 (14.0)	(13.3)	(11.7)	(11.0)
	長 幅	25.0 17.5	24.0 (15.0)	25.0 14.5
トカラ馬	長 幅	25.0 17.5	24.0 (15.0)	26.0 13.5
	エナメル幅 (15.5)	(13.0)	(11.0)	

（トカラ馬計測値は、林田、鈴木（1974）、「川入遺跡出土の馬骨について」による）

上表の歯の計測にもみられるように、門田貝塚出土の馬歯は、我が国の代表的な小型馬であるトカラ馬に匹敵する大きさのものである。トカラ馬は体高120cm足らずの小型馬であり、日本でのいわゆる古代馬と称する馬のなかにみることができる。日本ではこの他に中型馬とされる、これよりやや大きい馬（体高140cm未満程度の大きさ）の遺骸も出土する。門田貝塚の調査で出土した馬歯は、平安時代位まで降る時代のものといわれており、この時代には中・小両型の馬が飼育されていたことになるが、中・小型馬が使役の目的によってどの程度区別して飼われていたかということなどについては今後の研究に待たねばならないであろう。

岡山県下では先に古墳時代初め頃の上東遺跡で小型馬を、またそれよりやや新しい6~7世紀の馬で、中型馬の平均よりやや小さいとされるほぼ一頭分の骨が出土している。この他の資料を増加しつつあり、古代馬の全貌が次第に明らかになっていくと思われる。

#### 骨角製品と鹿角の頭蓋切断標本

##### 1. 刺突具（第71図-A2, 図版38）

シカの中手もしくは中足骨を材料としてつくられたもので細いきやしゃなつくりのものである。

現存長 113.7mm, 幅×厚 5.5×3.6mm

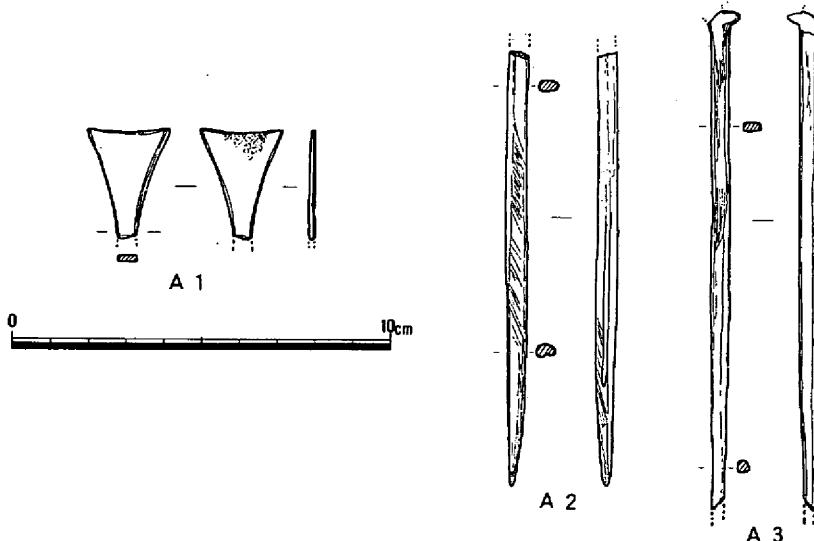
基の部分を欠損している。先端部を除いてほぼ同じような幅に仕上げている。全面に細擦痕がみられ、それが横にも斜めにもつく。この傷は、骨の表面を削るというよりも切りつけるような傷であり、意図的につけられたものではないかと思われる。つまり全体の形は削り法でつけられ、その上でさらにこのような傷付けが行われたと思う。それは、滑り止めのような効果をもつためではなかろうか。骨端の内側に髄腔の一部がみられる。

## 2. かんざし様の骨器の一部（第71図—A 3, 図版38）

細長い繊細なつくりの骨器で、頂部の一部分に突帯があり、片側のみがのこっているが、両側に同じような突起があったものであろう。

全体が断面長方形になるようなつくりのもので、加工は入念で、平らな面がつくり出されている。しかも保存が非常に良いので、あめ色を呈し、一部火を受けて焼けて黒くなっているのが、返ってべっ甲を思わせるような感じになっている。この黒いこげめが何故着いたのか明らかでないが、あるいは、べっ甲を思わせる意図的なものではなかったかと思うのである。このかんざしの材料は、骨質の硬さ、一部にのこる骨の髄腔面からみておそらくシカの中手、中足骨を利用したものであろう。両端が欠損しているが、全体がのこっていたとすれば17~18cm位になったものであろう。

上述したべっ甲に似せたつくりという想定も、弥生文化期における南方文化の多彩な導入ということを考えると、単なる憶測ではないかも知れない。なお、べっ甲が実際にのこる可能性はまず無いであろう。



第71図 T 12-SD 03出土骨角器実測図 (1/2)

### 3. かんざし頂部 (第71図-A1, 図版38)

三昧線のばち形をした加工品である。

現存長33.0, 最大幅21.3, 厚さ1.2mm (幅広い方), 1.4mm (折れ口部分)。均整のとれた三角形で、表面も真平らといってよい。平滑ではあるが、加工のための細擦痕が両側にみられる。片面には海綿質の一部がみられ、これが骨を材料としたことをよく示している。シカの中手もしくは中足骨を材料として海綿質のみえる部分が骨の近位骨端に当るのであろう。この製品の折れ口は、長方形をしており、おそらく、そのような断面形をもつ軸につながるものであったのであろう。例えば上述したかんざしともその断面の大きさが殆んど一致する。同一物ではないかということは否定し難い。

弥生時代の骨角製品はその基本的な形態に縄文期のそれと共通する例が多い。材料を骨角、歯牙に求めるからであろう。しかし、大きな違いは、それを加工する道具が金属器であることが多いらしいことと、金属製品を模してつくられることが少なくないということである。上述した本貝塚出土の骨角器についても、その表面につく加工痕、鋭利な切り口などはそうしたことを探測させる。

また形態についても、頂部のばち型は縄文期のものに類品が無いわけではないが、全体のつくりからすればやはり異質のもののように思われる。

弥生期のかんざし類はまだその例数が少ないが、頂部が末広がりになる形態のものは、名古屋市朝日貝塚、西志賀貝塚で出土している。しかし、本貝塚程特徴的な形をもつ例はないようである。

### 頭蓋切斷標本

断片的な骨が多いなかで、シカの角の一部をつけた頭蓋の切斷標本はよく原形をのこしているもので、シカの解体、加工の方法をよくみることができた。

本遺跡から出土したシカの頭蓋には、①前頭部の断片と②角の一部をつけたものがある。

①前頭骨断片は、その中央に前頭間縫合のみられる前頭骨のほぼ中央部分である。頭蓋を割った際の破片であるが、前頭骨の左右の角の付け根の部分で切ったものであろう。この部分で切斷するとちょうど、頭蓋腔のほぼ中央が割れて脳髄を取り出す作業も容易になる。これからさらに両方の角を左右に折っていくのであろう。

### ②頭蓋の一部と角の部分をのこす標本

標本にはこの種の加工のよくわかるもの2例があり、1例は若い個体のもので頭蓋を左右の中央、前頭間縫合で割り、さらに前頭部を横に切斷し、角の後方直下に走る冠状縫合で折りと

っている。

第2の例は大型成獣のもので、角をほぼ同様に切断しているが、切断は角の前面部分、つまり前頭骨の切断は角坐骨の直下でたたき切る様にしており、さらに後面はほぼ冠状縫合線に沿うように切っている。無駄のないきれいな切り方である。

このような角を角坐骨の周囲で切断する方法は縄文時代からみられる方法で、ほぼ全国的に行われたものであった。この方法は単に角を切断するというだけでなく、頭蓋を上手に割ることになるので脳髄の摘出にも有効であり、このために共通して行われる方法であったのであろう。縄文期のものも弥生期の例も従ってほとんど変らないが、縄文期の場合には本例にみるような角坐骨のみを切りとるという方法ではなく、前頭骨を割るといったより単純な作業で左右の骨を切り離していたようである。そのために前頭骨が角坐骨の下に広くのこるという結果になっている。こうした加工作業の時期的な違いのあることもわかってきた。今回の発掘で得られた骨角製品の数や種類は少ないが、実際にはさらに多くのものがつくられていた可能性がある。材料である角がどのように供給され、そして製品がつくられたか、この時代の生活の経済的な基盤を考える貴重な資料の一つとして、これらの遺物をみていかねばならないであろう。

第2表(1) 石器・金属製品・玉類一覧表

掲載図・番号	用途・名称	出土地点・層位	材質	重量(g)	備考
第10図—S 1	打製石庖丁	T 1 表採	サヌカイト	24.9	磨滅痕あり。
S 2	石錐	T 1 暗褐色土層	花崗岩	388	
S 3	太形脇刃石斧	T 1 包含層下層	花崗岩	270	
第18図—S 4	石鎌	T 1—P 1	サヌカイト	2.3	無茎・平基式
S 5	〃	T 12 暗灰褐色土層	〃	0.4	〃
S 6	〃	T 2 抜き掘り	〃	0.7	無茎凹基式
S 7	〃	T 7 表採	〃	1.3	〃
S 8	〃	T 3 表採	〃	1.7	〃
S 9	石錐か	〃 〃	〃	11.6	
S 10	打製石庖丁か	T 5 南半	〃	4.3	磨滅痕あり。
S 11	石鎌	T 6 —SD03	〃	0.7	無茎凹基式
第26図—S 12	石錐	T 5	細粒花崗岩?	408	
第37図—S 13	砥石	T 7—SD 05	安山岩	2239	表のみ使用痕を残す。
第38図—S 14	〃	T 7	砂岩	470	3面使用痕を残す。
第54図—S 15	磨製石庖丁	T 14 南端揚土	花崗岩	47.0	
第56図—S 16	石鎌	T 14 灰褐色土層	サヌカイト	1.1	有茎凸基式
S 17	〃	〃 〃	〃	0.6	無茎凸基式
S 18	〃	T 14 包含層	〃	1.3	有茎凸基式
S 19	〃	表採	〃	0.6	無茎凸基式
S 20	〃	T 14 南表採	〃	1.2	有茎平基式か。
S 21	〃	T 14 淡灰黄褐色土層	〃	0.8	無茎平基式
S 22	〃	〃 〃	〃	1.1	〃
S 23	〃	表採	〃	0.5	無茎凹基式
S 24	〃	T 14 淡黄灰褐色土層	〃	0.4	〃
S 25	〃	〃 〃	〃	1.2	〃
S 26	〃	〃 淡灰黄褐色土層	〃	0.8	〃
S 27	〃	〃 表採	〃	1.6	〃
S 28	〃	〃 〃	〃	3.1	〃
S 29	〃	〃 灰褐色土層	〃	0.5	〃
S 30	〃	T 12 暗灰褐色土層	〃	0.9	〃
S 31	〃	T 14 表採	〃	0.5	〃
S 32	〃	〃 〃	〃	0.7	〃
S 33	〃	〃 淡灰黄褐色土層	〃	1.1	〃
S 34	〃	〃 灰黄褐色土層	〃	1.1	〃
S 35	〃	〃 表採	〃	1.3	
S 36	〃	〃 淡黄褐色土層	〃	3.4	
S 37	石鎌	T 18	〃	1.8	
S 38	石錐	T 14	〃	2.2	
S 39	〃	〃	〃	1.1	
S 40	〃	〃 表採	〃	0.9	
S 41	楔形石器か	〃	〃	0.8	
S 42	不明	〃 表採	〃	2.5	
S 43	石鎌	T 27 暗灰褐色土層	〃	1.4	無茎凹基式
S 44	〃	〃 たわみ	〃	0.5	〃

第2表(2)

掲載図・番号	用途・名称	出土地点・層位	材質	重量(g)	備考
第56図—S 45	石鎌	T 8 灰褐色土層	サヌカイト	0.9	有茎凹基式
S 46	"	" "	"	1.5	無茎凹基式
S 47	"	" "	"	0.4	"
S 48	"	" "	"	1.4	"
S 49	"	表採	"	0.8	"
S 50	"	"	"	0.9	"
S 51	石錐	T 8 灰褐色土層	"	0.9	
S 52	打製石庖丁	" 淡灰褐色土層	"	0.9	
S 53	"	" 灰黃褐色土層	"	9.0	
第60図—S 54	磨製石庖丁		結晶片岩	9.1	穿孔痕 3か所
第69図—S 55	"		粘板岩か	—	
第73図—S 56	石鎌	T 11 表採	サヌカイト	1.2	有茎凸基式か。
S 57	"	" "	"	1.5	無茎凹基式
S 58	"	" P 1	"	1.7	"
S 59	"	T 12—SX 08	"	1.0	"
S 60	"	T 13 表採	"	1.1	"
S 61	"	" "	"	1.1	"
第82図—S 62	打製石庖丁	表採	"	138.0	
第88図—S 63	石鎌	T 19 表採	"	1.1	無茎凹基式
第95図—S 64		表採	花崗岩	219	顕著な打痕を残す。
S 65	磨製石斧	"	砂岩	131.7	
S 66	太形貽刃石斧	T 19—SD 12上層 (粗砂含暗褐色土層)	花崗岩	366	
S 67	砥石	表採	砂岩	413	
第96図—S 68	"	T 21耕土～褐灰色土層	不明	234.5	白色を呈する軟質の石材
図版42—A	石鎌	T 12	サヌカイト	1.7	
B	"	T 27 黒褐色土層	"	1.7	
C	"	T 14 "	"	0.7	
D	"		"	1.5	無茎平基式
E	"	SX 03	"	0.8	無茎凹基式
F	"	T 29 表採	"	0.8	"
G	"	T 8	"	0.8	"
H	"	T 14 表採	"	0.8	"
I	"	暗褐色土層 T 21 (溝状凹み内上層)	"	1.2	"
J	"	T 1 灰褐色土+ 褐灰砂質土	"	1.4	"
K	"	T 21—SD 12	"	1.1	"
L	石錐	T 5 淡褐灰色土層	"	1.2	
第15図—I 1	不明	"	鉄器	—	薄い鉄板状を呈す。
I 2	政和通宝	T 10 包含層	宋銭	—	初鑄年1111年
I 3	不明	T 33 "	鉄器	—	武器の可能性あり。
第17図—B 1・2	臼玉	T 1・5 出土	滑石	—	孔径 2mm前後、厚さ1.4 ～3.8mm、稜線をもつものもある。
第47図—B 4～13	臼玉	T 9—SX 08	滑石	—	
B 3	有孔円板	" "	" (淡緑灰色)	—	横方向の研磨を施し周 縁は面取りする。

第3表 土器観察表

検査番号	器種	手法・形態の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第4図一 1	埴形土器	精製土器。内外面共にいねいなヨコナデ仕上げ。焼けひずみ、黒斑あり。	棕褐色	精良	普通	復元実測
2 鉢	内外面共にヨコナデ仕上げ。		明橙褐色	精良	普通	復元実測
3 梗	体部上半はヨコナデ、下半から外底部にかけてはヘラケズリを施す。内面はヨコナデ～任意ナデ仕上げ。		灰褐色～明橙褐色	微砂含む	良好	火だしき状斑紋あり。
4 高杯	杯部はタテハケ調整の後、ナデ仕上げ、内面はヨコナデ仕上げ。		白橙褐色 赤橙褐色	微砂多含	普通	杯部接合痕をよく残す。
5 瓢	口縁部はヨコナデ仕上げ、体部内面には粘土紐接合痕・指頭押圧痕をよく残す。		赤橙褐色	精良	良好	復元実測
第6図一 6	高杯	精製土器。内外面共にヘラミガキで仕上げる。杯部に黒斑を残し、やや焼けひずみがある。	黄橙褐色	精良	普通	完形品
7 瓢	内外面共にヨコナデ仕上げ。体部内面には指頭押圧痕と粘土接合痕を残す。		淡橙褐色	微砂多含	普通	復元実測
8 蓋	須恵器。短頸蓋の蓋でつまみ部を欠失する。		淡灰色	精良	良好	復元実測
9 蓋	須恵器。有蓋高杯の蓋。		淡灰色	精良	良好	自然釉
10 製塙土器	外面には斜方向のタタキ、内面には指頭押圧痕を残す。		灰褐色	微砂含む	普通	復元実測
11 高杯	内外面共にナデ仕上げ。杯部は丸味をもっている。		白橙褐色	精良	普通	完形品
12 蓋	須恵器。天井部と体部の境は突堤となる。		暗灰青色	精良	良好	復元実測
13 杯	須恵器。立ちあがりは高いが、端面に段はみられない。ろくろは時計逆回り。		暗灰青色	精良	良好	完形片
第13図一 14	變形土器	逆L字口縁を貼付け、刻み目を施す。ヘラ描き平行沈線は12条以上	棕褐色～灰色	砂粒含む	不良	
15 變形土器	ヘラ描き平行沈線11条以上。		橙褐色	砂粒多含	軟質	外傾接合
16 鉢形土器	外面はタテハケ調整の後ヘラミガキで仕上げる。内面も同様。口縁部は貼付け。		黑灰色～淡橙褐色	雲母を多く含む精良土	良好	容量約7ℓ。外傾接合
17 壺形土器	頸部のヘラ描き平行沈線は3条以上。体部はタテハケ調整の後ヘラミガキ。内面には指頭痕、弾力のある硬目の工具（板・皮など）によるナデ調整痕を残す。		灰褐色	砂粒多含 (石英、長石)	良好	ほぼ完存。外傾接合
18 壺形土器	体部外面下半にはヘラミガキ痕跡を残す。内面には指頭押圧痕を残す。		灰褐色～黒灰色	〃	普通	器表剥落顯著。外傾接合
第14図一 19	小型器台か	内外面ヨコナデ仕上げ。	明橙色	精良	良好	復元実測
20 器台	精製土器。体部外面は細かなタテハケ調整の後、ヘラミガキ。		白褐色	砂粒多含	普通	復元実測
21 台付楕	恣意的なナデ調整が施される。やや粗雑なつくり。		橙褐色	〃	普通	復元実測
22 高杯脚部	上半は横位のヘラミガキ、下半は細かいハケ調整。		明橙褐色	精良	良好	完形片
23 壺口縁部	体部はタテハケ調整を施す。		明橙褐色	微砂含む	良好	復元実測
24 壺口縁部	外面はヨコナデ後、タテハケ調整、内面には暗文風の斜方向ヘラミガキを施す。		赤橙色	砂粒多含	良好	復元実測
25 瓢	体部上半は横位のタタキ、下半外底部にかけてはハケ調整、内面はカギ目調整を施す。		白褐色	〃	〃	完形品
26 瓢	外面はナデ調整、体部内面は荒いハケにナデ、ヘラケズリ調整で仕上げる。		橙褐色	〃	〃	復元実測
27 瓢	外面は横位のタタキにタテハケ調整が加わる。内面はヘラケズリの後、一部ナデ調整が施される。		黑灰色～灰褐色	粗砂多含	普通	復元実測
28 瓢	口縁部は簡描き平行沈線を施す。		橙褐色	雲母多含	良好	復元実測
29 瓢	口縁部のみタタキを残す。内面はユビナデ調整。		褐白色	粗砂含む	普通	復元実測
第15図一 30	壺形土器	体部にヘラ描きによる複線鋸歯文を描く。4条を一単位とする。素地は横位のヘラミガキ。	明橙褐色	微砂多含	普通	T 5出土

插図番号	器種	手法・形態の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第15図— 31	壺形土器	やや浅いヘラ描きで6条を単位とする複線鋸歯文が施される。内面には指頭圧痕を残す。	橙褐色	微砂含む	良好	T 5出土
32	壺形土器	2条のヘラ描き沈線の下に3条のヘラ描き重弧文を描く。内面はヨコハケ調整痕を残す。	灰黒褐色	砂粒含む	普通	T 2出土
33	異形土製品	周縁部は丸味をもつ。幅3.8~4mmのヘラ描き沈線をひきその中に連続刺突文を加える。	白橙褐色	微砂多含	不良	弥生中期に比定 T 2出土
第16図— 34	壺形土器	ヘラ描き沈線は3条以上。その間に梢円形の連続刺突文を加節する。口縁端部には刻み目を施す。	明橙褐色	◆	普通	邑久者古館藏品に多く みる形状
35	無頬壺か	8条のヘラ描き沈線の下位に三角形の連続刺突文を施す。口縁上端には連続棒状圧痕文を施す。	白橙褐色	◆	◆	T 6出土
36	壺形土器	口縁端面には羽状刺突文、上面には貼付け突帯2条をめぐらし竹管文で加節する。外面は斜行ハケ調整	白褐色	赤色砂粒 多含	◆	T 7出土
37	蓋	須恵器。退化した扁平なつまみをもつ。天井部には灰緑色の自然釉がかかる。	淡灰色	精良	堅穀	T 7出土
38	瓦器皿	上半はヨコナデ、下半から外底部にかけて指頭押圧痕を残す。内面には暗文を施す。	灰黒色	粗砂わずか	普通	T 2出土
39	土師器皿	扁平な皿、外底部はヘラオコシ。	淡橙褐色	精良	◆	T 2出土
第25図— 40 47	縁釉陶器	第1表参照。				
第28図— 48	壺形土器	3条の貼付け突帯の上位に、貼付け弧状文様を飾る。	白橙褐色	砂粒多含	良好	
49	◆	3条の貼付け突帯を飾り、刻み目を施す。	淡橙褐色	◆	◆	赤色砂粒含む。
50	◆	4条を1単位とする貼付け突帯を体部上位に2段飾る。体部はヘラミガキで平滑に仕上げられる。	赤橙褐色	微砂をわざかに含む	◆	外傾接合
51	◆	口縁端部はやや肥厚する。ヘラ描き沈線1条以上。	白橙褐色	◆	◆	◆
52	◆	口縁端面には1条の細い沈線が施される。	◆	◆	◆	◆
53	◆	口縁端部下端には刻み目が施され、端面には1条の沈線がめぐる。頸部はヘラミガキ調整。	赤橙色	◆	◆	◆
54	◆	ヘラ描き平行沈線6条以上。	暗橙褐色	砂粒多含	◆	
55	◆	ヘラ描き平行沈線4条を1単位とする。器表はタテナデ。	白橙褐色	粗砂多含	◆	外傾接合
56	◆	体部はタテハケ調整後、上半をヘラミガキで仕上げる。内面はヨコナデ・任意ナデで仕上げる。外底部はユビナデ。	淡灰褐色	◆	◆	小型の壺
57	鉢形土器	外面は斜行ケズリ後ナデ仕上げ。内面は板あるいは皮状の硬目の工具で横位の調整を行い、下半はヘラミガキ。	灰黒褐色	砂粒含む	◆	外傾接合
58	◆	口縁部は下がり屈曲する。体部はヨコナデ後ヘラミガキ。	灰褐色	◆	◆	
59	壺形土器	板・皮状工具によるタテ方向のナデ調整。内面は任意ナデ、外底部はヘラケズリによる調整を行う。	橙褐色	◆	◆	外傾接合
60	蓋形土器	外面はタテハケ調整、内面は部分的なヘラミガキ。	◆	砂粒多含	やや 良好	
61	鉢形土器	外面はヨコナデ・ナデ調整、内面は横位の荒いハケ調整。	赤橙色	砂粒含む	良好	
62	◆	体部上位に瘤状の把手がつく。口縁部には棒状工具による刻み目が飾られる。	灰橙褐色	砂粒多含	◆	
63	壺形土器	外面はていねいなヘラミガキで仕上げる。内面は、硬目の板・皮状工具によるナデ仕上げ。	橙褐色	◆	◆	
64	鉢形土器	内外面共にヘラミガキで仕上げる。	淡褐色	砂粒多含	◆	
65	壺形土器	内外面共にヘラミガキで仕上げ、内面は平滑。	黄褐色	雲母多含	◆	外傾接合
第29図— 66	壺形土器	口縁部には刻み目を施す。体部はタテハケ調整後、13条のヘラ描き沈線を施し径8mmの円形溝文を下位に飾る。	灰黄橙褐色	砂粒多含	普通	外面には焼付着
67	壺形土器	66と同様、ヘラ描き平行沈線は12条。体部内面下半は、硬目の板・皮状工具による斜行ナデ調整。	淡橙褐色	雲母を多く含む砂粒多含	良好	外傾接合

插図番号	器種	手法・形態の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第29図一 68	菱形土器	口縁部内側はやや突出する。ヘラ描き平行沈線は3条。	灰黒色	砂質多含	良好	外傾接合
69	〃	ゆるく外方する口縁部をもつ。口縁部には刻み目を施す。	灰橙褐色	〃	〃	古いタイプ
70	〃	口縁部は逆L字形貼付けで、ヘラ描き平行沈線は8条以上。器壁は薄手で、内面は荒いナデ調整後、ヘラミガキ。	赤橙褐色	〃	〃	
71	〃	口縁部には細長い円形の連続刺突文を施す。体部上位にはヘラ描き平行沈線2条を施し、横位のヘラミガキ。	赤橙褐色	〃	〃	外傾接合
72	〃	外面はタテハケ調整、内面上位は細かなヨコハケ調整。	灰褐色	〃	やや良好	〃
73	〃	やや上方する口縁部には刻み目が飾られ、体部上位にはヘラ描き平行沈線8条を施す。	白橙褐色	〃	普通	外傾接合 容量約4.6ℓ
74	〃	口縁部は逆L字形貼付けで刻み目が飾られる。ヘラ描き平行沈線は9条。	明橙褐色	〃	良好	外傾接合
75	〃	ヘラ描き沈線は10条以上、下位に三角形の刺突文が施される。	〃	〃	普通	〃
76	〃	体部外面はタテナデ、内面は弾力性のある硬目の板・皮状工具による横方向の調整を施す。	白橙褐色	粗砂多含	良好	〃
第30図一 77	鉢形土器	体部上位に瘤状の突起を貼付ける。体部は荒いハケ調整を施し、内面は板・皮状工具による横方向の調整を施す。	灰橙色	砂粒多含	〃	瘤は2個
78	菱形土器	5・6本を1単位とする簡描き平行沈線を3条描く。その下位に連續刺突文を飾る。内面は横位のヘラミガキ。	黄橙色	微砂を含むも精良	〃	
79	壺形土器	3条を1単位とする横位の貼付け突帯に2本1単位の棒状浮文を加飾する。	明赤橙色	砂粒多含	〃	
第31図一 80	〃	外反する口縁部は丸味をもって終る。内外面共にナデ調整痕を残す。外傾接合	淡橙褐色	〃	普通	古いタイプ
81	〃	口縁端部にはヘラ描き沈線がめぐり、下位には刻み目を施す。上面には3条の貼付け突帯を飾る。	暗橙褐色	〃	〃	
82	〃	3条の貼付け突帯には布巻棒状压痕が節られる。	淡黄褐色	〃	良好	
83	小形丸底壺	ていねいなヨコナデ調整で仕上げる。黒斑あり。	橙褐色	精良	〃	完形品。SX 03出土
84	高杯	屈曲部は明瞭で脚部はていねいなヨコナデ調整を施す。	白橙色	〃	〃	SX 03出土
85	甕	口縁部外面はヨコナデ、他はていねいなハケ調整を施す。	黄橙色	石英微砂多含	不良	SX 03出土
86	椀	須恵器。やや異形の椀で高台部を欠失する。	黒灰色	微砂多含	良好	T 5出土
87	杯	須恵器。体部には凹凸がある。高台は貼付け。	灰青色	〃	〃	〃
88	皿	須恵質土器。外底部は糸切底。	黒灰色	〃	不良	〃
89	杯	須恵器。内面に火ダスキあり。	白灰色	〃	良好	〃
第35図一 90	鉢形土器	低い台が付けられる小形の鉢。	白褐色	〃	普通	完形品
91	高杯形土器	主にていねいなヘラミガキで仕上げる。	明橙褐色	精良	良好	
92	鉢形土器	底部はやや厚い円板を貼付けている。	淡褐色	砂粒多含	普通	完形品
93	壺形土器	体部最大径部分に貼付突帯風の縦が2条貼付けられたと推定される。内面には指頭押圧痕を残す。	橙褐色	〃	〃	
94	菱形土器	体部内面は横位のヘラケズリ、外面はタテハケ調整。	白橙褐色	微砂多含	〃	
95	〃	体部外面はタテハケ、内面は横位のヘラケズリ調整。	白橙褐色	微砂多含	不良	
96	〃	同 上	〃	〃	普通	
97	〃	体部外面はタテハケ、内面は上半が横位、下半が縦位のヘラケズリ調整。	灰褐色～淡橙褐色	〃	〃	完形品 容量3.5ℓ
98	〃	体部外面はタテハケ、内面は上半が斜行、下半が縦位のヘラケズリ調整。	灰橙褐色	砂粒多含	〃	完形品 容量約6.7ℓ
第36図一 99	鉢形土器	外面は横位・斜行の荒いハケ調整を行い、内面は横位のヘラケズリ調整後、縦位のヘラミガキを施す。	淡灰褐色	砂粒をわずかに含む	〃	完形片復元 容量約26ℓ

插図番号	器種	手法・形態の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第39図—100	台付鉢形土器	「く」の字形に屈曲する口縁部をもち低い台部がとりつけられる。	赤橙色	微砂多含	不良	完形品
101	器台形土器	錐状の貼付け突帯とヘラ描き鋸歯文で飾り、透孔は5個みられる。精製土器。	明橙褐色	精良	良好	
102	高环形土器	脚部片。透孔は4。	黄褐白色	砂粒多含	普通	
103	〃	同上	橙褐色	精良	〃	
104	〃	杯部。内外面共にヘラミガキ調整で仕上げる。	白褐色	砂粒多含	不良	
105	〃	杯部。器表面の調整は比較的ていねいであるが剥落あり。	明橙褐色	微砂多含	普通	
106	〃	杯部。器表面の調整はていねい。	橙白色	微砂少含	〃	
107	〃	杯～脚部。透孔は2段にわたり、上段は2個、下段は5個施される。ヘラミガキ調整で主に仕上げられる。	赤橙褐色	精良	〃	
108	〃	杯～脚部。透孔は2段にわたり、上段は2個、下段は5個穿たれる。脚部は高く優美な形態を示す。	淡橙褐色	微砂多含	〃	
109	菱形土器	外面はナデ仕上げ、内面は縦位のヘラケズリ調整を施す。	淡褐色	精良	不良	容量約1.9ℓ
110	〃	外面はタテハケ、内面は上半を横位、下半を縦位のヘラケズリ調整を施す。外面には煤付着。	橙褐色	砂粒多含	普通	完形品 容量約1.85ℓ
111	〃	体部外面上半は、斜行タタキをすり消す。下半はタテハケ調整で仕上げ、内面は横位・縦位のヘラケズリ調整。	白橙褐色	微砂多含	良好	完形品 容量約3.4ℓ
第40図—112	小形円面鏡	須恵質で、圈足鏡と推定。陸部はやや平滑、海部との境界には突唇風の立ちあがりが認められる。	灰青色	砂粒含む	〃	SE 03覆土中出土
113	転用鏡	須恵器蓋を反転したもの。墨痕が認められ平滑。	〃	〃	〃	T 5出土
第42図—114	青磁碗	同安窯系の青磁片と推定。	灰緑色	精良	〃	
115	瓦器碗	外面の一部、内面に暗文が施される。	灰黒色	〃	普通	
116～119	瓦器皿	体部上位はヨコナデ、下位は指頭押圧痕を残す。内面には暗文を施す。117は黒色に発色しない。	灰黒色～ 黄橙色	微砂含む	〃	
120	鍋形土器	外面上位はタテハケ、下位は荒いカキ目調整を施す。内面は口縁部を横位のカキ目、体部はハケ調整で仕上げる。	赤橙褐色	砂粒多含	良好	
第44図—121	壺形土器	頸部上位に貼付け突帯をめぐらし口縁端部と同様に刻み目を施す。	白橙褐色	〃	やや 良好	
122	製塙土器	体部外面には横位のタタキが観察される。	灰赤橙色	〃	〃	
123	〃	体部外面には部分的なタタキと、ナデ調整が施される。	黄褐色	〃	〃	
124	〃	極めて薄い体部外面には横位のタタキが施され、内面には指頭押圧痕を残す。	黄白色	精良	軟質	完形片
125	椀形土器	内外面ナデ調整を施す。	黄褐色	砂粒含む	普通	完形品
126 127	高杯	内外面ナデ調整を施し、126には一部ハケ調整も認められる。	〃	砂粒多含	〃	124と共に
第46図—128	ミニチュア土器	手づくねの鉢形土器。口縁部には刻み目を稚拙に表現する。	灰黒色	精良	〃	復元実測。T 9出土
129	壺形土器	複線鋸歯文を赤色顔料（丹）で描く。貼付け突帯ではさまれた部分が文様帶となる。	白褐色	微砂多含	良好	T 9出土
130	〃	やや浅目のヘラ描き沈線で有軸木葉文を描く。	橙褐色	微砂含む	〃	T 27—SD 06
第48図—131	ミニチュア土器	手づくね土器で椀を形づくる。	淡橙褐色	精良	普通	白玉共伴
132	〃	手づくね土器で壺を形づくる。	橙白色	微砂含む	〃	〃
第50図—133	壺形土器	外面は横位のヘラミガキを施し、体部上位に段を形成する。内面は指頭押圧痕を残し、弾力のある工具でヨコナデ仕上げを施す。	赤褐色～ 淡灰白色	砂粒含む	良好	復元実測
134	〃	体部上位に段をつくる。	赤褐色	〃	〃	外傾接合
135	〃	細いヘラ描きによる複線鋸歯文が体部上位にみられる。	赤橙褐色	微砂多含	普通	

捕図番号	器種	手法・形態の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第50図一 136	鉢形土器	口縁端部は平坦な面をなす。体部内面下半は荒いヘラミガキ、体部外面は荒いヨコナデ調整を施す。	赤橙褐色	微砂多含	良好	器壁一部剝落
137	蓋形土器	外面はヘラミガキで仕上げる。中央部には貫通する孔が穿たれる。	黒灰色～橙褐色	◦	◦	
138	甕形土器	体部外面は縦位のハケ調整、内面は横位のヘラケズリを施す。	淡橙褐色	◦	普通	外面には煤が付着する。
139	器台形土器	口縁部外面・上端面に櫛状工具による波状文を描く。前者は3条一単位、後者は4条一単位とする。	黒灰色～橙褐色	◦	不良	
140 141	鉢形土器	いずれも体部の内外面は、ナデおよび指頭押圧による調整を行う。140にはふきこぼれによるものか、白色付着物がみられる。	赤橙褐色	砂粒多含	良好	製塙土器か。
142	杯	須恵器。外底部はヘラオコシ後ナデ仕上げ。	暗灰色	微砂多含	不良(軟)	
143	◦	須恵器。外底部にはヘラオコシ後高台を貼付ける。外底部下端は高台よりも下位に位置する。	◦	◦	◦	
第52図一 144	壺形土器	頸部下位にヘラ描き平行沈線3条を施す。沈線の断面形は三角形を呈す。主にヘラミガキ調整を施す。	暗橙褐色	砂粒多含	良好	SD06最下層出土
145	◦	頸部下位片で、幅広なケズリダシ突常に2条のヘラ描き平行沈線を施す。	淡褐色	◦	◦	
146 147	◦	内外面共にヘラミガキで仕上げる口頸部片。口縁端面はやや肥厚する。	橙褐色	砂粒砂含む	◦	
148	◦	口頸部下位にヘラ描き平行沈線5条を施す。体部外面は縦位のナデ調整後、ヘラミガキで仕上げる。内面は口頸部は横位のヘラミガキ、体部は横位の板・皮状工具によるナデ調整がみられる。	◦	赤色酸化砂粒目立つ。 砂粒多含	◦	ほぼ完形片 外傾接合 容量約7.5ℓ
149	◦	無頸壺か。体部上位に3個一组の刺突文をめぐらす。	◦	砂粒含む	◦	
150	聰か	櫛描き波状文が頸部下位に描かれる。	青灰色	精良	◦	
151	杯	須恵器。外底部には高台を貼付ける。	淡灰色	微砂含む	◦	
152	◦	須恵器。外底部にはやや外方する高台を貼付ける。	灰青色	◦	◦	
153	椀	体部上位にはヨコナデ、下半には指頭押圧痕を残し、高く外方する高台を付ける。	淡赤褐色	◦	普通	
154	◦	体部外面はヨコナデ調整で仕上げる。高台下端面には、壺状繊維圧痕が残る。高台は細長く外方する。	赤橙色	精良	普通	
第55図一 155 156	製塙土器	体部外面はヘラケズリで仕上げる。内底部は円板充填。	黄褐色～灰黒褐色	砂粒多含	良好	包含層出土
157	壺形土器	外面はタテハケ調整後、ヨコナデ調整で仕上げる。	白褐色	精良土	普通	◦
158	甕形土器	外面はナデ調整で仕上げる。	淡黃橙色	砂粒含む		SE 05出土
159	◦	外面はナデ仕上げ、内面は横位のヘラケズリ調整。	灰褐色	微砂含む	良好	◦
160	◦	口縁部下半はカキ目調整、内面は斜行ハケ調整。	白褐色	砂粒多含	普通	◦
161	◦	口縁外面はヨコナデ、内面は斜行ハケ調整。	◦	◦	◦	◦
162	高杯	杯部には黒斑あり。	橙褐色	◦	◦	◦
163 165	◦	脚部外面はヨコナデ仕上げ、内面は横位のヘラケズリ調整を行う。	淡橙褐色	微砂多含	良好	◦
166	甕形土器	小形で、内面は指頭押圧痕を残す。	橙褐色	◦	◦	SX 10出土
167 168	壺形土器	やや異形の壺口頸部で、通常の長頸壺より細く端面はやや肥厚する。168には2段にわたって凹線文帯がめぐり下段の下には連続刺突文がめぐる。内面はいずれもナデ仕上げ。	淡橙褐色	◦	普通	◦
169	高杯	杯部片。外面はヨコナデ、内面は横位あるいは放射状のヘラミガキで仕上げる。	白黃褐色	◦	◦	◦
170	◦	杯部片。体部は大きく外反し、内面はヘラミガキで仕上げられる。	橙褐色	◦	良好	◦
171	甕形土器	体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ調整を施す。	灰黒褐色	◦	普通	◦

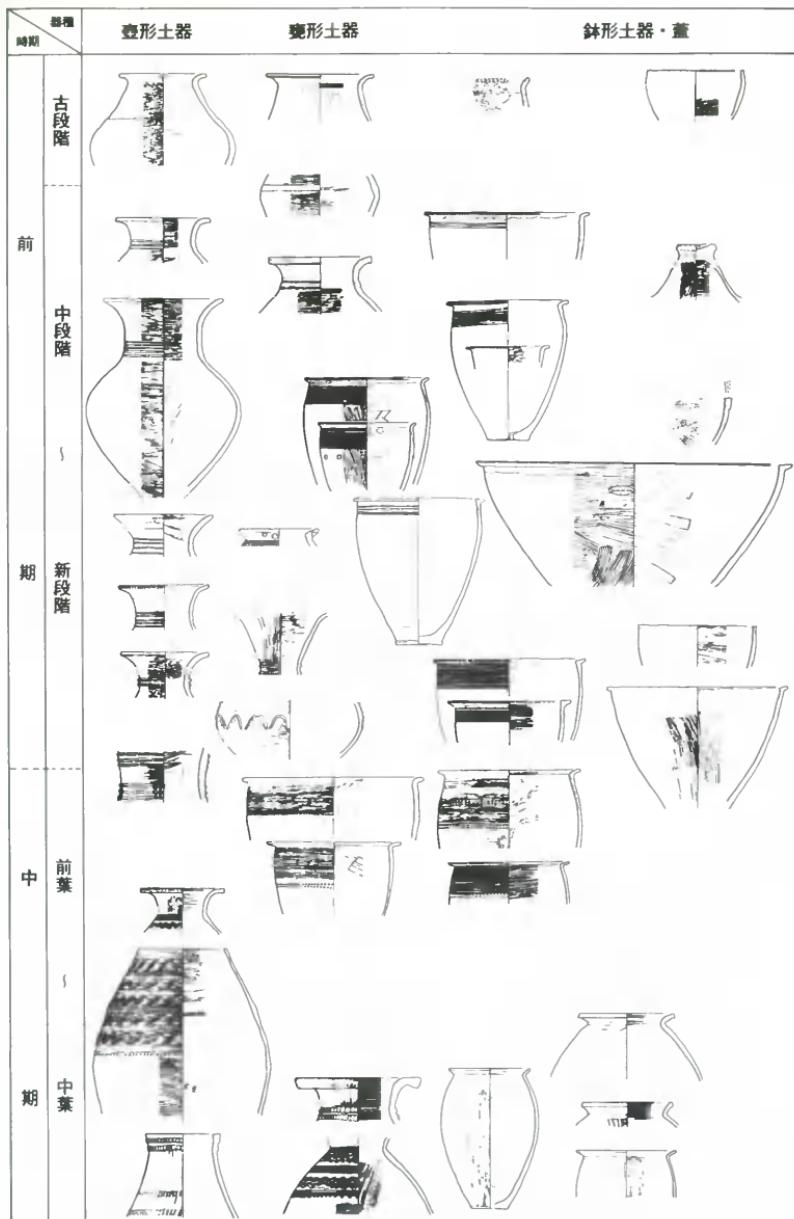
挿図番号	器種	手法・形態の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第55図一 172	壺形土器	口縁部には煤付着。171と同様手法。	白黄褐色	微砂多含	不良	SX 10出土
173	◆	口縁部は拡張が顕著で段がつく。171と同様手法。	灰橙褐色	砂粒多含	◆	
第63図一 174	壺形土器	口縁端面にヘラ描き斜格子文を描く。	明橙褐色	粗砂含む	良好	
175	壺形土器	やや小形。口縁端面には刻み目をめぐらす。内面は横位のヘラミガキを施す。	暗灰褐色	微砂多含	不良	T 32北隅出土
176	◆	櫛描き平行沈線を施し、その下位に2個1単位の連続刺突文をめぐらす。	白黄褐色	◆	普通	
177	◆	体部上位に4本1単位の櫛描き平行沈線を4条描き、下位に連続刺突文をめぐらす。内面はヘラミガキ調整。	棕褐色	微砂小含	良好	T 32北隅出土
178	◆	内外面共にヘラミガキが施される。外底部は二次的な焼成を受け器表が荒れています。	淡褐灰色～棕褐色	砂粒多含	◆	
179	◆	底部中央に穿孔、瓶として使用、内外面共にヘラミガキを施し内面は荒い。	白黄褐色	◆	◆	底部完存
180	鉢形土器？	台部で、外底部は扁平、体部外面はヘラケズリ。	淡褐色	◆	◆	
181	壺形土器	やや太目の櫛描き平行沈線文と波状文を描く。前者は6条、後者は5条施され、最下位には連続刺突文をめぐらす。体部下半は横位のヘラミガキで仕上げ、内面上位と同様である。内面下位は指頭押圧痕が残す。	赤橙褐色	◆	◆	T 32南隅出土
182	壺形土器	口縁部にはさかかな櫛描き平行沈線が観察される。	淡橙褐色	微砂多含	普通	T 16出土
183	器台か	口縁上端面にはS字形刺突文をめぐらす。口縁外面にはやや荒い波状文をめぐらす。	褐灰色	雲母多含	◆	T 10出土
184	蓋	須恵器。天井部と体部の境界は鋭く突堤状をなす。	灰青色	微砂多含	良好	◆
185	杯	貼付け高台をもつ須恵器	淡灰色	精良	◆	◆
186	◆	須恵器。外底部はヘラオコシ。	青灰色	微砂多含	普通	◆
187	椀	須恵器。外底部は糸切。体部内外面には凹凸が目立つ。	暗青褐色	◆	堅緻	T 10—SE 06
188	白磁碗	口縁端面は平坦面をなす。	白色	精良	◆	T 16出土
189	皿？	須恵器。外底部は糸切底。	灰白色	◆	普通	T 32出土
190	皿	外底部はヘラオコシ。	暗橙褐色	砂粒多含	◆	◆
191	擂鉢	須恵質で5本一単位のカキ目を施す。内面には煤付着。	灰青色	◆	良好	◆
192	鍋	外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整。	黄白色	◆	普通	◆
193	擂鉢	赤色に発色していない前焼で6条一単位のカキ目を放射状に施す。	青色	粗砂含む	良好	
第66図一 194	椀	外底部は糸切底、体部外面は凹凸を残し内面はていねいなヨコナデで仕上げる。	赤橙褐色	精良	◆	SX 11出土
195	壺形土器	口縁端部は肥厚する。ヘラ描き平行沈線は4条以上。内外面共にヘラミガキ調整を施す。	褐灰色～黄白色	砂粒多含	◆	T 12包含層出土
196	◆	口縁上面には貼付4突帯、端面には斜格子文を描く。	黄橙褐色	◆	◆	◆
197	◆	口縁上面には刻み目を施された突帯2条がめぐり、口縁端面にも刻み目文が施される。	赤橙褐色	◆	◆	◆
198	◆	内外面共にヘラミガキ調整を施す。	◆	◆	◆	◆
199	◆	体部はヘラ描き平行沈線文で飾り、突帯をめぐらす。	灰褐色	◆	◆	◆
200	◆	口縁端面には、ヘラ描き沈線を1条めぐらし刻み目文を加飾する。口縁上面には棒状の貼付け突帯文を飾る。	赤橙褐色	◆	◆	◆
201	◆	頸部下位にケズリダシ突帯状の肥厚帯がめぐる。粘土接合部分にあたりややぶ厚い粘土の肥厚部をナデて形成された肥厚帯である。体部内外面はヘラミガキで仕上げる。	黄橙褐色	微砂含む	◆	◆
202	壺形土器	逆L字形の貼付け口縁に刻み目文が施される。体部外面はタテハケ内面は横位のヘラミガキ、ハケ調整を施す。	黄橙白色～黒褐色	砂粒含む	堅緻(良好)	T 12包含層出土 外傾接合

捲戻番号	器種	手法・形態の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第66図一 203	甕形土器	逆L字形の貼付け口縁に刻み目文が施される。体部上位に16条のヘラ描き平行沈線文を飾る。内面はナデ調整。	灰褐色～暗橙褐色	粗砂を多く含む	良好	T 12包含層出土 外傾接合
204	◇	丸味をもってやや肥厚する口縁部、体部上位に櫛描き平行沈線文をめぐらし、下位に刻み目をもった施文具による刺突文を飾る。内面は横・継のヘラミガキ調整を施す。	淡灰黄褐色	微砂多含	普通	◇
205	◇	204より鋭く屈曲する口縁部、体部上位には櫛描き平行沈線文をめぐらせ下位に2個1単位の刺突列点文を飾る。内面は細かな横位のヘラミガキで仕上げる。	明橙褐色	◇	良好	◇
206	◇	体部上位にはタテハケ調整の後、櫛描き平行沈線文をめぐらす。内面は細かな横位のヘラミガキで仕上げる。内面にはこげつき痕跡があり灰黒色を呈す。	灰橙褐色	◇	◇	◇
207	◇	刺突文を加節した逆L字貼付け口縁を形づくり。約10本を1単位とする櫛描き平行沈線文をめぐらす。	黒褐色～赤褐色	◇	◇	◇
208	◇	櫛描き平行沈線文をめぐらせ、その下位に円形浮文を貼付ける。約6mm間隔で7～5mmの浮文がめぐる。	暗灰褐色	◇	普通	◇
209	壺形土器？	底部中央部に穿孔。体部外面はヘラミガキ、内面は硬目の工具によるナデ調整を施す。	赤橙褐色	◇	良好	◇
210	壺形土器	9本を1単位とする櫛描き平行沈線文・波状文を飾る。	黒褐色	◇	普通	◇
211 212	◇	体部上半に半截竹管施文具による波状文・平行沈線文をめぐらせる。体部下位はタテハケ後、ヘラミガキ調整。	明黄橙色	◇	良好	◇
第67図一 213	蓋形土器	内外面共にヘラミガキ調整。上端部はくぼむ。	灰赤橙色	粗砂多含	◇	SD 03上層
214	壺形土器	やや上方する口縁部の内外面には赤色丹彩が施される。2か所穿孔が認められ、蓋が付属することを示す。体部上位にはヘラ描き平行沈線文をめぐらす。	淡黄橙褐色	微砂含む	◇	◇
215	◇	口縁端面に長円形の刺突文をめぐらす。	灰黄褐色	微砂多含	◇	◇
216	◇	内外面に丹彩が施される。口縁部上面には刻み目を施された突帯を貼付け加節する。	灰褐色～黒褐色	粗砂多含	◇	◇
217	◇	頭部下半にヘラ描き平行沈線8条をめぐらす。外傾接合。	赤橙褐色	砂粒多含	◇	◇
218	◇	体部最大径部分に3条の貼付け突帯をめぐらし、その下位に半円形の貼付け文様を連続的に加節する。	黒灰色～灰色	◇	◇	◇
219	甕形土器	刻み目を施された逆L字口縁を示す。	黄褐色	微砂含む	◇	◇
220	鉢形土器	体部内面は横位のヘラミガキ調整を施す。口縁端面は平坦面をなす。器表外面は荒れが目立つ。	黒褐色	砂粒多含	◇	◇
221	甕形土器	体部上位には櫛描き平行沈線3条を1単位としてめぐらし、2個1単位の円形刺突文を飾る。体部下半はヘラミガキ調整を施し、内面はやや粗い斜行ヘラミガキを施す。	黄橙褐色	微砂多含	◇	◇
第68図一 222 223	円板形土製品	いずれも甕形土器の体部を利用して作った円板で、周縁はていねいに面取りされる。	灰褐色～白黃褐色	◇	◇	◇ 前期に比定
224	壺形土器	内外面共にていねいなヘラミガキ調整が施される。頸部下位に刻み目を施された貼付け突帯が2条めぐる。	暗褐色	砂粒多含	◇	SD 03中層～下層上位
225	◇	頸部下半に4条のヘラ描き平行沈線をめぐらす。	橙褐色	◇	◇	◇
226	◇	頸部下位に4条以上のヘラ描き平行沈線をめぐらす。内外面共にヘラミガキ調整を施す。	明橙褐色	粗砂多含	◇	◇
227	◇	体部最大径部分に3条の刻み目を施す貼付け突帯をめぐらす。	黄橙褐色	精良	◇	◇
228	◇	頸部下位外面にはヘラ描き平行沈線を3条以上をめぐらし、内面には貼付け突帯をめぐらす。	橙褐色	砂粒含む	◇	◇
229	甕形土器	ゆるく外反する口縁部には刻み目が施される。体部上位には6条のヘラ描き平行沈線をめぐらす。	◇	砂粒多含	◇	◇
230	壺形土器？	体部外面にはタテハケ調整後、部分的に横位のヘラミガキ調整を施す。	黒褐色	◇	◇	◇
231	甕形土器	逆L字形の貼付け口縁部にはあらかじめ1条の沈線がめぐらされている。体部上位には3条のヘラ描き平行沈線がめぐる。	黒褐色～暗灰褐色	◇	◇	◇

挿図番号	器種	手法・形態の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第70図— 232	壺形土器	彎曲する口縁部には刻み目が施される。体部上位には、3条のヘラ描き平行沈線がめぐらるが、沈線間の間隔はやや広い。	橙褐色	砂粒多含	良好	SD 03 中層～下層出土
233	◆	逆L字形貼付け口縁部をもつ。体部上位にヘラ描き平行沈線7条をめぐらす。	◆	◆	◆	◆
234	鉢形土器	口端縁部は内傾して折り曲げ、更に逆L字口縁を貼付ける。	黄橙褐色	◆	◆	SD 03 下層出土
235	◆	内外面ヘラミガキ調整を施す。	暗橙褐色	◆	◆	◆
第72図— 236	壺形土器	下位に細かい刻み目をもつ2条の貼付け突帯をめぐらす。内外面共にヘラミガキによる調整を行う。	黒灰色～橙褐色	◆	◆	◆
237	◆	体部上半は横位のていねいなヘラミガキ調整を施し、2条の刻み目をもつ貼付け突帯をめぐらす。	黄橙褐色	微砂多含	◆	◆
238	壺形土器	逆L字形貼付け口縁部には刻み目が施される。上位には4条のヘラ描き平行沈線をめぐらす。	明橙褐色	◆	◆	◆
239	◆	やや突出して長目のL字口縁が貼付けられる。体部上位には9条のヘラ描き平行沈線がめぐる。	灰橙褐色～黒褐色	粗砂多含	◆	◆
240	◆	刻み目を施される口縁部をもつ。体部上位にはヘラ描き平行沈線7条をめぐらせる。内面のヨコナデは、弾力のある硬目の板・皮状工具により、端面が明瞭に残る。底部中央に焼成後の穿孔が認められる。	黄橙褐色	◆	◆	(完形品) 容量3.3ℓ
241	鉢形土器？	体部外面は板状工具によるタテナデの後、ヘラミガキ調整を行う。	橙褐色	◆	◆	SD 03 下層出土
242	壺形土器？	内外面ナデ調整を施す。	◆	◆	◆	◆
243	壺形土器	内外面共に斜行ヘラミガキ調整を施す。	灰褐色	粗砂含む	◆	SD 03 上層出土
第74図— 244	◆	ヘラ描き平行沈線の下位に3条のヘラ描き沈線で鉤弧文を描く。	◆	◆	◆	◆
245	◆	有軸木葉文。	黄褐色	微砂多含	良好	◆
246	◆	ミニチュア土器で、体部上位に沈線にはさまれた鋸歯文を表現する線刻が描かれる。	赤橙色	精良	◆	
247	◆	壺形土器体部の上位に径約3cmの孔が焼成前につくられる。頸部と体部の境には竹箸文風の刺突文がめぐる。	淡橙褐色	微砂のみ含む	◆	T 32出土
248	埴？	須恵器。口頸部下位に櫛描き波状文をめぐらす。	灰青色	精良	堅敏	T 13出土
249	高杯	須恵器。体部下半に櫛描き波状文をめぐらす。	暗灰青色	◆	◆	◆
第76図— 250	製塙土器	体部外面には横位の平行タタキを施し、内面には板状工具によるヨコナデ調整を施す。	赤橙褐色	砂粒含む	良好	SX 12出土
251	鉢形土器	口縁端面は平坦面をなす。内面は斜行ハケ調整を施す。	◆	◆	やや良	◆
第78図— 252	高杯	内外面ナデ調整を施す。	白橙褐色	◆	普通	T 32出土
253	甕	内面は荒いハケ調整、体部外面はタテハケ調整を施す。	黄褐色白色	◆	良好	◆
254	◆	体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ調整を施す。	橙褐色	砂粒多含	◆	◆
255	甕底部	内面には粘土輪積痕跡を残す。外面には煤付着。	◆	◆	◆	◆
第81図— 256	蓋形土器	内外面共にていねいなヘラミガキで仕上げる。	◆	微砂含む	◆	SD 08出土
257	壺形土器	頸部下位のケズリダシ突帯に1条のヘラ描き沈線をめぐらす。内面は横位のヘラミガキを施す。	黄褐白色	砂粒多含	◆	◆
258	◆	口縁部には刻み目を施す。頸部下半にはタテハケ調整後5条のヘラ描き平行沈線を施す。	淡黄褐色	◆	◆	◆
259	◆	頸部下位に貼付け突帯2条をめぐらす。	灰橙褐色	◆	◆	◆
260	◆	体部最大径のやや上位にケズリダシ突帯をめぐらす。体部外面は横位のヘラミガキ調整を施す。	黄橙褐色	砂粒含む	◆	T 17基盤層直上層出土 容量約1.3ℓ
261	壺形土器	逆L字貼付け口縁には刻み目が施される。体部上位には7条のヘラ描き平行沈線がめぐる。	橙褐色	微砂多含	◆	T 17基盤層直上層出土
262	◆	体部外面は荒い斜行ハケ調整。内面はヨコナデ後、任意のヘラミガキを施す。	◆	砂粒多含	◆	SD 08出土

捕団番号	器種	手法・形態の特徴	色調	胎土	焼成	備考者
第81図— 263	壺形土器	体部外面は荒いヘラミガキ、内面は斜行ナデ調整を施す。	橙褐色	砂粒多含	良好	SD08出土
264	壺形土器	口縁部は逆L字形貼付け。体部上位にヘラ描き平行沈線3条をめぐらす。体部外面はタテ・斜行ナデ調整を施す。	灰橙褐色	〃	〃	〃
265	〃	体部外面はタテナデ、内面は斜行ナデ調整を施す。	淡灰黄色	〃	〃	〃
266	壺形土器	口縁部には刻み目を飾る。頸部下位には櫛描き平行沈線、体部上位に櫛描き波状文を加飾する。	暗褐灰色	微砂多含	普通	T 17北隅出土
267	壺形土器	口縁部は上下方に拡張し凹線がめぐる。体部外面は細かなタテハケ調整を施す。	明橙色	精良	〃	T 17包含層下層出土
268	〃	口縁部は267と同様。体部外面はヨコハケ調整。	明白橙色	〃	〃	〃
第83図— 269	壺形土器	櫛描き平行沈線・波状文をめぐらす。	褐白色	砂粒含む	良好	〃
270	高杯	脚部の上位・下位に細い凹線文帯をめぐらす。穿孔は2段にわたる。	赤橙褐色	微砂含む	普通	T 17包含層
271	椀	体部外面は縦位のヘラケズリ後、荒いナデ調整を施す。	赤褐色	砂粒多含	良好	〃
272	杯	須恵器。立ちあがり端面には段がつく。受部は平坦	青灰色	精良	堅敏	T 17上層
273	壺	須恵器。頸部上半に櫛描き波状文をめぐらす。	灰青色	〃	良好	〃
274	〃	須恵器。外底部には大きく外方する高台が貼付けられる。	淡青灰色	〃	普通	〃
第84図— 275	鏡形土製品	土師質で、手づくね痕を残す。鉢は欠失している。	淡黄橙色	砂粒含む	普通	T 15
第86図— 276	壺形土器	体部上位にケズリダシ突帯をめぐらせヘラ描き沈線を加える。下半はヘラミガキで仕上げる。	暗黄褐色	砂粒多含	不良	T 15出土
277	〃	口縁端面に刻み目を飾る。頸部下位にヘラ描き平行沈線7条をめぐらせ、体部は横位のヘラミガキで仕上げる。	黒褐色	微砂多含	普通	〃
278	壺形土器	口縁端面には刻み目を施し、体部外面上位には2条のヘラ描き平行沈線をめぐらす。	黄褐色	砂粒多含	〃	〃
279	〃	体部上位に櫛描き平行沈線文をめぐらし、その下位に2個一単位の刺突文を飾る。内面は斜行ハケ調整を施す。	赤橙褐色	微砂多含	良好	〃
280	杯	須恵器。体部と天井部の境は突帯をなす。	灰青色	精良	〃	〃
281	ヰ	器壁は薄手で、体部外面はタテハケ調整で仕上げる。	白橙褐色	〃	不良	〃
282	甕	体部外面は荒いヨコハケ調整を施し、他はヨコナデ。	淡白黄色	粗砂多含	普通	〃
第91図— 283	壺形土器	貼付け逆し字口縁には横円形の刺突文をめぐらす。体部上位には8条のヘラ描き平行沈線文をめぐらす。体部内面は横位のヘラミガキ調整で仕上げる。	淡黄橙色		良好	SD 09上層出土
284	〃	貼付け逆し字口縁には横円形の刺突文をめぐらす。体部上位には14条のヘラ描き平行沈線文がめぐる。283と相似形を示し、同一作者の手になるか。	橙褐色	微砂多含	〃	〃
285	壺形土器	口縁上面に2条のヘラ描き重弧文をめぐらし、その周縁に竹管文風の刺突文を飾る。	赤橙褐色	砂粒多含	普通	SD 09上層
286	〃	頸部中位にかすかなヘラ描き沈線を1条めぐらす。内面は横位のヘラミガキを施し指頭押圧痕を残す。	〃	〃	〃	SK 08出土
287	〃	口縁端部には羽状刺突文をめぐらせ、上面には貼付突帯文を飾り刻み目文が加飾される。裏面にも突帯を飾る。	淡橙褐色	〃	〃	T 21包含層
第94図— 288	壺形土器	体部上位にヘラ描き平行沈線17条をめぐらし、その下位に三角形の刺突文を飾る。	淡灰黃褐色	砂粒多含	不良	SD 10出土
289	壺形土器	体部には指頭押圧文突帯を4条めぐらす。	灰橙褐色	〃	普通	T 22出土
290	〃	口縁部に貼付け突帯をめぐらし、その上に刻み目を施す。	灰褐色	微砂含む	〃	〃
291	〃	口縁端部には斜行刻み目文を施し、頸部下位には指頭押圧文突帯を2条めぐらす。	淡灰褐色	〃	良好	T 22—SD 10出土
292	〃	体部には櫛描き平行沈線文・波状文をめぐらし下位に長方形の刺突文を飾る。下半は横位のヘラミガキ調整を施す。	淡橙褐色	〃	普通	T 19—SD 10出土
293	〃	体部外面は縦位のヘラミガキ、内面はタテナデ調整。	橙褐色	微砂多含	良好	T 22—SD 10出土

持図番号	器種	手法・形態の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第94図一 294	壺形土器	口縁部の下位には2条の押圧文帯をめぐらせ、体部上位には2条の櫛状工具による5個1単位の刺突文帯を飾る。	赤橙色	微砂多含	普通	T 22—SD 10出土
295	壺形土器	体部外面には煤付脊。内面は縦位のヘラミガキ調整。	淡灰褐色	〃	〃	〃
296	〃	口縁端部はやや肥厚する。口縁部内面には横位の細かいヘラミガキ。体部内面はタテハケ調整で仕上げる。	淡橙褐色	〃	良好	〃
297	〃	体部外面はタテハケ調整を施す。	橙褐色	〃	〃	
298	〃	中央よりややずれた位置に焼成後、正円を描く穿孔。	赤褐色	微砂少含	普通	T 22—SD 10出土
299	〃	体部外面には縦位のヘラミガキ調整。底部穿孔。	〃	〃	〃	T 22包含層
300 301	〃	体部外面には縦位のヘラミガキ、内面は縦位のナデ調整を施す。底部周線はヨコナデ調整。	橙褐色	微砂多含	良好	〃
302	〃	体部外面にはタテハケ調整後のヘラミガキを施す。	灰褐色	〃	普通	容量約2.5ℓ SD 10上層
第98図一 303	ミニチュア 土器	壺形土器を忠実に模し、口縁端面には刻み目をめぐらせ、体部にはヘラ描き平行沈線や刺突文を飾る。	暗赤橙色	微砂少含	良好	T 24出土
第101図一 304	製塩土器	器壁は薄手で外面には横位のタタキを施す。	黄白色	〃	軟	SK 09出土
305	椀	内外面共にヨコナデ調整で仕上げる。	橙色	微砂多含	不良	〃
306	鉢形土器	口縁部は粘土を貼付け肥厚帯をめぐらし、3条のヘラ描き沈線文を加える。口縁上端にもヘラ描き沈線をめぐらす。	橙褐色	〃	良好	T 31出土
307	〃	口縁下位に2個1単位の刺突文をめぐらす。内面は縦位のヘラミガキ調整を施す。	灰橙褐色	〃	普通	〃
第106図一 308	壺形土器	有輪木葉文。2条のヘラ描き平行沈線にはさまれた文様区画に対角線を結び木葉文を描く。	橙褐色	〃	良好	T 26出土
第110図一 309	碗	瓦器。内面には暗文が施される。	灰黒色	精良	〃	SD 13出土
310	〃	土師質土器。体部下半には布目压痕が残る。内面にはスプーン状工具によるカキトリ痕を残し平滑なナデで仕上げる。外底部には高い高台を貼付ける。	黄白色	砂粒含む	〃	〃
311	〃	須恵器。外底部は糸切底。	灰白色	精良	堅緻	〃



第111図 弥生式土器（前期～中期中葉）器種変遷図（1-10）

図版 1



1. 門田貝塚航空写真（北上空から）（邑久町教育委員会提供）



2. 門田貝塚中心部分（西から）

図版 2



1 . T 2 遺構検出状況 (東から)



2 . T 4 遺構検出状況 (南から)



3 . T 2 -SK 02 検出状況 (北から)

図版 3



1. T 2—SE01土器出土状況（北から）



2. T 2—SE01全景（北から）

図版 4



T 2—SD02 (南から)

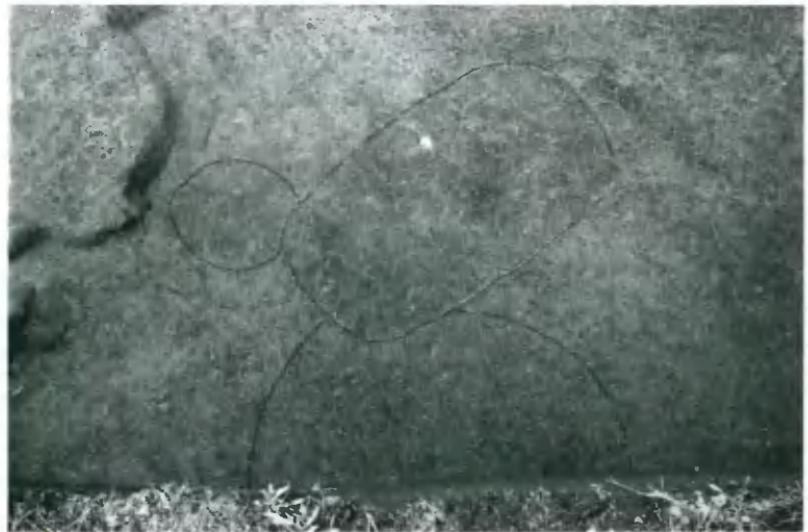


2 . T 2—SK03完掘状況 (北から)

図版 5



1. T2—SE02完掘状況（東から）



2. T3—SK04検出状況（北から）

図版 6



1. 調査区南半部の状況（南東から）



2. T3—SB01西端柱穴（南から）

図版 7



1. T 3—SB01中央柱穴（南から）



2. T 4—SB02全景（北東から）

図版 8



1. T 4—SB02南端柱穴（東から）



2. T 4—SB02中央柱穴（東から）

図版 9



1. T 4—SB02北端柱穴（東から）

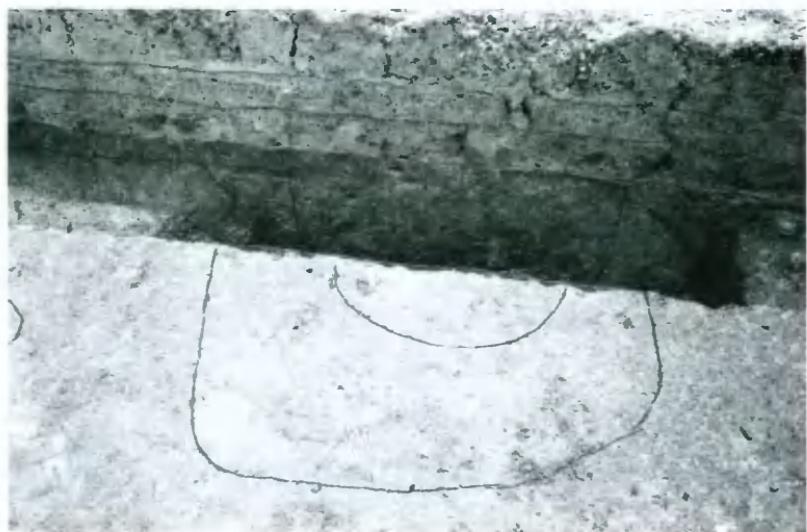


2. T 6—SD03検出状況（西から）

図版10



1. T 6 北隅遺構検出状況（東から）



2. T 6 — SP03検出状況（西から）

図版11



1. T7—SD04検出状況（東から）



2. T7—SD05検出状況（東から）

図版12



1. T7—SD05土器集中部分（東から）



2. T7—SX06完掘状況（西から）

図版13



1. T7—SE04完掘状況（西から）

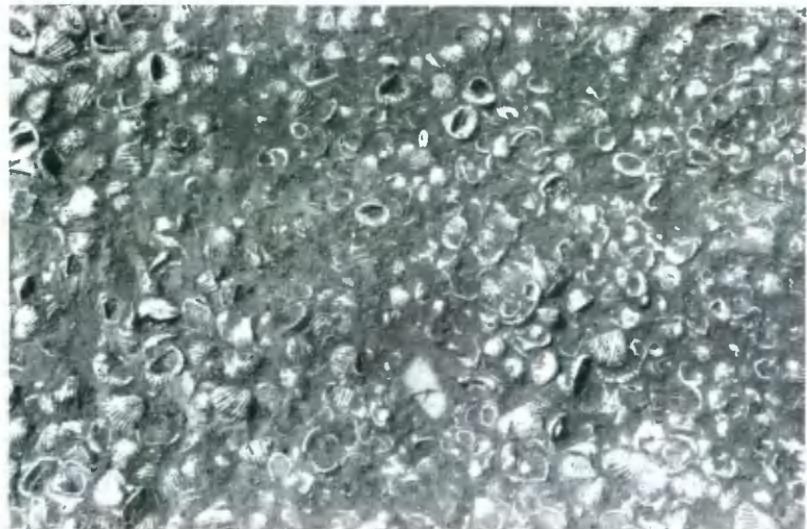


2. T9—SD06上面貝層検出状況（北から）

図版14



1. T9—SD06上面貝層（南から）



2. T9—SD06貝層清掃状況（北から）

図版15



1. T27—SD06完掘状況（西から）



2. T18遺構検出状況（南西から）

図版16



1 . T18—SD06完掘状況（西から）



2 . T18—SX07検出状況（東から）

図版17



1. T14—SX10検出状況（南から）



2. T12—SX11完掘状況（東から）

図版18



1. T12—SD03掘り下げ状態（南西から）



2. T12南隅SD03土層断面（北から）

図版19



1. T12北隅SD03土層断面（南から）



2. T12—SD03下層獸骨出土状況（西から）

図版20



1. T13—SX12検出状況（北から）



2. T13—SX12土器出土状態（東から）

図版21



1. T10遺構検出状況（南から）



2. T10—SP04検出状況（西から）

図版22



1. T10—SP05検出状況（東から）



2. T10—SE06検出状況（西から）

図版23



1. T10—SE06完掘状況（南西から）



2. T15遺構検出状況（北西から）

図版24



1. T24遺構検出状況（西から）

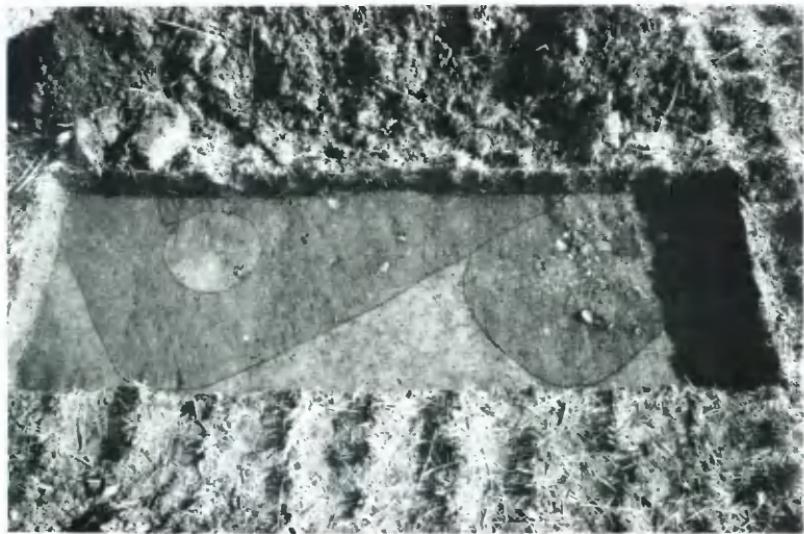


2. T25遺構検出状況（南西から）

図版25



1 . T25—SK09完掘状況（北から）



2 . T28遺構検出状況（西から）

図版26



1. T26遺構検出状況（南から）



2. T30-SD13検出状況



1. T19—SD09・10完掘状況（北から）



2. T23遺構検出状況（南から）



3. T19北隅SD10土層断面（南から）

図版28



1 . T21—SD10完掘状況（北から）



2 . T21—SD10南壁土層断面（北から）

図版29



1. T22—SD10土器埋積状況（東から）



2. T19—SK08検出状況（東から）

図版30



弥生式土器・土師器・須恵器・綠釉陶器

図版31



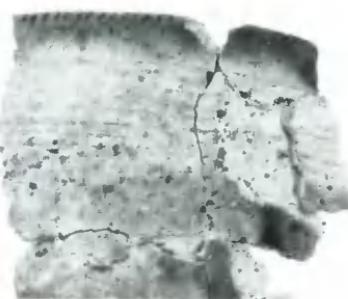
66



72



67



73



74



82



83

弥生式土器・土師器

図版32



77



90



97



98



100



101



108  
弥生式土器



109



110



99



111



112



113



121



SE04出土瓦器 (115~119)



122



129



130

弥生式土器・瓦器・製塩土器・木葉文土器・彩文土器

図版34



B 3



B 4~13 (1 : 1)



144



148



177



187



203



204

臼玉・弥生式土器・須恵器



図版36



216



218



231



232



240



238



244



255

弥生式土器・重弧文土器・木葉文土器

図版37



ミニチュア土器・須恵器・弥生式土器・鏡形土製品

279

図版38



287



303



305



306



302



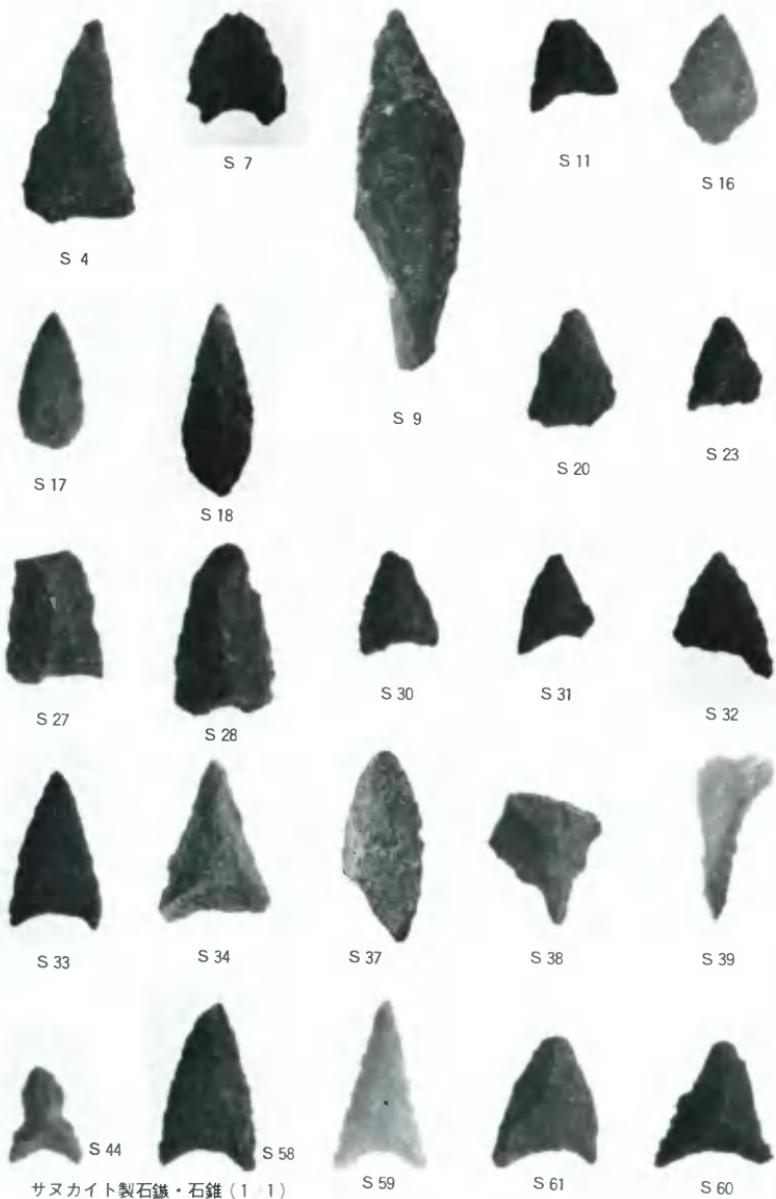
A 1

A 2

A 3

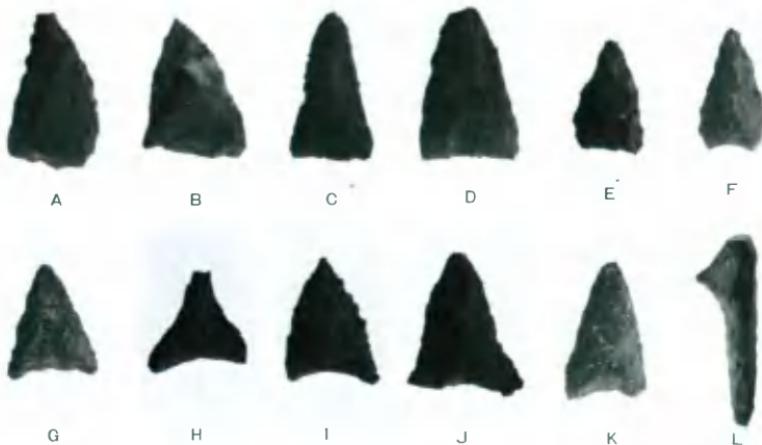
弥生式土器・土師器・ミニチュア土器・木葉文土器・骨角器

図版39



サヌカイト製石鎌・石錐(1/1)

図版40



サヌカイト製石鎌 (A~K) 石錐 (L)



石錐・石斧・石庖丁・砥石

図版41



S 52



S 54



S 65



S 66



S 62



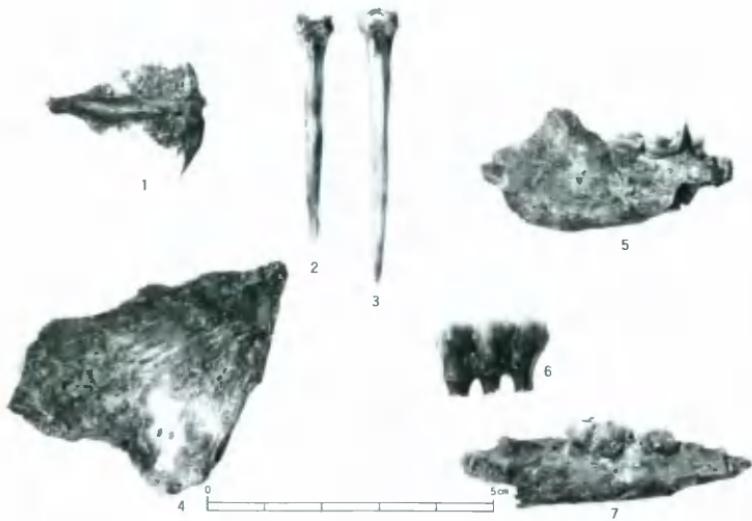
S 67

石庖丁・石斧・砥石

図版42

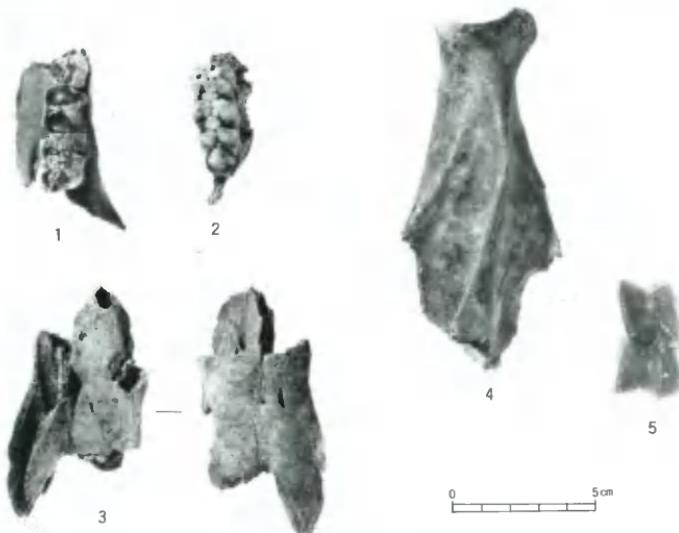


1. ウミニナ 2. ウミニナ 3. アカニシ 4. オオタニシ 5. ハイカイ



1. クロダイ左主鰓蓋骨  
2・3. クロダイ臀鰭第2棘  
4. ホラ類左主鰓蓋骨  
5. タヌキ右下頬骨片  
6. ニホンジカ右第4乳臼歯  
7. ニホンジカ右下頬骨 (右dm 2・3), 6, dm 4 も同一のもの

図版43



イノシシ 1. 上顎左 (P 4 ~ M 2) 2. 下顎左 (M 3) 3. 下顎連合部 4. 左肩甲骨 5. 左距骨

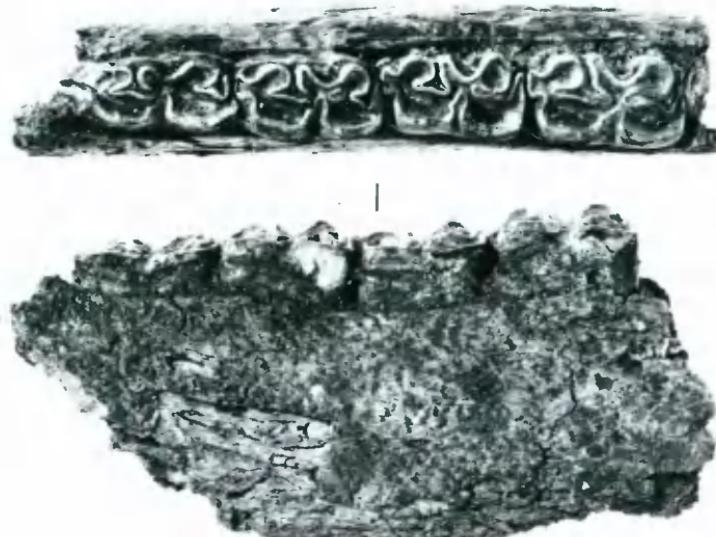


ニホンジカ (1 ~ 7)  
・イノシシ 1. 前頭骨片  
2. 鹿角 (角坐骨を一部つける) 3. 右下顎骨  
4. 左肩甲骨 5. 右胫骨 6. 中足骨  
7. 右距骨 8. 左距骨

図版44



ニホンジカ角 1. 右側角（落角） 3. 角分岐部 5. 左前頭骨  
2. 右角幹部 4. 角幹部 6. 右角坐骨と角  
角坐骨と角



2. ウマ右下顎骨片



**岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 55**

**門田貝塚**

1983年 3月 23日 印刷

1983年 3月 31日 発行

編集・発行 岡山県教育委員会  
岡山市内山下2-4-6

印 刷 西尾総合印刷株式会社  
岡山市津高651